

デート・ア・ガール 土織リリウム

才華

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

精霊：隣界に存在する特殊災害生命体、こちら側に現れる際に空間震を発生させる元
凶また戦闘能力も非常に高い。

対処法1：武力を以てこれを撃滅する。

対処法2：デートして、（女の子に）デレさせる。

目

次

十香編

運命の十日

士織の決断

訓練開始

再会

デート

救う者

四糸乃編

新しい家族

雨の少女

雨の少女Ⅱ

雨まだ止まず

231 210 188 166

143 109 80 51

28 1

折紙家へ

雨のち太陽

幕間

狂三編

転校生

345 325 291 259

十香編

運命の十日

「うう…」

四月十日、その日の寝起きは最悪だった。

妹が自分のお腹の上に馬乗りになりながらリズムを付けて体重を掛けてくるのだ、そりやあ寝起きが悪くなるというものだ、しかも妹は手をわきわきと動かしながら徐々に胸の方へと手を伸ばしてくる。

「おねーちゃん、早く起きないと…」

「琴里ー、起きた、起きたからー」

寝起き眼を擦り、寝起き特有の低い声でそう言うと、わきわきと動かしていた手を止めキラキラとした双眼を胸から顔へと向ける。

「おはよー、おねーちゃん！」

「ん…おはよう、琴里」

その後無事にお腹の上から琴里に退いてもらい先にリビングへと向かう様に伝えればお姉ちゃんと呼ばれていた少女『五河士織』はベッドから抜け出し身支度を整え始め

る。数分後リビングへと向かえばソファーに腰かけテレビを見ていた。しかし扉の開く音で気づいたのか視線をテレビから土織へと変え手をブンブンと振る。

「おねーちゃん、朝ご飯ー」

「うん、今から作るからもう少し待つてね琴里」

土織はそう言うとリビングに併設されているキッチンへと脚を進める。簡単な物で良いかなー等と考えながらキッチンに着き冷蔵庫を開け、一通りの材料を取り出し調理台へと置く、そして調理に掛かろうとする土織の手が琴里が見ている朝のニュース番組の音声で止まる。

『今日未明、天宮市近郊の…』

「ん…?」

聞きなれた地名にカウンターーテーブルから身を乗り出す様にしながらテレビの方を見るそこには中継映像だろうか、無残にも倒壊した商業ビルや陥没した道路などが鮮明に映っていた。

「空間震か…」

整った顔を少し曇らせながら土織は止めていた調理を再開する。

空間震、読んで字の如く空間の地震と称される広域振動現象の事である。

発生原因不明、発生時期、地域も不定期、被害は今日の様な街一つが被害を受ける様

な物から、三十年前に発生した当時のソ連、カザフスタン、モンゴル、中国の国境地帯で発生し死者行方不明者一億五千万を数える事になつてしまつたユーラシア大空災などがある。士織達が住むこの地域も例外ではなくユーラシア大空災から六か月後に発生した南関東大空災で被害に逢つている地域なのだ。

「一時期は全然起ころくなくなつてたつて話なのに、なんでまた増え始めたんだろう？」
「どうしてだろねー」

調理を続ける士織がそう口にするとテレビを見ている琴里がそう言いながら首を傾げる、そう五年程前、ここ天宮市で空間震が確認された頃を境に再び空間震が観測され始めたのである。勿論この二十五年の間に技術は進歩し空間震対応の地下シェルターや空間震の兆候を探知するシステムの開発など様々な対応策が出来つつあつた、また自衛隊内にも災害復興担当の部隊が創設されたりもした。

「けどこの街の近くとかも空間震多いよね？去年の夏頃くらいから」

「……んー、そーだねー。：ちよつと予定より早いかなー」

「？早いって何が？」

「んー、あんでもあーい」

士織は調理の手を止め首を傾げた。会話の内容よりもその発せられた少しくぐもつた声にだ、クロスで手を拭けば無言でカウンターを回り琴里の傍へと歩いてゆく、琴里

も流石に気づくのか土織から顔を隠す様に首を回す。

「こーとーりー、ちよつとこつち向いて」

「……」

琴里は土織の言葉に無言を突き通す。腰に手を当て、ふんすつと息を吐き出せば腕を伸ばし琴里の頭に手を乗せる。

「えい」

「ぐぎゅつ」

そのまま琴里の頭を方向転換させれば琴里の喉から変な声が出る。そして琴里の口元から伸びる白い棒を見れば土織は「もう、やっぱり」と嘆息しながら呟く。琴里は朝ご飯前だというのに大好物のチュッパチャップスをくわえていたのだ。

「もう、ご飯の前にお菓子食べちゃダメって言つてるじゃない」

「…めんなさい」

琴里は口からチュッパチャップスを取り出せばシュンとしながら謝る。

その様子を見た土織は少し困った顔を見せるがすぐに笑顔になれば妹の頭に手を乗

せくしゃくしゃと頭を撫でる

「もう、ちゃんと朝ご飯食べるんだよ」

「おー！ 大好きだぞおねーちゃん！」

士織はクスッと笑えば再びキツチンへと戻り調理を終わらせる。

「そういえば今日つて中学校も始業式だよね？」

リビングの椅子に座り朝食のトーストにマーマレードを塗りながら土織は思い出したように口を開いた

「そうだよー」

「それじゃあお昼には二人とも帰つてこれるね：琴里はお昼何か食べたいものある？」

琴里はトーストを口に咥えたまま思案する様に頭を揺らす、しばらくすればトーストを口から離す

「デラックスクイツズプレート!!」

その答えを聞けば士織はやや困り顔を浮かべる

「流石にそれは作れないかなー」

ええー

琴里はあからさまに不満げな顔を士織に対して向ける、対して士織は嘆息しながら、
けど微笑みを浮かべながら琴里に言葉をかける。

「それじゃ、お昼は外で食べよっか」

一
本
当
か
！

「うん、学校が終わつたらいつものファミリーレストランに集合ね」

土織がそう言えば琴里は興奮しながらトーストを持つ手をブンブンと振る

「絶対だぞ！ 絶対約束だぞ！ 地震が起きても火事が起きても空間震が起きてもファミレスがテロリストに占拠されても絶対だぞ！」

「流石に占拠されてたらご飯たべられないよ」

「絶対だぞー！」

「うんうん、絶対約束ね」

はしゃぐ琴里の様子を笑顔で見ながらそう答える、始業式だし、少しは贅沢しても良いよね。

まあ千円にも満たないお子様ランチが贅沢かどうかはわからないけど。

「それじゃ早くご飯食べて学校いこうか

「おー！」

士織が高校へと到着したのは午前八時十五分頃だった。

正面玄関前に張り出されたクラス表を確認し、一年間お世話になる教室へと向かう。

「二年：四組だよね」

士織が通う都立来禅高校は天宮市の再開発に伴い数年前に創設された学校の為、充実した設備と空間震が起ころる事を想定して作られた最新の地下シェルターも完備してい

る。その為か入試倍率はやや高かつたが普段から勉強をしていた士織にとつては余り変わりは無かつたのだが。

「んー…」

教室に入れば士織は小さくうなり、教室を見回す。

ホームルームまではまだ時間があつたが教室の席の殆どは既に埋まつている状況であつた。一年生の頃と一緒にだつたことを喜ぶ者や席に着き一人でいる者など反応は様々であつたが士織の見知った顔は見受けられなかつた。士織は視線を座席表が貼つてあるであろう黒板に向けると。

「——五河士織」

背後から不意に、抑揚のない静かな声がかけられた。

「え…？」

士織は聞き覚えのない声に振り向く。

そこには白いショートカットの髪と人形の様な顔をした細身の少女が立つていた。

人形の様な顔、そうその表現にピタリと当てはまる程端正な顔立ちと同時に彼女の顔には一切の表情が窺えないのだ。

士織は一度きよろきよろと周囲を見渡し彼女の指すイツカシオリさんが他に居ないことを確認すれば自らを指さす。

「…私？」

「そう」

目の前の少女はまっすぐ士織の顔を見ながら小さく頷く

「えつと…なんで私の名前を知ってるのかな…？」

「覚えていないの？」

「えつと…ごめんなさい」

「そう」

士織が申しわけなさそうに言うと、少女は抑揚のない声で一言そう言うと窓際の席へと歩いていった。

「やつ、士織ちゃん今日も一段と綺麗だね」

「お、おはよう…殿町君」

後ろから再び名前を呼ばれたが今回の声には聞き覚えがあつた為振り返りながら挨拶をする、振り返り相手の姿を確認すればやはり想定通りの人物が居た。ワックスで逆立てられた髪と筋肉質の体がトレードマークの士織の一年生の頃のクラスメイト殿町宏人だ、彼とは一年生の頃に一騒動あつた事が切つ掛けで知り合つたのだが事あるごとにアプローチを掛けてくるので士織としてはやや苦手な人であつた。

「けど意外だつたなー、士織ちゃんが鳶一と知り合いだつたなんて」

「鳶一さん？…えつと誰かな？」

「ほらさつきまで楽しそうにおしゃべりしてたじやん」

そう言うと殿町君はあざをいやくり窓際の席を示す。

そこには先ほど士織に声を掛けてきた少女が席に着き本を読んでいた、しかしこちらの視線に気づいたのか書面から目を外しこちらへと視線を向ける。

「……つ」

士織は気まずそうに目を背けるが、反面軟派な殿町君は馴れ馴れしく笑顔で手を振るが少女は一切の反応を返すことなく再び本へと視線を戻す。

「ねつ、あんな感じなんだよ」

「えつと、前のクラスに居たのかな？」

「鳶一だよ、士織ちゃん、鳶一折紙。うちの学校一の秀才、秀才どころか超天才って言つても過言じやない奴だよ、聞いたことない？」

「えつと……めん聞いたことないや」

私が首を振りながらそう言うと殿町君は信じられないという風に両の手を広げ驚いた顔をする、そんな反応をされると流石に傷つく。

士織が少し涙目になつていると殿町君は少しあたふたとしながら一度仕切りなおす為か咳払いをする。

「鳶一の成績は常に学年主席、この前の全国模試では全国トップの成績だつたんだよ」

「…そんな凄く頭が良いのになんで公立校に通つてるんだろう？」

「うーん、家の都合とかじやないかな」

殿町君は大仰に肩をすくめながら話を続ける。

「しかも体育の成績もダントツ、インターハイにも行けるレベルだ。それに去年の『恋人にしたい女子ランキング・ベスト13』でも第三位だつたんだ」

「へー、てゆうかそんなランキングあつたんだ…」

純粹に鳶一さんの成績は凄いと思う、特に自分の体育の成績はお世辞にもいい方ではないので一層そう思う。

「因みに…一位がだれかわかる?」

「へつ?」

「土織ちゃん、君だよ」

唐突な言葉にキヨトンとする、そんな私を見ながら殿町君は続ける。

「理由としては女子力の高さとか保護欲をくすぐる立ち振る舞いとかが主な理由かな、ちなみに『恋人にしたい男子ランキング』はベスト357まで発表されている。」「女子は少ないので男子は凄く多いんだね」

「主催者の女子が13位だつたんだ…」

それを聞くと士織はなんだか申し訳ない気持ちになつた。

「因みに殿町君は何位だつたの?」

「357位だよ」

「……えつと……」

どうしよう掛ける言葉が見つからない、途方に暮れそうになつていると聞きなれた予鈴が鳴つた、これ幸いとその場を離れまだ確認していかつた自分の席を確認しに向かう。

黒板に書かれた席順を確認すれば士織は窓側から数えて二列目の席に鞄を置く。

そこでやつと気づいた。

「……あ」

なにか縁でもあるのであろうか私の隣は鳶一さんの席だつた。

鳶一さんは予鈴が鳴り終わる前に読んでいた本を閉じ、机にしまう。

そして視線を前へと真っ直ぐ向け、美しい姿勢を作る。

「……」

私もそれに倣う様に視線を前に向ける、ちょうどそれに合わせる様に教室の前扉が開く、そして縁の細い眼鏡をかけた小柄の女性が現れ、教卓に着く。

それと同時に教室中から小さなざわめきが聞こえてくる。

「タマちゃんだ……」

「ああ、タマちゃんだ」

「マジで、やつりい」

聞こえてくるのは好意的かつまるで友達の事を話すような雰囲気でさえあつた。

「はい、皆さんおはよおござります。これから一年間、皆さんの担任を務めさせていただきます、岡峰珠恵です」

社会科担当の岡峰珠恵教諭・通称タマちゃんが間延びした声でそう言いながら頭をさげた。

その際にずれた眼鏡を慌てて両手で押さえる。生徒と同年代にしか見えない童顔と体躯、そしてのんびりした性格から絶大な人気を誇る先生である。そんな姿を苦笑しながら見ていたがふと視線を感じる、視線の方向を見れば左隣の席の鳶一さんが、じーっと、士織の方へと視線を送つてきていたからだ。

「……っ」

一瞬目が合うと私は慌てて視線を逸らす。

(な、なんなんだろう…私なにかしたかな…)

そんな風に考えながら、送られてくる視線に落ち着く事も出来ず、うなじにうつすらと汗をかく。

それから約三時間後。

「土織ちゃん、よかつたらランチを『ご一緒にしないかい?』

始業式終了後のざわめく教室で殿町君が大仰なポーズで頭を下げながらそう言つて
きた。

「ごめんね、今日は琴里とお昼ご飯たべる約束してるので」

「そうか…」

殿町君は返事を聞けば再び大仰なポーズをとりながら思案顔を浮かべる。
しかしふと顔を上げると意味深げな顔で切り出す。

「琴里ちゃんって中二だつたよね? 彼氏とか居るの?」

「えつと…そんな話は聞かないかな」

殿町君はその返事を聞くと一層の笑顔を浮かべる。

「琴里ちゃん、三つくらい年上の男つてどうかな?」

「…琴里は渡さないよ」

殿町君の言葉に私は机の上に置いていた鞄を掴むと下段に構える、その様子を見るな
り殿町君は大慌てで手を振りながら冗談だから冗談つと言つて手を振る。

私もその言葉に構えた鞄を元の位置に戻す、瞬間

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

突如として甲高いサイレンが校内中、いや街中に鳴り響く

殿町君が窓際歩いてゆき窓を開け外を見る。教室に残っていたクラスメイトも突如として鳴ったサイレンに目を丸くしている。

サイレンが鳴り止む、次いで聞き取りやすくするためか一泊ずつ区切るようにして音声が響く。

「——これは訓練では、ありません。これは訓練では、ありません。前震が、観測されました。空間震の、発生が、予想されます。近隣住民の皆さんには、速やかに、最寄りのシエルターに、避難してください。繰り返します——」

——空間震警報。

その言葉が出た瞬間クラスメイトが一斉に息を呑む音が教室に響いた。

「おいおい…マジかよ…」

殿町君が額に朝を滲ませ、乾いた声を出す。

しかし幼い頃からの訓練の賜物かクラスメイト達は緊張と不安をそれぞれ顔に浮かべているものの比較的落ち着いていた。

「シエルターはすぐそこだし、落ち着いて避難すれば平気、だよ。」

「そ、そうだね土織ちゃんの言うとおりだね」

私たちは既に教室から出始めているクラスメイトに続き走らない程度に急いで教室からである。

廊下に出ると既にシエルターに向かう生徒達で長蛇の列が出来ていた、私と殿町君は列に並ぼうとする、そんな中一人列と逆方向へと走っている女生徒が居た。

「鳶一さん…？」

その疑問の声は鳶一さんに届くことはなく彼女はそのまま走り去つていつてしまつた。

鳶一さんは忘れ物でも取りに行つたのだろうか、などと考えているとタマちゃん先生の声が聞こえてくる

「お、落ちついてくださいあーい！　だ、大丈夫ですから、ゆっくりいーー！　おかしですよ、おーかーしーー！　おさない・かけない・しゃれこうべーー！」

「…自分より焦っている人を見るとなんか落ち着くな」

「そういう事いっちやダメだよ…」

実際その通りでタマちゃん先生の声で幾分か緊張がほぐれている事も事実で生徒達も不安の色が薄れ正在する事がわかつた。

「琴里ちゃんと避難してますかな…」

私はそう呟くとスカートのポケットから携帯電話をとりだし、そしてアドレス帳の中

から『五河琴里』の名前を選び電話をかける。

——が回線が混んでいるのか一向に繋がらない、何度も繰り返すが結果はかわらない。

「繋がらない…琴里避難してるよね…」

私は言いようのない不安に駆られていた、思い出されるのは今朝の「——空間震が起きても——」という琴里の言葉だつた。

「け、けど流石に避難してるよね…あ、そういうば…」

私は再び携帯を操作しアプリの一覧からGPS利用の位置確認アプリを起動する、しばらくすると登録している琴里の携帯の位置情報が地図上に表示される。

「……嘘つ」

その表示を見て私は愕然とした琴里の位置を示すマーカーは約束のファミレスの位置にあるのだ。

「琴里つ…！」

私は携帯をポケットにしまい込むと列から抜け出し昇降口へと走る。

「土織ちゃん!？」

後ろから殿町君の声が聞こえたがそれを無視し走る、昇降口に着くと速やかにロー ファーに履き替え大急ぎで学校を飛び出す。

「琴里つ…琴里!!」

私はお世辞にも早いとは言えない脚を一生懸命に動かし走る、私の視界に広がるのは路上に遺棄された自動車や人気のない街並み、まるで人だけが一瞬で消えてしまったのではないかと錯覚する街並みであつた。

「はあつ…はあつ…」

私は走りながら再び携帯を取り出し画面を確認する、もしかしたらもう避難しているかも、等と淡い期待をしてみるもののやはりマーカーの位置は学校で確認した時と同じ位置のままだ、肺が痛い、わき腹も痛む、けど走る事はやめない。一刻も早く琴里の下に向かわないとい…、その一心だけで私は走る。

「つ…」

ふと空から聞こえてきた風切り音に走りながら私は空を見上げる。

「なに…あれ…」

士織は眉をひそめた。

数は四つか五つか。空に人影のようなものが浮いている。

けど何かを考える事は直ぐに出来なくなつた。

「きやつ…ツ!!」

私は立ち止まり目を手で覆つた。

突然進行方向にあつた街並みが光に包み込まれていたのだ。

一瞬後大地を搖るがすような爆音と、衝撃波が襲い掛かってきた。

私は腕で顔を守る様にし疲れきつた脚に力を入れたが衝撃波はそれを嘲笑うかの如くとも容易く土織を転がす。

「つ……一体何が……」

痛む体とチカチカと眩む目を擦りながら身を起こす。

「えつ……？」

私は目の前に広がる光景に驚愕した、なぜなら先ほどまであつた街並みがまるで消しゴムで文字を消すかの如く消えてなくなっていたのだ。

「な、なんで……どうして……？」

非現実的な光景に私は茫然とし、そう呟くことしかできなかつた。

けどそんな中、クレーターとなつた街の中心に何か金属の塊のようなものが聳えていた。

「あれは……なに……？」

遠い事もあり細かい形まではわからないが、まるでそう、王様が座る玉座のようにも見える。

だがそれよりもその玉座の肘掛けに足をかけるようにして、奇妙なドレスを身に纏つ

た少女が一人立っていた。

「なんであんなところに女の子が…」

顔はわからないが黒のロングヘア、そして不思議な輝きを放つスカートから女の子である事は間違いないと思う。

ふと少女が気怠そうに首を回し、私へとその顔を向けた。

「えつ…？」

私に気付いたのだろうか、遠すぎてわからない。

けど少女は動きを止めないゆっくりとした動作で玉座の背もたれから突き出た剣の柄のようなものを握るとゆっくりとそれを引き抜いた。

それは幅広い刃を持つ巨大な剣であった。

虹のような、はたまた夜空に輝く星のような幻想的な輝きを放つ剣。

少女が剣を振りかぶると、軌跡をぼんやりとした輝きが追う。

そして――

「……ッ!?」

私の方へと少女が剣を横薙ぎに振りぬいた。

とつさに頭をさげる。いや、正しく言うなら私の身体を支えていた腕から力が抜けた為に上体の位置が下がったのだ。

「——あ

今まで私の頭があつた位置を刃の軌跡が通り抜ける。
剣が届くような距離ではないのに、だ。

私は首を後ろに振り驚愕した後ろにあつた建物や街路樹、電灯などが全て同じ高さに
切り揃えられていたのだ、そして一瞬後に響き渡る崩落の音。

「あ……ああ……」

私も、もし身体が下がつていなかつたなら自らもあの様に切られていた。

その事実は私を恐怖の底に落とすのには十分すぎるものだつた。

「いや……いやっ!!」

私は恐怖のあまり抜けてしまつた腰を引きずるように後ずさる、早く少しでも早く逃

げないと……。

(琴里、琴里!!)

「——おまえも……か」

「……ッ!?」

ひどく疲れたような声が頭上から響いてくる。

そこには先ほどまでクレーターの中心に居た少女が立っていたのである。

「あ——」

私の口から意図しない声が漏れた。

歳は私と同じか、少し下くらいだろうか。

膝まで届くであろう漆黒の髪に、凜々しさと愛らしさを混在させた顔。

その中心にはプリズムや水晶に多様な色の光を多方向から当てているような、不思議な輝きを放つ双眸があつた。

装いは、また奇妙なものであつた布か金属かわからない素材で構成されたドレス、繫ぎ目やスカート部分に至つては不思議な光の膜で構成されている。

そして手には自らの身の丈程はあろうかという巨大な剣が握られている。
しかしそれ以上に同性である私の思考が止まる程に…。

——彼女は美しかつた。

「あなた、は…」

私の発した言葉に彼女の視線が私の方を向く。

「…名、か」

少女は悲しそうな声で語る

「——そんなものは、ない」

「……え？」

そして初めて私と少女の視線があつた。

そして名が無いといった少女はひどく憂鬱そうで泣き出しそうな表情を作りながら、力チャヤリという音を鳴らし剣の柄を握りなおす。

「ま、待つて、待つて！」

その小さな音は私に必死で声を上げる。

その声に少女は不思議そうな目を向ける。

「……なんだ？」

「な、何をしようと…っ！」

「無論——早めに殺しておこうと」

「な、なんで…どうして！」

「なんで…？　当然ではないか」

少女は物憂げな表所を浮かべながら言葉をつづける。

「…だっておまえも、私を殺しに来たんだろう？」

「え——？」

私はそんな彼女の表情に昔の自分を見たような気がした…。

「そんなわけない…」

「——何？」

私が言つた言葉に少女は猜疑心と困惑、そして驚きが入り混じつたような目を向け

る。

それも束の間少女は眉をひそめ、空へと顔を向ける。

私もつられるように空へと目をやる。

「え、えっ!?」

空には奇妙な恰好をした人間が数名飛んでいて——そして手にしている武器らしきものから、士織と少女に対してもミサイルを発射してきたのだ。

「つ、きやああああああ!!」

私は思わず叫び声をあげ目を瞑り無駄だと分かつていても頭を腕で守る。——だがいつまで経つても爆発や衝撃波襲つてこなかつた、私は恐る恐る目を開ける。

「え……？」

そして茫然と声を漏らす。

何故なら放されたミサイルは少女の数メートル上空で、まるで見えない手で掴まれているかのように静止していた。

そして少女は氣怠げに息を吐く。

「…そんなものは通用せぬと、なぜ学習しない」

そう少女が呟けば剣を握つていない手を上方へやり、グツと握つた。

すると静止していた何発ものミサイルがまるでペツトボトルを潰すかのようにへしゃげ、その場で爆発を起こす。それでも空を舞う人間達は攻撃の手を止める事はなく次々とミサイルを発射していく。

「——ふん」

少女は泣き出しそうな顔をつくりながら、息を吐く。
私は：その顔が先ほど感じたもの：幼い頃両親に捨てられた頃の自分とひどく重なつてみえた。

「…消えろ、消えろ。一切、合切……消えてしまえっ!!」

そう言いながら少女は手にした大剣を空に向け、一振りする。

瞬間空気を切り裂く音と衝撃波が襲い掛かり、振りぬいた太刀筋の先へと斬撃が舞う。

上空を飛行していた人間たちはそれを寸前で回避すれば、その場から離脱してゆく。が次の瞬間別方向から凄まじい威力の光線が放たれる。

「……！」

思わず目を覆う、しかしながら光線も見えない壁に阻まれ霧散する。
そして続くように私の後ろに誰かが舞い降りた。

「な、なんなの、次から次に…ツ」

もう意味が分からなくなってきた、まるで出来の悪いB級映画か悪夢の中に放り込まれた心境だ、目には既に涙が溢れ顔はくしやくしやになってしまっている。

しかし後ろに降り立つた人影を見て私は一層の驚愕を覚えた、全身を覆うボディースーツに背には大きなスラスター、手には巨大な武器を持っている、それだけでも驚愕を覚えるのには十分過ぎるものであつたが、それ以上に身に着けている人物に私は驚きを隠せなかつた。

「鳶一…さん…？」

そう後ろに立ち物騒な恰好をしている少女はクラスメイトの鳶一さんだつた
「五河士織…？」

鳶一さんは表情を変えず、私の方を向く。

そして怪訝そうな色を声にのせそう私の名前を呼んだ。

しかしすぐに鳶一さんは私から目を外し、ドレスの少女に向き直り手にした剣のような武器を構える。

「――ふん」

少女が先ほどと同じく手にした大剣を鳶一さんに向け振りぬく。

鳶一さんは地面を蹴り一瞬背中のスラスターを駆動し剣の太刀筋上から身をかわし、

そのままの勢いで少女に肉薄する。

そして手にした武器で少女に向け袈裟懸けに切りかかる。

「——ぬ」

少女は微かに眉を寄せ、手にした大剣でその一撃を軽々と受け止める。瞬間。

攻撃が交わった点から凄まじい衝撃波が生じる。

「ま、きやああああああ!!」

私は悲鳴を上げながら身を丸め衝撃をやりすごす。

鳶一さんは弾かれた衝撃を利用し一旦少女から距離を取り、武器を構え直す。

「……」

「……」

私を挟んで鎧の少女と鳶一さんが油断なく睨みあう。

一触即発…そんな状況であつた、きっかけがあればすぐに戦闘は再開するであろう。

私は声を上げ戦いを止めてもらおうとした、がその瞬間ポケットの中にしまっていた

携帯電話から着信音が鳴り響く。

それが再開のゴングとばかりに鎧の少女と鳶一さんが地を蹴り私の目の前で激突する。

「きやああああああああああっ!!」

その先ほどと比べ物にならない衝撃波に私は容赦なく吹き飛ばされ壇にぶつかる。

「や…やめて…」

そこで…私は意識を手放した。

士織の決断

「——状況は?」

真紅の髪をひるがえしその髪の色に合わせたかのような真紅の軍服を肩掛けにした少女は艦橋に入るなりそう言つた。

彼女の目の前、この艦の主が座るべき場所、艦長席の直ぐ隣に待機していた長身の男がまるでそある事が当然であるかのように綺麗な敬礼をし、少女を迎える。

「司令」

そんな男の挨拶に少女は男の脛を爪先、それも固いブーツで鋭く蹴りつける。

「あうっ！」

「挨拶はいいから、現在の状況を説明なさい」

少女はそう言いながらそのまま艦長席へと腰かけ足を組む。

男はさぞ痛がつてゐるのかと思われたが、むしろ恍惚つといった表情を浮かべていた

が、少女にそう言わればすぐさま姿勢を正し、きりりとした表情で艦長席の横へ立つ。
「はつ。精霊出現と同時に攻撃が開始されました」

「A S T？」

「そのようです」

A S T：対精靈部隊。

精靈を狩り、捕え、殺す為に機械で出来た鎧を身に纏つた、人間以上怪物未満の超人たち。

しかし超人レベルでは精靈に太刀打ちなどできない事もまた事実であつた。

「——現在確認されているA S Tの戦力は十名。現在内一名が精靈に対して追撃をかけています」

「映像出して」

少女がそう言えば艦橋の巨大な空間投影モニタに、リアルタイムの映像が映し出された。

繁華街から少し外れた広い幹線道路の上で二人の少女が互いに巨大な剣を振り、交戦している姿が確認できる。

互いの攻撃が交わる度に閃光と衝撃が発生し周囲の物を破壊しながら激しい戦闘を繰り広げる。

「やるじゃない。——ま、精靈相手じやどうしようもないけどね」

「確かにそのとおりです：が、我々が現時点で何もできない事もまた、事実です」

「……ふんっ」

少女は脚を振り上げれば速度の乗つた一撃で横に立つ男の爪先を踏みつぶす。

「ぐきつ!!」

男は先ほどと同じような幸せそうな表情を浮かべるが、少女はこれを無視し嘆息する。

「言われなくてもわかっているわ。——それに見ているだけにも飽きてきたところよ」「と、いうことは…」

「ええ。ようやく円卓会議から許可が下つたわ。：作戦を始めるわよ」

その言葉に、艦橋に居たクルー達の息を呑む音が聞こえる。

「神無月」

少女は背もたれに身体を預ければ小さく右手を上げ、煙草を要求するように男に向ける。

「はっ」

神無月と呼ばれた先ほどの男は懐から素早く何かを取り出す、それは小さな棒付きキヤンデイであった手早く包装を剥がせば、少女の隣に膝をつき「どうぞ」と向けられた手にキヤンデイの棒を挟み込む。

少女はキヤンデイを口に入れれば口から突き出た棒をピコピコと動かす。

「……そういうえば肝心の秘密兵器は？さつき携帯に電話したのに出なかつたのだけれど

ど。ちゃんと避難しているんでしょうね？」

「お待ちください、調べます」

男が手近にあるコンソールを操作しようとすると、目の前の大画面モニタを確認し怪訝そうに首を捻る。

「どうかしたの？」

「いえ、司令あれを」

男が画面を指さす。少女も指さされた場所を確認し「あ」と短い声を上げる。

精霊とAST隊員が激しい戦闘を繰り広げる横で、制服姿の少女が伸びていたのである。

「……ちようどいいわ。回収しちやつてちようだい」

「了解しました」

久しぶり

頭の中に、どこかで聞いたことのある声が響く。

やつと——やつと会えたね——
懷かしみ、そして慈しむような——

——嬉しいよ——でも——もう少し——もう少し待つていて——
あなたは……一体……誰……？

——もう絶対離さない——もう絶対に間違わないから——だから——
不思議な、しかし懐かしく感じる声は……そこで途切れた。

「…………ん……」

と私は目を覚ました。

「きやつ！」

とすぐさま悲鳴を上げる。

何しろ見知らぬ女性が指で私の瞼を開き、ペンライトのようなもので光を当てていた
からだつた。

「ん……目覚めたね」

眠たげな顔をした女性は、その顔に違わぬぼうとした声でそう言つた。

氣絶した私の眼球運動を確認していたようで、妙に顔が近い。シャンプーの香りだろ
うか、ふわりといい香りがする。
「ど、どなたですか」

「ん……ああ」

女性は身体を起こすと、垂れた前髪をかき上げる。

距離が少し空いたことで女性の全貌が見えた。

歳は二十歳くらいだろうか、軍服を身に纏い、無造作に纏められた髪、そして分厚い隈が目を引く顔、あとはなぜか胸ポケットから顔を覗かせる継ぎ接ぎだらけのクマのぬいぐるみが特徴的だった。

「……ここで解析官をやつている、村雨令音だ。あいにく医務官が席を外していてね。…ああ安心してくれ。免許こそないが、簡単な看護くらいはできる」

「え、えつと…」

どうしよう全く安心できない…と私は思つてしまつた。何故なら令音さんは身体を不規則に揺らしているからだ、目元の深い隈と合わせて見れば私よりよっぽど重症そうに見える。ふと私は首を振り周囲を見回す、私は簡素な作りのパイプベッドへ寝かされていたようだ、そしてベッドの周囲を囲むように白いカーテンが張られている。ちょうどそう、学校の保健室のような雰囲気だ、だが視線を上へと向けた所で違和感を覚える。天井には大小の配管が張り巡らされそれに這うように無数の配線がむき出しになつていた。

「こ、ここはどこですか」

「……ああ、ここは＜フラクシナス＞の医務室だ。気絶していたので勝手に運ばせても

らつたよ」

「〈フラクシナス〉…？それに気絶つて……あ」

そうだ私は謎の鎧の少女と鳶一さんとの戦闘に巻き込まれて…。

「そうだ、琴里…琴里は…」

そう私が戦闘に巻き込まれる切っ掛けとなつた事、琴里は無事なのか…

「あ、あの！、私の妹が…」

いてもたつてもいられず私は令音さんに声を発する、が令音さんはいつの間にか私に背を向けなにかしている様子であつた。

「……聞きたいこと、気になることはあると思うが、君に紹介したい人がいる。：私は説明下手でね。その人から詳しい話は聞くといい」

そう令音さんは言うと閉じていたカーテンを開く、カーテンの外は思ったよりも広い空間で同じタイプのベッドが六床並び、奥には医療機器だろうかいくつもの器具が置かれている。

令音さんはそのままふらふらと出入口の方だろうか歩いてゆく、が足をもつれさせ大きな音と共に壁に頭をぶつけた。

「だ、大丈夫ですか？」

私はベッドを抜け出せば令音さんの近くへといく。

転倒などはしなかつたが令音さんは壁に寄り掛かるようにしうめく。

「ああ…すまない。最近寝不足気味でね…」

「こ、こんなになるまで寝てないって…」

「ああ…かれこれ三十年は：寝ていなかな?」

「ええ!」

思わず声をあげる位それは衝撃的であつた、口をぱくぱくとする私に対しさもなんと
でもないと言う風に令音さんは言う

「…最後に睡眠をとつた日が思い出せないのは本当だ。どうも不眠症気味でね…と、失
礼、薬の時間だ」

そう言うと令音さんは懐から大量の錠剤が入つたピルケースを取り出す、そしてまる
で粉薬を飲むかのように大量の錠剤を口の中に放り込んだ。

「な、なにしてるんですか!!」

「ん?薬を飲んだだけだが…」

令音さんは何か可笑しな事でも?といふ風な口調でそう言う

「薬をそんなに飲んだら危ないですよ!」

「いや…いくら飲んでも効かなくてね…」

「それでもダメですっ!!」

ひとしきり叫んだところで、私はため息をつく、その様子をみた令音さんはピルケースを懐にしまい医務室の扉を開ける。

「…ともかく、こつちだ。ついてきたまえ」

「…はい」

私は気を取り直し令音さんの言葉に返事を返す、琴里のことは心配だが、ここが何処かわからない以上令音さんに付いていくしかないのだ。

令音さんに連れられ淡色に塗装された機械的な廊下を歩いてゆく。

ちょうどテレビで放映していたSF映画に登場する宇宙船の廊下みたいだ…などと思つていると前を歩く令音さんが立ち止まる。

「…」

令音さんはそう言えば扉の横に設置されたコンソールを操作する、すると軽快な音が鳴り扉が滑らかにスライドする。

「…さあ、入りたまえ」

令音さんは一言言えば中に入つてゆく、私もそれに続いて中に入った。そこで私は今日何度もかもわからぬ驚きの声をあげる。

「な、何これ…すごい…」

視界にはそれこそSF映画の宇宙船の艦橋を思わせる場所であつた。

全体的に薄暗く、空中に投影された各種モニタの光が存在感を主張する。

「連れてきたよ…」

令音さんがふらふらと身体を揺らしながらそう言う。

「ご苦労様です」

ちようど私の前の方数メートル先にある椅子の横に立っている細身で長身の男性が令音さんにそう言うとそのまま視線を私に向けてくる。そしてまるで執事やホテルマンを思わせる調子で軽く頭を下げ礼をする。

「初めてまして。私はこここの副司令を務めています。神無月恭平と申します。以後お見知り置きを」

「は、初めまして…」

戸惑う私を他所に神無月さんは隣の席へと顔を向ける。

「司令、村雨解析官が戻りました」

そう神無月さんが声を掛ければ、背を向けていた椅子が電動モーターの低音を響かせながらゆっくりと回転する。

「――歓迎するわ。ようこそ〈ラタトスク〉へ」

そう言つた人物に私は言葉を失つた、真紅の髪をリボンで二つに括つた髪、抱きしめたら壊れてしまいそうな小柄な体躯、どんぐりを思わせる丸っこい目、そして口に咥え

たチュツパチャプラス：私は口を手で押さえながら…その名前を呼ぶ。

「琴里…？」

そう服装は今朝見たものとは違う身に纏う雰囲気も違うが間違う筈がない…。
私は目に涙を浮かべながらもう一度その大切な人の名前を呼ぶ…。

「琴里…！」

「何？そんな何回も人の名前を呼んだりして、もしかして呆けちゃったの、士織」
「琴里！！」

私は涙を両目から溢れさせ大切な妹に抱き付いた、令音さんや神無月さんが居るが関係ない、私は琴里を力いっぱい抱きしめ何度も名前を呼ぶ。

「琴里、本当に心配したんだよ、琴里…」

「ちよ、ちよつと、苦しいわよ！士織!!落ち着きなさい！」

「心配で…心配で…」

「ああ！もうっ…」

そう言うと琴里は抱きしめている私の腰と頭に手を回す、そして頭に回した手でゆつくりと私の頭を撫でる。

「…心配かけてごめんね。」

「琴里が…琴里が…死んじやうんじゃないかつて…私っ…」

「うん…うん…」

私はそのまま妹を抱きしめたまま泣き続けた…。

数分後泣き止んだ私は用意された椅子に腰かけハンカチを使い顔を拭いていた。

「落ち着いたかしら、土織」

私の目の前、椅子に座った私の妹、『五河琴里』がそう言いながらチュツパチャップスを口に含む。

「うん…ごめんね、取り乱しちやつて」

私はポケットにハンカチをしまうと大勢の前で号泣してしまった事を今更ながらに恥ずかしがる。

「全くよ、こんな泣き虫が姉だなんて、こっちが恥ずかしいくらいよ」

目の前の妹は椅子の背もたれに体重を掛け、私に鋭い視線を向けてくる。

おかしい、と私は思った。琴里はもつと素直で、甘えん坊だった筈なのに。

「まあ良いわ、ちやつちやと説明を始めちやいましょう」

私の思考を寸断するかのように琴里がそう言うと琴里の後方の巨大なモニタに映像が映る。

そこには私が街中で出会つた少女が映し出されていた。

「彼女は精霊よ」

琴里が言つた言葉に私は疑問の声を上げる

「精霊…？」

「そつ、精霊。彼女は本来この世界には存在しないモノであり、この世界に出現するだけで、己の意思とは関係なく、あたり一帯を吹き飛ばしちやうの」

琴里が片手を広げ掌でポンつという風なジェスチャーをする。

「え、えつと、それって…」

私は今聞いた説明とこんな事に至る事になつた原因からある答えに行き着く。

「理解したようね、そう、空間震は彼女たち精霊がこの世界に出現するときの余波なのよ」

「……！」

私は言葉を失つた、世界を、人類を蝕む理不尽極まる現象が：彼女たち精霊が出現する時の現象だったなんて。

「まあ…規模はまちまちだけどね。小さなものは数メートルから、大きいものになれば…それこそ大陸に大穴が開くくらいまでね」

琴里は口から取り出したチュッパチャップスを使い空中に大きな円を描く、三十年前のユーラシア大空災の事を言つてゐるのだとすぐに理解した。

「運が良かつたわね、土織。もう少し今回の空間震の規模が大きかつたら、あなた消し飛んでたかもしれないんだから」

私は今更ながら自分が一体どれだけ危険な事をしていたのかを思い知った。

そんな私を見て琴里は半眼でこちらを見てきた。

「だいたい、空間震警報が出てたじやない。なんで外に出てたの？馬鹿なの？死ぬの？」
「いや…だって」

私はそう言いながらポケットから携帯を取り出し位置特定サービスの画面を琴里に見せる。

「ああ…そういう事ね」

琴里はそう言うと懐から携帯を取り出す。

「え、あれ…？」

「まあ、士織の性格からしたら探しにでるわよね。」

私はいまの情報から頭の中で考えを巡らす、琴里は目の前にいるし、携帯も持つている。

G P S 電波は地下までは多分届かないから…。

「ここつてファミレスの上…？」

私がそう考えた答えを口にすれば琴里はニヤリと笑みを浮かべる。

「ご明察、一回ファイルターチェット」

琴里が言うと薄暗かつた艦橋が一気に明るくなる。

「す、すごい…」

私の視界には一面の蒼空が広がっていた、足元を見れば街並みがまるでミニチュアのように見えた。

「そう、この〈フラクシナス〉は空中艦よ、そしてここは天宮市上空一万五千メートル。位置はちょうど待ち合わせしていたファミレスのあたりよ」

琴里は腕組みをし鼻を得意げに鳴らす、まるで何かを自慢するような：いやどちらかといえば我が子を自慢する親と言つた方が近いかもしれない。

「さて、疑問が一つ解消したところで説明を続けるわ、神無月」

琴里が指を一本立てれば神無月さんが代わりのチュッパチャップスを取り出し、手渡す。

「次はこっち。A S T。精霊専門の部隊よ」

スクリーンの映像が切り替わりメカニカルな装備を身に纏つた一団の映像になる。

「精霊専門つて…どんな事をするの？」

私が問うと琴里はさも当然という風に眉を上げ言い放つ。

「簡単よ。精霊が出現したら、その場に向かって処理するの」

「処理……？」

「要はぶつ殺すつてこと」

「……！」

琴里の言葉に私は再び言葉を失う：いや予想していなかつた訳ではなかつた。

だがその予想は思考の隅へと追いやつていたのだ。

そしてあの時の……あの少女のひどく悲しそうな顔と言葉が頭の中に広がる……。

（……だつておまえも、私を殺しに来たんだろう？）

「まあ、普通に考えれば死んでくれるのが一番でしようからね」

「な……どうしてっ」

私は胸の前で手をギュッと握りしめながら問う。

「どうして？」

士織の苦しそうで、悲しそうな顔を見た琴里は興味深げにあごに手を当て言葉をつづける。

「何もおかしいことはないでしよう？。あれは怪物よ？この世界に現れるだけで空間震を起こし街を土地を破壊する災厄よ？」

「で、でも空間震は精霊の意思とは関係ないって！」

「ええ。少なくとも現界時の爆発は、本人の意思とは関係ないという事が有力な説よ。

…まあその後のASTとのドンパチも空災被害に数えられるけどね」

「それは、ASTって人たちが攻撃をするからじや…」

「そうかもしないわね。…けどもしかしたら何もしなくても精霊が大喜びで破壊活動を始めるかもしない」

「あの娘はっ!!」

私は…あの娘の顔が…あの全てを悲しみ、苦しそうな顔が…

「そんな事しない!!」

あんな顔をする娘がそんなことをするはずがない、私は心の底から確信していた。だがそれは他人を納得させられるだけの根拠ではないとも分かつていた…けど…。

「士織、あなたたつた数分程度しか接点もない、しかも自分が殺されかけた相手だつていうのに、随分と精霊の肩をもつじやない。…もしかして、同性なのに惚れたの？」
「ち、ちがつ！…ただ…もつと他に方法はないのかな…つて」

「方法…ね」

士織の絞り出すような言葉に琴里はふうと息を吐く。

「それじゃあ訊くけど、どんな方法があるの？」

「それは……」

私は頭の中では確かに琴里の言う事が理解できてるのだ、出現するだけで世界を殺し

かねない——精靈。

そんなものは確かに迅速に殺さねばならないだろう
でもたつた一瞬だけれど……私は見てしまつた。

少女の：今にも泣きだしてしまいそうな绝望した顔を……。
聞いてしまつた：少女の：悲痛な声を……。

ああそうだ、やっぱり少女は自分と同じなのだ……。

あの頃の：両親に捨てられ、世界に絶望した自分と……。
だから私は少女を放つておくことなんて出来ない。

「私はつ……あの娘とつ……もつとお話ししたい!!」

私の心からの声……その言葉に琴里はニヤリと唇の端を上げた。
その言葉を待つていた……とばかりに。

「そう。……じゃあ、手伝つてあげる」

「えつ……？」

私がぽかんと口を開ける、そんな私を見た琴里は両手を大きくバツと広げる。

まるで令音を神無月をクルーを……そしてこの船〈フランクシナス〉を示すかのように。

「私たちが、それを手伝つてあげるつて言つたのよ。〈ラタトスク機関〉。この総力を
もつて、士織、貴女をサポートしてあげるつて」

「私の…サポート…？」

「ええ」

琴里はそう言うと優雅な所作で膝の上で指を絡ませる。

「いい？精霊に対する対処方法は、大きく分けて二つあるの」「二つ…？」

私が言えば琴里は大きく頭を振る。

そして人差し指を立て。

「一つは、ASTのやり方。戦力を直接ぶつけてこれを殲滅する方法」

次いで中指を立てる。

「もう一つは……精霊と：対話する方法。——私たちは〈ラタトスク〉。対話によつて精霊を殺さず空間震を解決する為に結成された組織よ」

「……」

私は眉をひそめた、そして考える。その組織は何なのかとか、なぜ琴里がそんなところに所属しているのか、気になる事は沢山ある。だが今は最も気になつた事を口に出す。

「……なんで、そんな組織が私をサポートするつて話になるの？」
「前提が逆よ、逆。そもそも〈ラタトスク〉は」

そこまで言うと琴里はビシリッと私を指さす

「士織、貴女の為に作られた組織なんだから」

「え、ええっ!?」

私は一番盛大に表情を崩せば、素つ頓狂な声を上げてしまう。

「な、なんで?、い、意味がわからないよ：私の為？」

「ええ。……士織、貴女を精霊との交渉役に据えて、精霊問題を解決しようつて組織と言つた方が正しいのかも知れないと。どちらにせよ士織がいなかつたら始まらない組織なのよ」

「ま、待つてよ。どういうこと、この人たちやこの船も全部そんな事の為に集められたの？それになんで、私なの!?」

士織が少し混乱気味に問うと、琴里は腕を組みチュッパチャップスを口の中で転がしながらうなる。

「んー、まあ、士織は特別なのよ」

「説明になつてないよ！」

「理由はそのうち分かるわ。いいじやない。私たちが全人員、全技術を以て士織の行動を後押しするつて言つてるのよ？それとも、また一人で何の用意もなく精霊とASTとの間に割つて入るつもり？今度こそ死ぬわよ」

無論私もそれは分かっている現に先刻死にそうな体験をしたのだ、非力な自分にはそんな力はない。

「…その対話っていうのは具体的に何をするの？」

言うと、琴里は再び笑みを浮かべる

「それはね」

あごに手を置き

「精霊に……恋をさせるの」

得意げにそう言い放つた。

「…………えっ？」

私は琴里の言つた言葉が理解出来なかつた：いや聞き間違いであつて欲しかつた。

「だから、恋よ、恋。精霊と仲良くお話してイチャイチャしてデートしてメロメロにさせ
るの」

「あの娘、女の子だよね？」

「男には見えないわね」

「私も女の子だよ？」

「世の中には同性愛や百合って言葉があるくらいだから問題ないわ」

私は一度考える事をやめた…。

「それで、何で空間震が解決するの？」

琴里はチュッパチャップスを振りながら「んー」と考えるような仕草を見せ。

「武力以外で空間震を解決しようとしたら、要は精霊を説得しなきやならないわけでしょ？」

「そうだね」

「その為にはまず、精霊に世界を好きになつてもらうのが手つ取り早いじゃない。世界はこんなに素晴らしいモノなんだつて、つてわかれば精霊だつてむやみやたらに暴れたりしないでしようし」

「確かに…」

「で、よく言うじやない。恋をすると世界が美しく見えるつて。…というわけでデート

して、精霊を「デレさせなさい」

「うーん…」

私は一通りの話を聞けば再び思案する。

実際なんの力も後ろ盾もない私がもう一度あの娘と話がしたいと願つても、まず不可能だ

しばらく考えを巡らすがそれ以外のやり方は思いつかない。

「わ、わかった、頑張る」

「あら、随分と潔く決めたじゃない」

「他に方法は思いつかないし、私はもう一度あの娘と話してみたいから」

「よろしい。今までのデータから予想するに、精霊が再び現界するのは最低一週間後よ。早速明日から訓練を始めるわ」

「え…？　訓練…？」

訓練開始

「んー」

四月十一日、まるで映画のような、非現実的体験をした翌日である。

あの後、私は別室へと移動させられ、強面のオジサマに詳細な説明と何が書いてあるか分からぬ多種多様な書類にサインさせられ、なにがなんだか分からぬまま自宅前に送られた。

その後はともかく落ち着こうと熱いお風呂に入り、お風呂から出た後はそのまま泥のように眠りについた。

朝起きると昨日散々無理をしたせいか、身体の節々が筋肉痛であつたが学校を休む訳にもいかないと想い、気力を振り絞り登校してきた。

授業も頑張つて受け、ようやくの放課後である。ホームルームも終了し席で背伸びをすると不意に横に人が立つ気配があつた。

「五河士織」

私はその声に顔を向ける、そこには鳶一さんが相変わらずの表情の無い顔をこちらに向けていた。

「えっと…なにかな?」

「来て」

私の問いに鳶一さんは一言言えれば、私の手を掴む。

「え?」

私はそのまま鳶一さんに腕を引っ張られ教室から連れ出される。途中クラスメイト達が何事か、といった顔でこっちを見ていたが誰も止めてくれる人はいなかつた。

鳶一さんは無言のまま私を連れ階段を上り、施錠された屋上扉前の踊場に着くとやつと手を放してくれた。

「えつと…鳶一さん?」

「昨日」

私が切り出そうと声を上げた所で鳶一さんがそれを遮るように私の目を真っ直ぐに、まるで逃がさない、とでもいうような目で見ながら喋りだす。

「なぜあんなところにいたの」

「え、えつと…妹が、警報が出ているのに街にいたみたいで…探しに…」

「そう。…見つかつたの?」

私がそう答えると鳶一さんはびくりとも表情を変えず言う

「う、うん。無事に見つかつたよ…」

「そう。よかつた」

鳶一さんはそう言うと、続けて言葉を発する。

「…昨日、あなたは私をみた」

「う、うん」

こつちが本題かな、と私は思った。当然だクラスメイトにあのような事をしている所を見られたのだから。

「誰にも口外しないで」

私は鳶一さんのその言葉に無言の首肯でかえす。

「それに、私のこと以外にも、昨日見たこと、聞いたこと。全てを忘れた方がいい」

それはきっと…あの少女の事を言っているのだろう。

「それは…あの女の子のこと?」

「……」

鳶一さんは無言で私を見つめてくるだけだった。

「ね、ねえ…鳶一さん。あの女の子つて…」

精霊の事は昨日〈ラタトスク〉から聞いてはいたが、私は鳶一さんに問い合わせた。
昨日きいた説明はあくまでも琴里達、〈ラタトスク〉の見解だつたし、実際に精霊達…あの少女と刃を交えた鳶一さんなら、また違つた考えを持っているのではないかと

思つたのだ。

「あれは…精靈」

鳶一さんは短くそう答える、そして一瞬…表情の無かつた鳶一さんの瞳に怨嗟の光が宿つた気がした。

「私が倒さなければならないもの」

「そ…その精靈は…倒さないといけないの…？」

私は鳶一さんにそんな質問をする。

すると鳶一さんは、唇を噛みしめた。

「…私の両親は、五年前、精靈のせいで死んだ」

「…えつ…」

予想外の、そして予想よりも遙かに衝撃的な言葉に私は言葉を詰まらせた。

「私のような人間は、もう増やしたくない」

「…そ、うなんだ…」

私は激しい動悸を抑え込むように、手を胸に置く。

そして今なお私を真つ直ぐ見つめる鳶一さんにもう一つ尋ねた。

「その…精靈とか…そういう情報つて言つてしまつてもいいのかな?…聞いた私が聞くのも変だけど…」

鳶一さんは一瞬、考え込むように黙つてしまふ、そして。

「問題ない」

「だ、大丈夫なの？」

「あなたが口外しなければ」

「えつと…もし話ちやつたら？」

「……」

鳶一さんはまた一瞬だけ言葉を止める。

私は一瞬きつと捕まつたりしちやうんだろうな…などと考えてしまふ。

「困る」

鳶一さんのその一言に私は一瞬ぽかんとしてしまつた。

「え、えつと…だ、大丈夫、誰にも話したりしないから」

その言葉に鳶一さんはこくり、と首肯する。

その会話を最後に、鳶一さんは私から視線を外し、階段を降りつていつた。

「はああああ…」

私は鳶一さんの後姿が見えなくなつたのを確認すると盛大に息を吐き出しながら床に座り込んだ。

「両親が、精霊のせいで死んだ…か…」

私は膝を抱え、頭を足に押し付けるようにしながら呟いた。

そして昨日の琴里の言葉と先ほどの鳶一さんの言葉が頭の中で響く。

(あれは怪物よ? この世界に現れるだけで空間震を起こし街を土地を破壊する災厄よ?)

(私の両親は、五年前、精霊のせいで死んだ)

「……私が、甘いだけなのかな……」

琴里も、鳶一さんも、方向性は違えど、確固たる信念をもつて行動している。

私は……どうだろうか……。

昨日琴里の前で言つたあの言葉を……鳶一さんの前でも言えるのだろうか。

「はあ……」

私は大きなため息を吐くと立ち上がり、スカートに付いた埃を払うと階段を降りる。その時。

「きやああああああああああっ!!」

階段下の廊下から女子生徒の悲鳴が聞こえてきた。

「な、なにが?」

私は早足で階段を降り悲鳴がした方を見る、そこには既に数名の生徒が集まっているのが見えた。

その中心、白衣を着た女性が一人、うつぶせで倒れているのが見えた、私は再び早足でそこへと向かう。

「どうしたの、これ」

「し、新任の先生らしいんだけど…急に倒れて……」

私が咳くと隣の女子生徒があたふたしながらそう返してきた。

「と、ともかく保健の先生を呼んでこないと…」

私はそう言い踵を返そうとする、しかしその時、倒れていた白衣の女性ががしつ、と私の足首を掴んできたのだ。

「ひうつ!?

「……心配いらない。ただ転んでしまっただけだ」

そう言いながら、女性が廊下にまるでお餅のようにべつたりとつけたいた顔を、ゆらりと上げる。

その顔には見覚えがあつた、長い前髪と、目の下に出来た分厚く濃い隈…こんな特徴的な顔は一人しかいない筈だ。

「あなたは…」

「……ん?、ああ、君は…」

——〈ラタトスク〉の解析官、村雨令音さんがのろのろとその身を起こす。

「え、えっと…どうしてこんなところで…」

「見てわからないかい？教員としてしばらく世話になることにしたんだ。ちなみに担当教科は物理、二年四組の副担任も兼任する」

身に着けていた白衣の胸元のネームプレートを示しながら、令音さんは言つた。
そのすぐ上の胸ポケットからは継ぎ接ぎだらけのクマさんが覗いている。

「わからないですっ！」

私は思わず叫んでしまう、そして周りからそそがれる視線に気づく。

「え、えっと…」の人は大丈夫みたいだから…」

私はそう言いながら令音さんに手を差し伸べる、令音さんは差し出された私の手を掴むとゆつくりと立ち上がる。

「ん、悪いね」

「それはいいんですけど、兎も角、歩きながら話しましよう

私は周囲に気を払いながら、私はそう言う。

私は令音さんのペースに合わせ、歩きはじめる。

「ええと、村雨解析官？」

「…ん、ああ、令音で構わんよ」

「えつと…」

私が流石に年上の人を呼び捨てにするのは気が引けるな、と思つていると令音さんは言葉を続ける。

「…私も君を名前で呼ばせてもらおう。連携と協力は信頼から生まれるからね」

令音さんはうんうんと頷きながら、私の顔を見た。

「ええと、君は…しあん、だつたかな…」

「し、しか合つてないですよ…」

「…信頼つてなんだろ。」

「……さてシア、早速だが」

早速、妙な愛称を付けられてしまった。私が若干の呆れ顔を浮かべている事に気も留めず、続ける。

「…昨日琴里が言つていた強化訓練の準備が整つた。君を探して いたところだ。ちょうどいい、このまま物理準備室に向かおう」

私はその話を聞きながら、もう気にするのはよそう、と心に刻んだ。そして昨日から抱えていた疑問をぶつける。

「その、れ、令音さん…。訓練つて一体なにをするんですか？」

「…うむ、一応聞くが、シア。君は同性との交際経験はあるかね」

令音さんの言葉に、私は一瞬でぽんつ、と音がしそうな程に顔を赤くする。

「あ、ある訳ないじゃないですか…」

私は顔を真つ赤にしたまま令音さんに告げる。当然だ、同性どころか異性とすら付き合つた事ないのだ…。まあ：男子生徒から告白された事はあるけど、その時は余りの恥ずかしさに全速力で逃げたけど…。

「うむ、まあ琴里から聞いてはいたがね」

琴里一体なんて話をしているの：私は未だに赤みが引かない顔を手で覆いながら、そういう心中で呟く。

「…責めているわけじゃない。身持ちが固いのは大変素晴らしいことだ。…だが、精霊を口説くとなるとそもそも言つていられないんだ」

「……はい」

私は小さく返事をする。

と、ちょうど職員室の近くに差しかかった所だつた。

視線の先、私のクラスの担任、タマちゃん先生が此方に向かつて歩いてくる。

それだけならば普段と変わらない光景なのだが、タマちゃん先生の後ろに二対の赤い髪のようなものと、その根元の純白のリボンが、まるで先生から生えているような格好で出ていた。

「えっと…」

「…どうかしたかね？」

私がその令音さんの言葉になんと返そうか、と思つたその時、その髪とリボンの主、私の妹、琴里がチラツと前を見る様に先生の背中から姿を現す。

そして私を発見すると、表情をパアツと明るくし、目を輝かせ…。

「おねーちやああああああああん！」

と大声を上げながら吸い込まれるように私に飛びついてくる。

「きやつ！」

私は飛びついてきた琴里を上手に受け止めたが、その衝撃を受け止めきれる程の力はない。

尻餅をつくように転んでしまう。

「いたたたた」

「おねーちやん、おねーちやん」

私はお尻の痛みで少し表情を歪めながら私の胸に顔を埋め、おねーちゃんと連呼する琴里を見る。

「琴里、なんで高校に？」

そんな疑問を口にした所で追いついてきたタマちゃん先生が話しかけてくる。
「あ、五河さん。妹さんが来たから、校内放送で呼ばうとしてたんですよ」

「は、はあ…」

私は返事をしながら、未だに胸に顔を埋めている琴里を見る。

琴里は来賓用のスリッパを履き、見辛いが入校証もつけているようだつた。

「琴里、とりあえず、退いてくれないと…」

私は琴里にそう言うと、琴里は丸っこい目で私の顔を見たあと離してくれた。

私は琴里が離れると、立ち上がり、乱れた制服を直す。

「ほーら、琴里。先生にありがとうって言つてね」

「おー、先生、ありがとー！」

私がそう言えば琴里は手を上げ元気にブンブンとふりながら言う、そんな琴里に先生はニコニコと笑いながら返す。

「はあい、どういたしましてえ」

先生はそう言うと、私に視線を向ける

「もうつ、可愛い妹さんですねえ」

「は、はい、自慢の可愛い妹です」

先生は琴里と笑顔で「バイバイ」と手を振り合うと、職員室の方へと戻つていった。

「琴里」

「んー、なーに？」

琴里はそのまんまるな目で私をみながら首を傾げる。

「うん、私の知っている琴里だ。私はそう思つた。

そして私は一度、隣に立つ令音さんを見てから言う。

「えつと、物理準備室に行くのであつてるよね？」

「うん！」

私たちは再び物理準備室に向け歩きだす、そして琴里にふと質問する。

「早かつたね、琴里。中学校も終わつたばつかりじゃないの？」

そう琴里の通う中学校とこの高校はそこそこ距離が離れている。

それなのに琴里はもう高校に着いているのだ。

「うん、途中で〈フラクシナス〉に拾つてもらつたからねー」

私はえーとといった表情を浮かべる、こんなところで普通に艦の名前を出してもいいのだろうか。

実は自分が知らなかつただけで実はオーブンな組織なのだろうか、とか考えていると、琴里が手を掴んでくる。

「それよりほら、おねーちゃん。早く行こ！」

そう言うのが早いか琴里は私の手を引っ張り先導するように廊下を進む。

なんで高校の間取りを知つてているんだろう。等と私が疑問に思つてゐるうちに目的

地である、東校舎四階の物理準備室に到着する。

「さ、入ろー、入ろー♪」

琴里が某七人の小人が口ずさむリズムでそう言うと、まるで勝手知つたるとばかりに扉を開き中へと入つて行き、私も琴里に続いて部屋に入る。

「…えつと」

「…何かね？」

私の言葉に、令音さんが首を傾げる。

「…何ですか、この部屋」

私がそう思うのも無理は無いだろう、私は物理準備室に入つたことはないが。

多数のコンピュータに大小の数々のディスプレイ、他にもなんだかよく分からぬ機械で埋め尽くされている。

「…部屋の備品さ？」

なんで疑問符なんですか、とか。前の備品は、先生は等という質問も飲み込み。もう何を言つてもダメだと諦めた。

そんな私を他所に琴里は髪を括っていた純白のリボンを外すとポケットにしまい、代わりに漆黒のリボンを取り出し手早く髪を括る、そしていつの間にか用意されていた椅子にどかつと座る。

そして持っていた鞄から小さなバインダーのようなものを取り出す。中には綺麗に多種多様なチュツパチャップスがセットされていた。

そしてその中から一本選ぶと口に入れ、まだ入り口に立っている私に見下すような視線を向ける。

「いつまで突つ立つて居るのよ、士織。もしかしてカカシ希望? やめときなさい。あなたじや逆に悪い虫が寄つてくるだけよ」

私は豹変した琴里を見て、顔を手で覆つた。

恐らくリボンを変えるのが性格を変えるスイッチにでもなっているのだろうか。

「それで…琴里、訓練つてなにをするの?」

「いいから、とつとと来て座りなさい」

私は扉を閉めると琴里の前に用意された椅子に腰かける。

「それでは早速訓練を始めよう」

椅子に腰かけたのと同時に令音さんがそう言いくつもあるディスプレイの内一つの電源を入れる。

すると画面に Presented by Ratatoskr と表示される。数秒後、明るくポップなメロディと共に何人の女の子が順繰りに登場し、最後に「恋してマイ・リトル・シオン」というロゴが表示される。

「えつと…これは…？」

「……恋愛シミュレーションゲームと言うやつだ」

「……」

私はその言葉に額に手をてる。

まさかのゲームだつた、本当に訓練なのだろうか。

そんな私に琴里がチュッパチャップスを向け告げる

「訓練の第一段階よ、それに市販品じゃないわ。〈ラタトスク〉総監修で作つたものよ。現実に起こりうるシチュエーションをリアルに再現してあるわ。ちなみに十五禁よ。ああなんなら十八禁もあるわよ」

「ああ…」

成程、先程映つたPresented by Rattatoukrの文字は偶然とかでは無かつたのかと思つた。

ていうか、琴里。十八禁は駄目だよ。私十六歳だよ。

「……ん、ではシア、始めてくれたまえ」

横に立つ令音さんがそう言つたので私はコントローラーを持ち、はじめからを選択する。

「おはよう、お姉ちゃん!、今日もいい天気だね!」

そんなセリフと同時に綺麗なCGが表示される。

主人公の妹キヤラだろうか、小柄な少女が煽りの構図で描かれている。

そしてパンツを丸見えにしながら主人公を踏んでいた。

「ないよ！」

私は思わずコントローラーを投げそうになる。

「…どうしたねシア。何か問題でも？」

「現実にこんなシチュエーション起こりませんよ」

「いいから、進めなさい、士織」

「うう…」

琴里に言われた私は理不尽さを感じつつもゲームに戻る。

しばらくテキストを進めていくと、画面中央に三つの四角い枠に囲まれた文字が表示される。

「えっと、これは

「選択肢よ。この中から主人公の行動を一つ選ぶの。それによって好感度が上下するから注意するのよ」

「なるほど…」

よく見れば画面右下にゼロの位置にカーソルがついたメーターメーターのようなものが表示

されていた。

それを確認すると私は選択肢を確認する。

- ①・「おはよう。愛してるわリリコ」愛を込めて妹を抱きしめる。
 - ②・「起きたわ、ていうか思わず濡れちゃつたわ」妹をベッドに引きずり込む。
 - ③・「かかつたな、アホが！」踏んでる妹の足を取り、アキレス腱固めをかける。
- 「なに、この選択肢!?」
- 思わず叫ぶ。

「何でもいいけど、制限時間つきよ」

確かに選択肢の枠下に表示されている数字がどんどん減っている。

私は比較的マシな選択肢の①を選ぶ。

「おはよう。愛してるわリリコ」

私は妹のリリコを、愛を込めて抱きしめる。

すると、リリコは途端に顔を侮蔑の色に染め、私を突き飛ばす。

「え…なに、そんなシユミがあるの?、やめてくんない?キモいんだけど」

そして好感度メーターがマイナス五十まで急降下する。

「妹でも急に抱き付いて、そんな事言つたらそうなるわよ、ゲームじゃなくて本番だつたら士織のお腹には綺麗な風穴が開いてるわよ?」

そんな事言われてもどうしろと、私は嘆きたくなつたが、令音さんがいつの間にか手に洗濯籠を持つて立つていた。そして琴里がやれやれと息を吐きながら、琴里が洗濯籠を指さしながら言う。

「ペナルティよ、一枚脱ぎなさい」

「……え？？」

その言葉に私は思わずコントローラーを落としてしまう。

そして汗をだらだらと垂らしながら、嘘だよね、という視線を込めて琴里を見る。

しかし返ってきた返事は無情なものであつた。

「聞こえなかつたの？、脱げつて言つているの」

やつぱり聞き間違いでは無かつた、茫然とする私を他所に琴里は言葉を続ける。

「いい？、実戦ではあなたが失敗すれば土織、あなただけでなく私たちも狙われる危険があるのよ、という訳で緊張感を持つてもらう為にペナルティを科すことにしたの」「お、お家なら兎も角、ここ学校だよ！」

私は必死に言い縋るが琴里はまるで意に介さない。

「それともなに、見られる方が好き？なんなら生徒を呼んでくるけど」

そう言われたら、流石に脱ぐしかなかつた…。

十数分後…。

そこには一糸まとわぬ姿となつた土織が涙を流し、大事な所を両手で隠しながら座りこんでいた。

「ぐすつ……えつぐ……もういやだよう…」

あれから幾多もの選択肢を選ぶたびにゲームのキャラクターに罵詈雑言を浴びせられ、琴里に服を脱がされた。

「まさか、ここまでとは思わなかつたわ」

琴里も若干呆れ顔を浮かべている、指に私のパンツを引っかけクルクルと回しながら。

「はあ、仕方ないわね。」

琴里はそう言うと回収していた私の制服を投げ渡してくる。

「服は着ていいわ」

私はしやくり上げながら、ありがとう、と言い制服を身に着け始める。

「ともかく、このゲームをクリアする事が目標よ、頑張りなさい」

「……終わった」

ENDと表示された画面を見つめ、私は呟いた。

琴里と令音さんの放課後強化訓練が開始されてから休日を含め、十日。

私はようやくハッピーエンドを迎えたのだ。

…それまでに幾つものトラウマを抱えそうになつたが…。

「…ん、まあ少し時間は掛かつたが、第一段階はクリアとしておくか」

「ま、一応全CGもコンプしたみたいだし、とりあえずは及第点といつた所かしらね。…
とはいっても、あくまで画面の中の女の子に対してだけだけど」

背後に立ち、スタッフロールを眺める琴里と令音さんが、息を吐くのが聞こえる。

「じゃ、次の訓練だけど…もう生身の女性にいきましょ。時間も押してるし」

「…ふむ、大丈夫かね」

「平気よ、失敗しても士織に近づく悪い虫が減るだけだから」

私の後ろで琴里と令音さんが不穏な話をしている。

だが疲れきっている為に右から左へとすり抜ける。

「それで、士織。次の訓練なんだけど」

「もう、何を言われても驚かないよ…」

「そうね…誰がいいかしら」

ちよつとまつて琴里、誰つてなに？

「…そうだね。無難に、彼女などどうだろう」

令音さんが琴里と一緒に見ていたディスプレイの右端を指す。

そこには担任のタマちゃん先生が映っていた。

「…ああ、なるほど。いいじやない、それでいきましよう」

琴里は邪悪な笑みを浮かべる。

そしてその表情のまま私に向く。

「…シア。次の訓練が決まつた」

「…どんな訓練ですか」

私はもう服をひん剥かれたりしなければなんでもいいや、などとすら思っていた。

「…ああ。本番、精霊が出現したら、君は小型のインカムを耳に忍ばせて、こちらの指示に従つて対応してもらう事になる。一回実戦を想定して訓練しておきたかったんだ」

「私はなにをすれば？」

「…とりあえず、岡峰珠恵教諭を口説いてきたまえ」

「えつ…？」

「何か問題でもあるの？」

琴里が意地の悪い顔を浮かべ言つてくる。

「だだだ、だつて先生だよ！」

「本番ではもつと難物に挑まなきやならないのよ？」

「う、それは…ただけど」

だけど担任の先生をだなんて、毎日会うんだよ…。

そんな事を考えていると、令音さんがぱりぱりと頭をかきながら言う
 「…最初の相手としては適任かと思うがね。恐らく君が告白したとしても受け入れはしないだろうし、ペラペラと言いふらしたりもしなさそうだ。…まあ、君がどうしても嫌だというのならば女生徒に変えてもいいが…」

「……先生でお願いします」

私はそう答えるしかなかつた、確かに令音さんの言う通りタマちゃん先生ならそう言つた対応をしてくれるだろう。

「…よし」

令音さんは小さく頷くと、机の引き出しを開け、中から小さな機械を取り出し、私に渡してくる。

次いでマイクと、ヘッドフォン付の受信機らしきものを机の上に置く。
 「これは？」

「…耳につけてみたまえ」

私は令音さんの指示通り渡された機械を右耳にはめる。
 すると令音さんはマイクのスイッチを入れ、囁くように唇を動かす。
 「…どうかね、聞こえるかな？」

「ひやつ」

耳元で令音さんに直接囁かれたような声が響く。

令音さんはそれを確認すると、コクリッと頷く。

「よし、ちゃんと通っているね。音量は大丈夫かい？」

私は首肯しする。令音さんは続いてヘッドフォンを耳に当てる。

「…ん、うむ。こちらも問題ないな。拾えている」

「こんなに小さいのにマイクまで付いているんですか？」

「…ああ、高感度の集音マイクが搭載されている。ノイズの自動除去に加えて、必要な音声だけをこちらに送ってくれるスグレモノだ」

「す、すゞいですね…」

人差し指の先から第一関節までくらいしかなかつたのにそんなに機能が付いている事に感嘆の色をのせて言う。

私がそんな事を言つていると、琴里が机の奥から、もう一つなにか小さな物を取り出し、指で弾く。弾かれたものは床に落ちることなく、まるで虫のように羽ばたき空中に留まる。

「こ、これはなんですか」

「…見たまえ」

令音さんはそう言うと目の前のディスプレイの表示を切り替える。

そこには琴里と令音さん、そして私の姿が映し出されている。

「これって…カメラ…ですか？」

令音さんは首肯する。

「…超小型の高感度カメラだ。これで君の後を追う。虫と間違えて潰さないようにして
くれ」

「はあ…」

私がすごいなーと思っていると、後ろの琴里が突然私のお尻をぺちつ、と叩く

「ひうつ！」

「何でもいいから早く行きなさい。ターゲットは今、東校舎の三回廊下よ、早くしないと
機会を逃すわ」

琴里に言われれば、私は物理準備室を出て階段を下る、そして令音さんの指示の下、廊
下を早足で移動する。

そしてようやく曲がり角を曲がる目標のタマちゃん先生の後ろ姿を見つけた。
私も後を追い曲がり角をまがろうとする、瞬間。

「きやつ！」

「……！」

私は曲がり角の先から歩いてきた生徒とぶつかり、お互に転んでしまう。

「いたた…、ご、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

私はそう言いながら身を起こし、ぶつかってしまった人を見る。

「あ…」

私はぶつかってしまった人を見て驚きの声を上げる。

何しろぶつかった人はあの鳶一さんだつた。

鳶一さんは転んでしまった拍子に尻餅をついてしまったのだろう、ちょうど私の方に向かつてM字開脚をしていた：あと、パンツ見えてるよ。

鳶一さんはさして慌てた様子もなく普段通りの調子で

「平気」

と、一言だけ言つて立ち上がつた。

「どうしたの」

次いで鳶一さんはそう私に尋ねてきた。

多分、急いでいた理由を聞いているのだろう、しかし流石に素直に先生を口説く為に追いかけてました：なんて言えない。

私が上手い理由を考えていると、右耳に琴里の声が響く。

『ちようどいいわ、土織。彼女で訓練しましそう』

「え…ええっ!!」

突然大声を出した私に鳶一さんは首を傾げる。

そして琴里は言葉を続ける。

『やつぱり同年代のほうが、訓練にはピツタリでしょう。それに精靈とは言わないまでもAST要員。なかなか参考になりそうじやない。見る限り、彼女も周りに言いふらすタイプとは思えないけど?』

確かに彼女の性格などからしてそう言つた事はしないだろう。

私が琴里の言葉に困惑していると、私を見つめていた鳶一さんが口を開く。

「五河士織」

「は、はいい！」

琴里に言われた直後だつた為、上ずつた声を上げてしまう。

鳶一さんは私の膝に視線を向けていた。

その視線の先を見れば、先程転んだ時擦りむいたのか少し血が滲んでいる。
「手当する」

鳶一さんは私が返事をするよりも前に、私の前に跪き、膝に顔を近づける、舌を出し
ながら…。

「ななななな、なにしてるんですか!?」

私は顔を真っ赤にし飛び上がるようにならざる。それを見た鳶一さんは首を傾げる。
「なにして、手当」

そう言いながら素早い動作で私の足に再び迫る。

そして今度は逃がさないとばかりに私の足をがしり、とホールドする。

「は、離してください！」

「駄目、早く手当しないと」

そして鳶一さんはゆつくりと私の膝に舌を触れようとする瞬間。

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

あたりに警報が響き渡り、鳶一さんは瞬時に私から離れる。

「急用ができた。また」

そう言い踵を返すと廊下を走つていってしまった。

「助かったの…かな…」

私はへなへなとその場に座り込み呟く。

ほどなくして、インカムから琴里の声が聞こえてくる。

『土織、空間震よ。一旦〈フラクシナス〉に移動するわ。戻りなさい』

「やつぱり、精霊？」

私が問えば、琴里は一拍おいてから続ける。

『ええ。出現予測地点は……よ』

再会

現在の時間は、十七時二十分。

私は琴里と令音さんと合流したあと、避難する生徒達の目を避けながら、街の上空で待機している〈フラクシナス〉に移動した。

琴里と令音さんは既に軍服に着替え、大型モニタに表示された様々な情報を確認しながら、言葉を交わし、時折意味ありげに頷いている。

私にはモニタに映る情報は分からぬが、ただ一つ理解できるのは画面右に表示される、来禅高校を中心とする地図くらいだつた。

「なるほど、ね」

艦長席に腰かけチュツパチャップスを舐めながら、クルーと言葉を交わしていた琴里は、小さく唇の端を上げる。

「土織」

「なに?」

「早速働いてもらうわ。準備なさい」

私は琴里の言葉に唾を飲み込んだ、いよいよだ。

「もう彼女を実戦登用するのですか、司令」

艦長席の隣に立っていた神無月さんが、正面のモニタに目を向けながら不意に声を発する。

「相手は精霊。失敗はすなわち死を意味します。訓練は十分なのでしょぎやふツ」

神無月さんの言葉の途中で鳩尾に向け琴里が重い一撃を叩き込む。

神無月さんは相変わらずの嬉しそうな表情を浮かべながら倒れる。
「私の判断にケチをつけるなんて、偉くなつたものね神無月。罰として今からいいと言
うまで豚語で喋りなさい」

「ぶ、ブヒイ」

私はそつと目を逸らし、気になっちゃダメだ、気にちゃダメだ、と自分に言いつける。
ここで何か言えば私にも飛び火してしまう。
すると琴里は振り返り私の方を見る。

「土織、あなたかなりラツキーよ」

琴里はそう言えばチュッパチャップスを使いモニタを示す。

指された先、高校を中心とした地図上には先ほどは無かつた、校舎上の一つの赤いアイコンに、そのアイコンを囲むように黄色いアイコンがいくつも表示されている。
「赤いのが精霊、黄色いのがASTよ」

「えっと、何がラツキーなのかな?」

そこまで言つて私はもう一度モニタを見る、よく見れば包囲はしているものの、A S Tを示すアイコンは一切動く気配が無かつた。

「あれは、精霊が外に出てくるのを待つているのよ」

「A S Tは突入しないんだね?」

私が首を傾げながら言う。すると琴里が肩をすくめて見せる。

「C R—ユニットは、狭い屋内での近接戦闘を目的として作られたものではないのよ、いくら随意領域<テリトリー>があるとはいっても、通路も狭く遮蔽物が多い屋内では持ち前の機動性も生かせないし、視界も遮られてしまうわ」

琴里は一通り説明すると指を鳴らす。それに応じるようにモニタの映像が通常の光学カメラからの映像に切り替わる。

あの日見た街の景色のように、校庭には深さ二から三メートルほどのすり鉢状のくぼみができており、周囲の道路や校舎の一部も綺麗に削り取られている。

「校庭に出現後、半壊した校舎に入り込んだみたいね。こんなラツキー滅多にないわよ。

A S Tにちよつかいだされずに精霊とコンタクトが取れるんだから」

私は琴里の説明にうんうんと相槌をうつていたが、ふと言葉に引っかかりを覚える。

「ねえ、琴里。精霊が普通に外に現れてたら、どうやつて私と精霊を接触させるつもり

だつたの？」

「A S Tが全滅するのを待つか、精靈とA S Tが仲良くドンパチやっている中に放り込むか、ね」

「…それは確かに、ラツキ一だね」

琴里の言葉に私は建物の中に入つてくれた精靈に感謝した。

「ん、じやあ早いところ行きましょうか。士織、インカムは外してないわね？」

「う、うん、大丈夫」

私は一度右耳に触れる、そこには確かに先ほどの訓練でしようしたインカムがある。「よろしい。カメラも一緒に送るから、困つたらインカムを二回小突いてちようだい」「わかった…」

私はそう言えば大きく息を吸い、そして吐き出す。

大丈夫：私はそう言い聞かせる。

私はもう一度あの子とお話しするんだ。

「落ち着いたかしら」

そんな私の様子を見ていた琴里がにやり、と笑いながら言う。

「うん：行つてくるよ、琴里」

「いつてらつしやい、おねーちゃん」

私は琴里のその言葉に送り出されるように艦橋の扉をくぐる。

「フラクシナス」船体下部に備えられている顕現装置「リアライザ」を使用した転送機は、その直線状に遮蔽物さえなければ、一瞬で物質を転送・回収できるという便利な物らしい。

最初私は軽い船酔いに近い気持ち悪さを感じたが、数回目ともなると少しは大丈夫になってきた。

一瞬のうちに視界が「フラクシナス」内の転送室から、夕暮れの高校の裏手に変わったのを確認し、軽く一度頭を振る。

「えっと、まずは校舎の中に…」

言いかけて私は言葉を止める。

私の目の前の校舎の壁はまるでディツシャーですくわれたアイスのように削り取られていたからだ。普段すごしていた校舎のこんな姿を実際に見るとなんともいえない気分になつた。

『ちようどいいわ、そこから入っちゃいなさい』

右耳のインカムから琴里の声が聞こえる。

私は「うん」と返事をすると、校舎の中に入つていった。

早くしないと精霊が外に出てしまうかもしれないし、ASTに見つかれば「保護」されてしまうだろう。

『さ、急ぎましょ。ナビするわ。精霊の反応はそこから階段を上つて三階、手前から四番目の教室よ』

「わかった」

私は深呼吸し、近くの階段を駆け上がる。

そして一分程で、指定された教室の前へと辿り着く。

教室の扉は閉じられており中の様子は窺えない、この中に精霊がいると思うと自然と心臓の鼓動が早く、大きくなる。

「あれ、ここ私の教室だ」

今まで気づかなかつたがプレートには「2—4」の表示がある。

『あら、そうなの。好都合じゃない。まったく知らない場所よりよかつたでしょ』

琴里がそう言ってくる、確かに、まだ進級してそう日は経っていないが、ここは自分の教室。

そう考えると不思議と心臓の鼓動が落ち着いてくる。

私は心の中で精霊に最初にかける言葉を何度か繰り返しながら、意を決して教室の扉を開ける。

——

瞬間。

夕日で赤く染まる教室、その中でちょうど私の机の上に、あの時の不思議なドレスを身に纏つた黒髪の少女が、膝を立てるように座つていた。

少女は幻想的な輝きを宿した瞳を物憂げに半眼にし、ぼうつと黒板を眺めている。

窓から差し込む夕日に照らしだされた少女は、見る者の思考能力を、それが例え同性であろうと奪ってしまうほどに：神秘的であつた。

だがそのまま絵画のようなワンシーンはすぐに崩れ去つた。

「…ぬ？」

少女が私の侵入に気づき、目を見開き私を見てくる。

「…ツ！あ、あの…」

私がやつと言葉を発しようとした瞬間。

少女が空を切り裂くように手を無造作に振るつたと思った直後、私の頬を掠めて黒い光が通り抜ける。

一瞬後、私が開いた教室の扉と、後ろの廊下の窓ガラスが盛大な音を立てて砕ける。
「ひ……ツ!?」

突然の事に私は一瞬固まつてしまう。

恐る恐る頬に手を触れてみると、ぬるりとした感触と共に手に血が付いていた。

『土織！』

インカムから琴里の声が鼓膜を震わせる。

少女は憂鬱とした表情を作りながら、腕を大きく振り上げる。その手のひらの上には球状の光の塊のようなものが、黒い輝きを放っていた。

「ま、待って！、わ、わたしは敵じやない！」

私のその必死な声に少女は黒い輝きを放つ光球を霧散させ、猜疑心と警戒の満ちた瞳で私を見つめてくる。

私は両手を上げ、敵意が無いことを示し、一步を踏み出す。
しかし、

「——止まれ」

少女が凜とした声色を教室に響かせると同時に、ばじゅッ、と私の足元の床をあの光球が灼く。

私は慌てて歩みを止めた。

少女が私の頭の先から爪先までゆつくりと見てから、口を開く。
「おまえは、何者だ」

「わ、わたしは…」

『待ちなさい』

私が答えようとしたところで、琴里からストップが入った。

私は言いかけた言葉を飲み込み、琴里の言葉を待つ。

「え、な、なに、琴里…」

私は少女の鋭い視線に晒され続ける、気まずい。

少女は中々言葉を続けない私に対し苛立たしげに言う。

「……もう一度聞く。おまえは、何者だ」

目は更に鋭くなり、次の瞬間に也有の光球を私に対して放つてきそうであつた。

と、瞬間、琴里からようやく次の言葉が届く。

『士織、いい？。私の言うとおりに答えなさい』

「う、うん」

『——人に名を訪ねるときは自分から名乗れ』

「——人に名を訪ねるときは自分から名乗れ……これって……不味くない：？」

私の言葉に少女は不機嫌な顔を浮かべ、両手にあの光球を作りだすと振り上げ、私に向け振り下ろす。

私は少女が手を振り下ろす一瞬前に床を蹴り右側に転がる。

そして私が立っていた場所に黒い光球が命中し三階から一階まで貫く大穴が開く。

私はその衝撃波で吹き飛ばされ机と椅子を巻き込みながら教室の端まで転がり、壁にぶつかり止まる。

「かはッ……」

壁にぶつかった衝撃で肺から空気が押し出される。

『あれ、おかしいな』

「いたた…死んじやうかと思つたよ…」

心底不思議そうに言つてくる琴里にそう返す。私は痛む背中を押さえながら身を起こす。

「これが最後だ。答える気がないのなら、敵と判断する」

少女が机の上から、私を見下ろしながら言つてくる。

「わ、私は五河士織！この生徒です！て、敵対する意思はありません！」

私は痛む両腕を上げながら言うと、少女は訝しげな眼を作りながら、机から降りる。

「——そのままでいる。おまえは今、私の攻撃可能圏内にいる」

私はこくこくと首を上下させ了解の意を示す。

それを確認すると、少女はゆっくりとした歩みで私の方へ近づいてくる。

「…ん？」

少女は私の目前まで来ると軽く腰を折り、しばしの間私の顔を凝視してから「ぬ？」と

眉を上げた。

「おまえ、前に一度会ったことがあるな…？」

「う、うん、今月の、十日に。街中で…」

「おお」

少女は得心がいった、とばかりに小さく手を打ち、姿勢を元に戻す。

「思い出したぞ。何やらおかしなことを言つていた奴だ」

少女の目から、僅かに険しさが消えるのを見て、私は一瞬緊張を緩めた、しかし。
「いたツ!?

私は少女に強引に前髪を掴まれ、顔を無理やり上向きにさせられる。

そして少女は顔が触れんばかりに近くに寄せると私の目を覗き込むようにする。

「…確かに、私を殺すつもりはないと言つていたか?…ふん、見え透いた手を。言え、何が狙いだ。私を油断させて後ろから襲うつもりか?」

「…………違うつ

私は僅かに眉を寄せ、そう答える、しかし少女の顔は変わらない。

私は…少女が、私の言葉を…殺しにきたのではない、というこの言葉を微塵も信じることが出来ない事…そんな環境にいたことが…嫌で、嫌でたまらなかつた。

私は少女の眼をじつと見つめ…。

「あなたを殺そうとする人たちばかりじゃないっ！」

「……」

少女は目を丸くすると、私の髪から手を離し。

しばらくの間、何かを問いただげな視線で私の顔を見つめ、小さく唇を開く。

「…そうなのか？」

「うん、もちろん」

「私が会った人間たちは、皆私は死なねばならないと言っていたぞ」

「そんなわけ…ないっ!!」

「……」

少女は何も言わず、手を後ろに回す。

半眼を作つて口を真一文字に結び、まだ私の言うことが信じきれないという顔を作
る。

「…では聞くが。私を殺すつもりがないのなら、おまえは一体何をしに現れたのだ？」

「…それは…ええつと」

『土織』

私が口ごもると、琴里の声が右耳に響く。

束の間の間があり、琴里の声が聞こえる。私はその言葉を少女の眼を見つめながら言う。

「あなたに会うため…」

「…？」

私の言葉に少女がきよとん、とした顔を作る。

「私に？一体何のために」

少女は首を傾げながら問い合わせてくる。

そして一拍おいて琴里の声が再び聞こえてくる。

「あ、あなたと愛し合うために…」

私がその言葉を言つた瞬間、少女が手を横薙ぎに振りぬく。

振りぬかれた手に沿つて風の刃が駆け抜ける。

刃は教室の壁を切り裂き、外へと抜けていく。

「…冗談はいらない」

少女は…あの…ひどく憂鬱そうな顔をしながら呟く。

——ああ、この顔だ…。

私が嫌いな…大嫌いな顔だ…。

自分は愛されていない…愛される事なんてない…愛されるなんて微塵も思つていな

い。

……世界に絶望した顔。

私は高鳴る心臓に手を当てるようにながら……叫ぶ。

「私は……、あなたとお話しするためにつ……こにきたッ!!」

私の心からの言葉——少女は意味がわからないといった様子で眉をひそめる。

「……どういう意味だ?」

「そのままで私は、あなたと、お話がしたいの!! 内容なんてなんだつていい!! 気に入らないなら無視してくれたつていい!! ……でも一つだけ……たつた一つだけ分かつてほしいのつ!!」

『土織、落ち着きなさい』

琴里の諫める声が聞こえる、しかし私の言葉は止まらない。

だつて……今まで、この少女には……手を差し伸べてくれる人間はいなかつたんだ。

たつた一言、一言でもあれば状況は違っていたかも知れない、なのにその一言をかけてくれる人間が一人もいなかつたのだ。

私には、お父さんが……お母さんが……そして琴里がいた。

でも、彼女には……誰も……誰もいなかつたんだ。

だから……私が言うしかない。

「わたしは、あなたを、否定しないっ！！」

私は絶叫するように…魂からの言葉…その一言を…たつた一言を少女に言う。

「……………」

少女は眉を寄せると、私から目を逸らす。

そしてしばらくの間、私たちの間に沈黙が訪れる…。

そして少女が小さく唇を開く。

「……シオリ。シオリと言つたな」

「——うん」

「本当に、おまえは私を否定しないのか？」

「しないよ」

「本当の本当か？」

「本当の本当に」

「本当の本当の本当か？」

「本当の本当に」

私が間髪入れずに答えると、少女は髪をくしゃくしゃと搔き筆り、ずずつと鼻をすす

るかのような音を立ててから、顔をわたしに向け直す。

「——ふん」

眉根を寄せ、口をへの字に結んだままの表情で腕組みをする。

「誰がそんな言葉に騙されるかばーかばーか」

「ツ、わ、わたしはつ」

「……だがまあ、あれだ」

少女は、複雑そうな顔を作ったまま、続ける。

「どんな腹があるかは知らんが、まともに会話しようという人間は初めてだからな。……この世界の情報を得るために少しだけ利用してやる」

そう言つて、もう一度ふんと息を吐く。

「……え、えつと?」

「話しくらいしてやらんこともないと言つてはいるのだ。そう、情報を得るためだからな。うむ、大事、情報超大事」

そう言いながらも、ほんの少し、少しだけ：少女の表情が和らいだ気がした。

私はそんな少女の姿をみて微笑んだ。

『上出来よ。そのまま続けて』

インカムから琴里の声が響く。

「う、うん」

すると、少女が大股で教室の外周をゆっくりと回り始める。

「ただし不審な行動を取つてみろ。おまえの身体に風穴を開けてやるからな」

「うん、わかつた」

私は微笑みながらそう返す。

私の返答を聞きながら、少女のゆっくりとした、けど響くような足音が教室に木霊する。

「シオリ」

「なに？」

「——早速聞くが。ここは一体何なんだ？初めて見る場所だ」

そう言いながら少女はまだ倒れていない机をペタペタと触る。

「えつと……ここは学校。⋮の教室だよ。私たちと同じくらいの生徒たちが勉強する場所だよ。その席に座つてね」

「なんと」

少女は目を丸くし驚きの顔をする。

「これ全てに人間が收まるのか？冗談を抜かすな。四十近くはあるぞ」
「本当だよ」

私はそんな少女の様子を微笑ましげに見ながら答える。

少女が現れるときには、街には避難警報が発令されている。少女が見たことのある人間はASTくらいなものなのだろう。人数もそこまで多くはないだろうし。

「ねえ……」

私は少女の名前を呼ばうとした、だが言葉をそこで詰まらせる。

「ぬ？」

私の様子に気づいていたのだろう、少女が眉をひそめてくる。

そしてしばし考えを巡らせるようにしたあと言う。

「…そうか、会話を交わす相手がいるのなら、必要なのだな」
そう言つて。

「シオリ。お前は、私を何と呼びたい」

手近にあつた机に腰を掛け、少女は私に言つた。

「……え？」

私は少女が言つた言葉の意味がわからず、問い合わせる。

少女はふん、と腕組みをすると、尊大な調子で続ける。

「私に名をつけろ」

「……」

しばし私は沈黙する。

——ええええええええええええええええええ!!

私は心の中で絶叫する。

「わ、私が!?」

「ああ。どうせおまえ以外と会話をすると予定はない。問題あるまい」

「……うーん」

私は考える：目の前の少女の名前を。

しかしさか、こんな所で精霊に名前を付けることになるとは思つていなかつた。
インカムの向こうからは紛糾する議論の声が聞こえてくる。

私は少女との出会いを思い出していた、あの：出会いの日。

私の運命が大きく変わつたあの日を。

「——十香」

私は呟く。

「ぬ？」

「あなたの名前は：十香」

私は少女の顔を見つめその名前を呼ぶ。

目の前の少女が、この先使い続ける名前を…。

「……」

「どう…かな?」

私は頭をぽりぽりと搔きながら言う。

「……それで」

少女は口を開いた。

「それで、トーカとは、どう書くのだ?」

「ええ、それは」

私は黒板の方へ歩いて行き、チョークを手に取り『十香』と黒板に書く。

「ふむ」

少女は小さくうなつてから、私の真似をするように指先で黒板をなぞる。

「あ、チョークを使わないと…」

私は言いかけて、言葉を止める。少女の指が伝ったあと綺麗に削り取られ、下手くそな…だけど心の籠つた『十香』の二文字が記されていた。

少女はしばらくの間、自分の書いた文字をじつと見つめてから、小さくうなずいた。

「シオリ」

「なに?」

「十香」

「…え？」

「十香。私の名だ。素敵だろう？」

「うん！」

私の返事を聞くと、少女…十香は…もう一度同じように唇を動かす。

「シオリ」

私は十香の顔を真っ直ぐに見つめ。

「十香…」

私がその名前を呼ぶと、十香は満足そうに唇の端を二ツと上げる。

「……っ」

その顔を見て私の心臓が、どくんと跳ねる。

十香の笑顔を見るのは、これが初めてだつた。
と、そのとき、

「——え…？」

突如として、校舎を凄まじい爆音と振動が襲う。

私は咄嗟に黒板に手をついて身体を支える。

「な、なに!?」

『土織、床に伏せなさい』

右耳から琴里の声が響いてくる。

「え？」

『いいから、早く』

琴里の言葉に私は何が何だかわからないまま、床にうつぶせになつた。

直後、ガガガガガガガガガガガガガガガガ——ツと、凄まじい音を立てて教室の窓ガラスが一斉に割れ、向かいの壁に無数の弾痕が刻まれる。

「なに、なんなのツ！」

『外からの攻撃みたいね。精霊をいぶり出すためじやないかしら。：ああ、それとも校舎』と潰して、精霊が隠れる場所をなくすつもりかも』

『えつ…そんな、無茶苦茶な…』

『今はウイザードの災害復興部隊がいるからね。すぐに直せるなら、一回くらい壊しちゃつても大丈夫つてことでしょ。——にしても予想外ね。こんな強硬策に出てくるなんて』

そこまで琴里の言葉を聞けば、私は顔を上に向けた。

十香が、先ほど私に対していたときはまるで違う表情をして、ボロボロになつた窓の外に視線を放っていた。

無論、十香には銃弾はおろか、窓ガラスの破片すら触れてはいない。

だけど…その顔は、ひどく痛ましく、悲しそうに歪んでいた。

「十香ッ！」

私はその名を呼んだ。

「……っ」

ハツとした表情を浮かべた十香が視線を外から、私に向ける。

未だに凄まじい銃声が響いていたが、この教室への攻撃は止んでいた。

私は外に気を配りながらも身を起こす。

そんな私に十香は悲しげに目を伏せ、言う。

「早く逃げろ、シオリ。私と一緒にいては、同胞に討たれることになるぞ」
「……」

私は無言で唾液を飲み込む。

確かに、逃げなければならないのだろう。だけど…。

私は悲しい顔をした十香を放つて逃げることなんて出来ない。

『土織』

琴里の声が聞こえてくる

「私は…逃げないっ」

『…素敵なアドバイスをあげる。死にたくなかつたら、できるだけ精霊の近くにいなさ

い』

「ありがと、琴里」

私は琴里にお礼を言えば、つかつかと十香に歩み寄り十香の手を取った。

「は——？」

十香が、目を見開く。

「何をしている？早く——」

「知らない！……今は私とのお話の時間だよ。気にしちゃ駄目。——この世界の情報、聞きたいんでしょ？私に答えられることならなんでも答えてあげる」

「……!!」

十香は一瞬驚いた顔を作つてから、私と一緒に床に座り込む。

銃弾の嵐の吹き荒れる教室で、私は十香と向き合いながら話す。

十香の力なのだろうか、夥しい数の銃弾は、二人を避けるように、校舎を貫通してゆく。

十香との会話はなんてことはない内容であつた。

十香が今まで誰にも聞けなかつたようなことを質問し、私がそれに答える。ただそれだけの応酬。だが十香は満足そうに笑う。

一体どれくらい話した頃だろうか——インカムから琴里の声が聞こえてくる。

『数値が安定してきたわ。もし可能だつたら、土織からも質問をしてみてちょうだい。精靈の情報が欲しいわ』

そう言われて、私は口を開いた。

「ねえ…十香」

「なんだ」

「あなたつて…結局どんな存在なの？」

「む？」

私の質問に、十香は眉をひそめる。

「――知らん」

「知らないって…」

「事実なのだ。仕方なからう。――どれくらい前だつたか、私は急にそこに芽生えた。それだけだ。記憶は歪で曖昧。自分がどんな存在なのかなど、知りはしない」

「そ、そういうもののなの？」

私が頬をかきながら言うと、十香はふんと息を吐いて腕組みする。

「そういうものだ。突然この世に生まれ、その瞬間にはもう空にメカメカ団が舞つっていた

「えつと…メカメカ団？」

「あのびゅんびゅんうるさい人間たちのことだ」

どうやらASTのことらしい。私は思わず苦笑する。
すると、インカムから軽快な電子音が鳴り響き。

同時に琴里から通信に入る。

『！ チヤンスよ、士織』

「えつと…何が？」

『精霊の機嫌メーターが七十を超えたわ。一步踏み込むなら今よ』

「踏み込むって…なにをすればいいの？」

『んー、そうね。とりあえず…デートにでも誘つてみれば？』

「ふえつ!?」

琴里の言葉に私は思わず大声を上げてしまつた。

「ん、どうしたシオリ」

私の声に反応して、十香が目を向けてくる。

「な、なんでも、ないよ…」

「……」

私は慌てて取り繕うけど、十香はじとつと訝しげな目で私を見つめてくる。
そしてインカムの向こうからはデートコールが聞こえてくる。

私は、覚悟を決めると十香を真正面から見据える。

「え、えっとね…十香」

「ん、なんだ」

「そ、そのね…今度私と」

「ん」

「で、デート…しない？」

私は顔を真っ赤にしつつそう言い切った。十香は私の言葉にキヨトンとした顔を作
る。

「デエトとは一体なんだ？」

「え、つと…」

私は恥ずかしくなって、視線を逸らす。

その時、右耳から少し大きな琴里の声が入ってくる。

『士織！ A S T が動いたわ！』

「え…!？」

目前にいる十香にも聞こえてしまつただろうが、私は構わず声を出していた。

そして、A S T の攻撃により開放感溢れてしまつた教室の外から、鳶一さんが現れる。

「—つ！」

十香が一瞬のうちに表情を険しくし、そちらに手のひらを広げる。

刹那、手にした無骨な機械から光の刃を現出させた鳶一さんが十香に襲い掛かる。目が眩むほど閃光が煌めき、火花があたり一面に飛び散る。

「く——」

「——無粋！」

十香はそう一喝すれば受け止めていた手を、鳶一さんごと振り払う。

「……つ」

鳶一さんは僅かに歯を食いしばりながら、後方へと吹き飛ばされる。が空中で体勢を整えると、弾痕だらけの床に華麗に着地する。

「ち……また、貴様か」

受け止めた手を軽く払いつつ、吐き捨てるように十香は言う。

一方の鳶一さんは私に一瞬視線を向けると、安堵したかのように小さく息を吐く。そしてすぐに見慣れない武器を構え直し十香に冷たい視線を向ける。

「……」

それを見た十香は、ちらつと私を一瞥してから、足元の床に踵を突き立てた。

「<轟殺公（サンダルフオン）>！」

十香がそう声を上げた瞬間、教室の床が隆起し、そこから玉座が出現する。

『土織、離脱よ！一旦〈フラクシナス〉で拾うわ。出来るだけ二人から離れなさい！』

琴里がインカムの向こうで叫ぶのが聞こえた。

「そんなこと言われても：つ」

私がそう言うのと同時に、十香が出現した玉座の背もたれからあの大剣を引き抜き、鳶一さんに向け振るう。

その際の衝撃波で、私はいとも簡単に校舎の外へ吹き飛ばされた。

「きやああああああああッ！」

『ナイスつ！』

琴里の言葉と同時に私は身体が浮かぶ感覚に包まれる。

そして私は〈フラクシナス〉に回収された。

デート

「…まあ、そうだよね、普通に考えれば休校だよね…」

私は頬を人差し指でかきながら、高校正面から伸びる坂道を下つていた。

私が精霊に十香という名をつけた次の日。

普通に登校した私は、閉じられた正門と、瓦礫と化した校舎を見て、なにやつてんだろ、と息を吐いた。

私は校舎が破壊されるまさにその場にいたわけだし、普通に考えれば休校になることくらい想像できるんだけどな、などと考え再びため息をつく。

「はあ…ちよつとお買い物でもしてこようかな」

私はそう呟くと街の方へと足を向けた。

確か：卵と牛乳を切らしていたはずだつたし、今日のお夕飯の材料も買おうかな、などと歩きながら考えていたが、数分後、私は再び足を止めることになった。

目の前、道の先に立ち入り禁止を示す看板と規制線が張られていた。

「あ、通行止め…」

だけどそんな表示がなくても、この道を通行できることは容易に分かつた。

何しろアスファルトはまるで砂道のように掘り返され、道路の両脇に建つ雑居ビルは道に面した側を崩落させていた。

「……」

私はこの場所に覚えがあつた。

初めて十香と出会つた空間震発生地点の一角だ。

まだ復興部隊が作業を行つていなかつた。あの時の惨状をそのままに残してい
た。

「……」

頭の中に少女の姿を思い浮かべながら、細く、長い息を吐く。

——十香。

昨日まで名を持たなかつた：精霊と呼ばれる少女。

昨日、前よりずつとずつと長い時間お話しをしてみて：私の予感は確信に変わつた。

あの少女は、十香は確かに、普通では考えられないような力を持つてゐる。公的機関
が危険視するほどに。

今私の目の前に広がる光景がその証拠だつた。確かにこんな現象を引き起こすもの
を野放しには出来ないだろう。

「……」

だけど私は、十香がその強大な力をいたずらに、無差別に振るう、思慮も慈悲もない怪物だとは到底思えない。

「……い、……オリ」

そんな十香が、私が嫌いな：大つ嫌いな鬱々とした悲しい顔を作っている。

それが…私にはどうしても許容することなど出来なかつた。

「おい、シオリ」

そんなことを頭の中でぐるぐると巡らせていたものだから、気づいて当然のこと気に付かず、学校まで行くことになつてしまつたのだけど。

「…無視をするなつ！」

「——え？」

私は視界の奥、通行止めになつてゐるエリアからそんな声が響いてきて。

私は首を傾げた、凜とした透き通り、風を裂く、美しい声。

どこかで…正確には昨日学校で聞いたことがある声。

…今、こんなところでは…聞こえてくるはずのない、声。

「え、えつと」

私は今しがた響いてきた声の方向へ視線を向けた。

そして私は全身を硬直させる

私の視線の先、積み重なつた瓦礫の上に、明らかに街中に似つかわしくないドレスを身に纏つた少女が、ちよこんと屈みこんでいた。

「ど、うか？」

そう、私の見間違いや、幻覚でなければ、間違いなく昨日私が学校で遭遇した精霊であつた。

「ようやく気づいたか、ばーかばーか」

同性の私ですら見蕩れるほどに美しい顔を不満げな色に染めた少女は、トン、と瓦礫を蹴ると、ギリギリ原形を残しているアスファルトを辿つて私の方へと進んでくる。

「どう」

十香は通行の邪魔だつた立ち入り禁止の看板を蹴り倒し、規制線を引き千切り、私の目前に到着する。

「な、何してるの、十香……」

「……ぬ？ 何とはなんだ？」

「え、ええっと……なんでこんなところにいるのかな……つて」

私はそう言ひながら辺りを見渡す。

周囲には買い物袋を下げ立ち話をする奥様方や、犬の散歩をする人などが見える。そしてなによりあの空間震警報が鳴つていないので。

よつて誰もシェルターに避難していない。

つまり精霊現界の前震を〈ラタトスク〉やASTが感知できていないということだつた。

「なんと言われてもな」

当の本人はそんな異常事態を全く気にしていない様子だつた。

なぜ私が疑問の声を上げるのか本当にわからない、といった様子で腕組みをする。

「おまえから誘つたのだろう、シオリ。そう、デエトとやらに」

「…………あー…」

私は十香の言葉になんと返そくか、と考えていると。

十香が言葉を続けた。

「ほら、シオリ。早くデエトだ。デエトデエトデエトデエト」

十香が独特のイントネーションでデートデートと連呼する。

私は恥ずかしさで顔を赤くしながら手をぶんぶんと振る

「と、十香、わかつたから、デートを連発するのはやめて…」

「ぬ、なぜだ？…はつ、まさかシオリ。おまえ私が意味を知らないのをいいことに、口に

出すのもおぞましい卑猥な言葉を教え込んだのか？」

十香が頬を私のように赤く染め、眉をひそめる。

「し、してないよ、してない。健全な言葉…だよ」

私はそう答えるが、人によつては不健全になるのかな、などと考えてしまつた。ふと、私は周囲からの視線を感じた。

見ればさきほど立ち話をしていた奥様方がニヤニヤしながらこちらの方を見ていた。一部は十香の奇妙な恰好を訝しむような視線も混じつている気がしたが。

「……ぬ？」

十香もその視線に気づいたのか。私の陰に身を隠すようにしながら目を鋭くする。

「……シオリ、なんだあいつらは。敵か？殺すか？」

「え…えええ！」

何の前触れもなく物騒なことを言い出した十香に驚きの声を上げる

「な、な、なんでそうなるの。ただのおばさま達だよ」

「シオリこそ何を言つている。あの爛々と輝く目…まるで猛禽ではないか。私を狙つて いるとしか思えない。：放置しておいてはあとあと厄介なことになりそうだ。早めに 仕留めておくのが吉と思うが」

確かに目を輝かせているけれど…十香、あれは新しい話の種を見つけただけだよ…。
「安心して。言つたじやない、あなたを襲う人なんてそういうないんだよ」

「……もう」

十香は警戒の色を未だに滲ませてはいたが、とりあえず今にも飛びかかっていきそうな気勢を収めてくれた。

「まあいい。それで、そのデエトとやらは——」

「ええつと：ちょっと場所を移そう、ね？」

恥ずかしげもなくデートコールを続ける十香にそう言うと、私はそそくさと歩き出す。

「ぬ。おい、シオリ、どこへ行く！」

十香がすぐに後を追ってくる。そして私の横に並ぶと不満そうな声を上げる。

私は十香を連れ立つて、ひとけのない路地裏に入ると、ようやく息を吐く。
そして十香に向き直った。

「やつと落ち着いたか。まつたくおかしな奴め、一体どうしたというんだ」

十香は腰に手を当てふんすつと鼻から息を吐く。

「十香、あなた、昨日あのあとどうしたの？」

私はいろいろ訊きたいことがあつたが、まず最初に口にしたのはこれだつた。

十香は少し憮然とした様子になりつつも唇を動かす。

「別にいつも通りだ。通らぬ剣を振るわれ、当たらぬ砲を撃たれ。最後は私の身が自然と消えて終いだ」

「…消える？」

私は首を捻る、そういうえば琴里たちから聞いていた説明の中でもそんな事を言つていたと思いだす、が実際どういうことかは分からぬままだった。

「この世界とは別の空間に移るだけだ」

「そんなところがあるんだ…どういうところなの？」

「よくわからん」

「…えっ？」

十香の予想外の言葉に私は再び疑問の声を上げる。

「あちらに移った瞬間、自然と休眠状態に入ってしまうからな。辛うじて覚えているのは、暗い空間をふよふよと漂っている感覚だ。私にしてみれば眠りにつくようなものだな」

「それじゃあ、目覚めたらこっちの世界に来るつてこと？」

「少し違う」

十香は私の言葉に頭を振つて言葉を続ける。

「そもそも、いつもは私の意思とは関係なく、不定期に存在がこちらに引き寄せられ、固着される。まあ、強制的にたたき起こされるような感覚だな」

「そんなつ…」

私は十香の言葉に息を詰まらせる。

私は、精霊がこちらの世界に現れようとする時に、空間震が起るのだと思つていた。けど、十香の話が本当なら……こちらの世界に現れることすら自分の意志ではないといふことになる。

なら空間震は本当に、事故みたいなものじやない。

その責任までも十香に……精霊に問おうというのは余りに理不尽すぎる。けど私は十香の今の言葉にもう一つ気がかりなことがあつた。

「……いつもは？今日は違つたつてこと？」

「…………」

十香は頬をぴくりと動かすと、口をへの字に曲げて私から視線を外す。

「ふん、し、知るか」

「ちゃんと答えて、十香。もしかしたら大事なことかもしけないの」

私は追いすがつた。

もし十香が今日、自分の意思でこちらの世界に来ていたとしたら……それが理由で空間震が起こっていないのかもしえない。

だけど十香は頬をほんのりと桜色に染め、視線を険しくしてみせた。

「しつこいぞ。もうこの話は終いだ」

「け、けど…」

私が尚も言い繕ろうとすると、十香はだん、と片足を地面に強く叩き付ける。瞬間、十香が踏んだ地点が一瞬発光し、放射状に光の帯が駆ける。

「きやつ…！」

その光が私の靴に接触すると、バチッと音を立てて火花が散る。

「いいから、早くデエトとやらの意味を教える」

十香が急かすように言つてきた。

「ええっと…デートっていうのは、そう…男の子と女の子が、二人一緒に出かけたり遊んだりすること…だと思う…」

「それだけか?」

十香がまるで拍子抜けしたかのように目を丸くする、そしてなにか疑問に思つたのか、言葉を続ける。

「男と女と言つたが、シオリ。お前は女ではないか」

「そ、それはそうなんだけど…」

「…まあよい、ともかくシオリは、私と二人で遊びたいということだな?」

「そういうこと…かな」

私は頬を搔きながらそう十香に返す。

「そうか」

「十香はその言葉を聞けば、表情を少し明るくしうなずく、そしてそのまま裏路地から出ていこうとする。

「ま、待つて十香」

「なんだ、シオリ。遊びに行くのだろう?」

私の引き留める声に十香は立ち止まると振り返る。

「い、いいの?」

「何を言う。おまえが行きたいと言ったのではないか」

「それは…そうだけど」

「なら早くしろ。気を変えるぞ」

そう言うと十香は歩みを再開しようとする。

けど私は大事な問題に気づく。

「十香、その服はまずいよ」

「なに?」

私の言葉に、十香はさも意外とばかりに目を丸くする。

「私の靈装のどこがいけないので。これは我が鎧にして領地。侮辱は許さんぞ」「その恰好だと日立ちすぎるの、AST：メカメカ団にも気づかれちゃうから」

「ぬ」

流石にそれは面倒だと思ったのか、十香は嫌そうな顔を作った。

「ではどうしろというのだ」

「着替えないといけないんだけど…」

私はそう言いながら考える。

この場には十香に合う服などないし、お家に一度帰つて私の服を着せようにもそこまでの道が大変だし。私が服を取りに一人で戻るのも一つの方法だけど十香をこんなところに一人にするのはもつと駄目だ。

私が頭を悩ませていると、焦れた十香が唇を開く。

「どんな服ならばいいのだ？それだけ教えろ」

「え？えつと…この私が着ているような服かな…」

私はそう言いながら自らが着ている来禅高校の制服を指す。

「ふむ、そのような服ならいいんだな」

そう言うと十香は指をパチンと鳴らした。

すると途端に十香が身に纏っていたドレスが、端から光の粒子になり空へと溶けていく。

と同時に入れ替わるように光の粒子が十香の身体に収束し、別のシエルエットを形作

る。

「数秒後、そこには私と同じ。来禅高校の制服をきた十香が立っていた。
「す、すごい…」

「靈装を解除して、新しく服を揃えた。視認情報だけだから細部は異なっているかもし
れんが、まあ問題はないだろう」

十香はそう言うとふふんと腕組みをしながら言つてくる。

「そんなことより、どこへ行くのだ？」

「そうだね…とりあえず歩こうか」

私はそう言うと歩を進める、十香も私に続いて歩き出す

私は歩きながら隣を歩く十香を見る。

そこにいるのは剣の一振りで地を裂き、空を分かつ怪物などではない。

ごく普通の女の子だった。

そんな風に十香を見ながらしばらく歩いていると路地を抜ける。

ちょうど数多くのお店がある大通りに出た。

「……つ、な、なんだこの人間の数は。総力戦か!?」

今までに見たことのない人と走る車の量に驚いたのか、十香が全方位に注意を払いな
がら忌々しげな声を上げる。

そしてあの光球を両手の指先全てに出現させる。私はそれを見れば慌てて止めにはいる。

「駄目だつてば十香！、誰も十香の命を狙つてないから！」

「……本当か？」

「本当だつてば」

私の言葉に、十香は相変わらず油断なく周囲を警戒しながらも、出現させていた光球は消してくれた。

そして不意に、警戒していた十香の顔から力が抜ける。よく見れば鼻をすんすんと動かしている。

「ん……？ おいシンオリ。この香りはなんだ」

「香り？」

私は同じようにあたりの匂いを嗅いでみる。

確かに香ばしくほんのり甘いような香りが漂っている。

「えつと、多分あそこだね」

私は右手にあつたパン屋さんを指さす。

「ほほう」

十香は短く言えば、目をキラキラさせながらパン屋さんをジッと見つめる。

よく見れば口元から僅かに涎が垂れている。

「十香？」

「ぬ、なんだ？」

「お店入る？」

「……」

私がその様子を見て微笑みながら問いかけると、十香は指をうずうずと動かしながら口をへの字に曲げた。

そしてこれまた絶妙なタイミングでお腹の虫が、ぐーきゆるるる、と大きな鳴き声を上げる。

どうやら精霊もお腹は空くらしい。

「シオリが入りたいのなら入つてやらんこともない」

「…入りたい、すつごい入りたいな」

「そうか、なら仕方ないな！」

十香はもの凄く元気そうに言うと、大手を振つてパン屋さんの扉を開く、私もそれに続いて扉をくぐつた。

その姿を密かに見つめる影が居ることに気づかないままに。

「シオリー、ここはなんだ！そこかしこから美味そうな匂いがするぞ！」

私がお店に入ると、十香はその宝石のような瞳を爛々と輝かせ店内を忙しなく動いていた。

「ここはね、パン屋さんだよ」

私はそんな十香を見てクスッと笑いながら答える。

「なるほど、して先ほどの香りはどのパンなのだ」

十香はバスケットに入れられ商品棚に陳列されたパンの匂いを一つ一つ嗅ぎながら、私に問う。

「えっと、どれだろう」

私も匂いを嗅ごうとするが店内には様々な種類のパンがある為嗅ぎ分けることは無理だつた。

するとお店の奥、厨房の方からエプロンを掛けバスケットを両手で持つた、店員のおばあさんが出てくる。

「あーら、いらっしゃい」

おばあさんは私たちの姿を見とめると人当たりのよさそうな笑顔で話しかけてくる。

すると十香が顔をおばあさん：いや正確には手に持ったバスケットに向けた。

「おお！…これだ、この匂いだ！」

十香はまるで飛び掛かるようにおばあさんの目の前に行く。

「ご婦人、これは一体なんなのだ」

「これはね、きなこパンだよ。」

おばあさんは十香の問いに笑顔で答える、そしてカウンターにバスケットを置くと、
きなこパンを一つ取り出し十香に差し出す。

「ほら、お嬢ちゃん一つ食べてみてごらん。焼きたてだよ」

十香は満面の笑みできなこパンを受け取ると大きく口を開け齧りつく。
そして何度も咀嚼し飲み込むと一層の笑顔を浮かべる。

「美味しい！美味しいぞ！」

十香はそう言いながら残るきなこパンを凄まじい勢いで食べてゆく。

「すみません、お金は払いますので」

私がそう言うと、おばあさんはいいよいよ、と手を振る。

「こんな美味しそうに食べてくれると、私も嬉しくてねえ」

おばあさんは孫を見るような目できなこパンを食べる十香を見る。

しばらくすると十香はパンを食べ終わると、私とおばあさんの方を見る。

「シオリ、ご婦人。もつと食べててもよいか？」

十香は口元にきなこをつけたままそう言う。

「あははは、すみませんきなこパン、バスケット一つ分下さい」

私はおばあさんにそう言つて代金を支払つた。

その後、パン屋さんを後にした私たちは十香の気の向くままに街を歩き回つた。

十香は目に映るもの全てが珍しいらしく常に目をきらきらとさせていた。

特に食べ物に関しては並々ならない興味を持つていて。行く先々で様々な食べ物を食べていた。

そしていま私たちは休憩も兼ねて十香が興味津々としていたお洒落なカフェエレストランに入る所だつた。

店内に入ると、結構な数の席があつたがその殆どが埋まつてている状況だつた。

私が座れる場所がないかと見回していると店員さんが声を掛けてきた。

「…いらっしゃいませ、二名様でよろしいでしょうか」

私は店員さんの顔を見て固まつてしまつた、そこにはウエイトレスの恰好をした令音さんが立つていたのだ。

「れ、令ね…んぎゅ」

私が驚き声を上げようとすると令音さんは人差し指で私の唇を押さえる。

そして私の耳元に顔を近づけて唇を開く。

「……ちらでも精霊の静肅現界を確認してね、さあ」

令音さんはそう言うといつの間にか席に着いていた十香の席にへと案内してくれた。席に向かう途中、もう一度店内をよく見渡せば、店内にいるお客様、店員全員が＜フランクシナス＞内で見たことのある人達だつた。

席に着つと、十香は既にメニューと睨めっこしていく、時折悩むように「ううむ」と声を出す。

「いらっしゃいませ、ご注文はお決まりでしようか？」

私は再びの聞いたことのある声に視線を向ける、そこにはウェイトレスの制服を着た琴里がトレーを持つて立つていた。

もう驚くのに疲れた私を他所に琴里はいわゆる接客スマイルでメニューと睨めつこする十香に言葉を掛ける。

「お悩みでしたら、スペシャルこれでもかコースはいかがですか？」

私と十香が頭に？マークを浮かべていると有無を言わさずにテーブルに山盛りの料理と結婚式に出るような巨大なケーキが並べられる。

十香はテーブルに並んだ料理に早速手を付け始める。

そんな十香を確認すると、私は琴里に小声で話しかける。

「ちよ、ちよっと、琴里。どういうことなの?」

「彼女をデレさせる為の、最大限のサポートをしているだけよ。それからはい、これ」
琴里はそう言うと一枚のカラフルな紙を取り出し、私に渡してくる。

「この紙なに?」

「福引き券よ、この店を出て右手道路沿いにあるわ」

琴里は私の肩に手を乗せ言う。

「頼んだわよ」

そして琴里はニヤリと唇の端を上げ、踵を返しながら言う。

「さあ、私たちの戦争(デート)を始めましょう」

十香が料理を食べ終わると、私はお会計を済ませお店を出る。

「えっと、十香。さつきお店の人から福引き券を貰ったんだけど、どうかな?」

私は十香にそう言いながら、先ほど琴里から貰った福引き券を見せながら言う。
十香は私の持つ福引き券を凄く興味深そうに見てから言う。

「シオリは行きたいのか?」

「うん、ものすごく行きたいな」

「では行くか」

十香はそう言うと大股で元気よく歩き出す。

私も早足でその後を追う。

琴里に教えて貰つた通りに進むとやがて、天幕に大きく福引と書かれた抽選所と思われる場所が見えてきた。

ハッピを着た男性が抽選器の前に一人、商品渡し口に一人見え、その後ろには商品だろうか自転車やテレビ、お米の俵などが並べられている。

そして既に数名の主婦らしき人達が並んでいた。

「……」

私は頬をかいた。

ハッピを着た人も、並んでいる人たちも全員＜フラクシナス＞で見たことがある人たちだつた。

「おお！」

だけど十香にはそんなことは関係ない。私があげた福引き券を握りしめ、目を輝かせる。

「じゃ、並ぼうか」

「ん」

十香が頷き、一緒に列の最後尾についた。

十香は前に並んだ人たちが抽選器を回すのを首と目をぐるぐると回しながら見ていた。

そしてすぐに十香の順番がくる。十香は前のお客さんに倣つて福引き券を係員に手渡すと抽選器に手を掛ける。

「これをおせばいいのだな？」

そう言いて、ぐるぐると抽選器を回す、数秒後、抽選器から赤い弾が出てくる。
私は何等かなと確認しようとする、瞬間。

「大当たり！」

「おお！」

「ええ！」

見れば後ろの方で別の係員が特賞の部分に書いてある金色の玉を赤いシールで変えている所だった。

「おめでとうございます！ 一位はなんと、ドリームランド完全無料ペアチケット！」

そう言いながら十香にチケットを渡す。

「おお、なんだこれはシオリ！」

「なんだろ…テーマパークかな？」

興奮した様子でチケットを見る十香に私は首を傾げた。

そんな私たちに係員の人があいづいつとカウンターから身を乗り出してくる。

「裏に地図が書いてありますので、是非！ いますぐにでも！」

「は、はあ…」

私は気圧されるように一步後ずさる、そして十香からチケットを借り裏を見た、確かに地図が書いてあつた、しかも凄く近い。

けど琴里たちが意味のないことはしないだらうなと思い、十香に聞いてみる。

「行つてみる？ 十香」

「うむ！」

十香は元気に返事をする。

場所は本当に近かつた、抽選所から路地に入つて数百メートル。両側に雑居ビルが並んでいる所だつた。とてもテーマパークなどがあるようには思えない。

「おお！ シオリ！ 城があるぞ！ あそこに行くのか!?」

十香が今までになく興奮した様子で前方を指さしていく。

私はチケットの裏から視線を外し指さされた方を見る。

「……ふえつ？！」

瞬間、私は素つ頓狂な声を上げ顔を真つ赤にする。

確かに小さいながらも、西洋風のお城だつた、看板にもドリームランドと書かれてい

る。

けど、その下に「ご休憩・二時間四千円／＼ご宿泊八千円／＼」とも書かれていた。とどのつまりは、大人しか入ってはいけない愛のホテルだった。

私は心の中で、琴里はお姉ちゃんになにをさせようとしているの!?、と叫ぶ。しかし十香は目を輝かせたままお城を見ていた。

「と、十香。あ、あそこは違うみたいだから…」「ぬ？ あそこではないのか？」

「う、うん。ほらほら別の所に行こう、ね？」

「もう…そ、うか」

残念そうに言う十香には申し訳なく思つたけど、あそこは無理だよ。

私は十香の手を無意識の内に握ると、辺りを見渡す。

十香は私に手を握られると最初はびっくりしたような表情を浮かべるが、しばらくすれば手に込める力を強くし頬をほんのり桜色に染め、少し笑顔を浮かべる。そして何かを呟いた。

「……あつたかいな」

私はそんな十香の呟きに気付かず、きょろきょろと辺りを見たいたがふと、視界に公園へと向かう道が入つた。

「公園に行こつか。 十香」

「うむ、 シオリ」

そうして私たちは手を繋いだまま公園へと向かい歩いて行く。

公園に着いたのはちょうど十八時頃だった。

夕日でオレンジ色に染まつた天宮市を一望できるいい所だつた。

そして公園には私と十香以外の人影は見受けられず、さながら貸し切り状態であつた。

「おお、 絶景だな！」

どうの十香はと言うと、落下防止柵から身を乗り出しながら、黄昏色の天宮市の街並みを眺めている。

私は十香の隣に立ちながら同じように景色を見ている。

そして時折吹く風が私と十香の髪をなびかせる。

「シオリ！ あれはどう変形するのだ!?」

十香が遠くを走る電車を指さし、目を輝かせながら言う。

「あはは、電車は変形はしないかな」

「何、合体タイプか?」

「うーん、連結はするかな」

「おお」

十香は納得つといった調子で頷くと、くるりと身体を回転させ、私の方を向く。夕焼けに照らされる十香の顔は、同じ女の子である私ですら美しいと思えるほど、まるで著名な画家が書いた絵画のようだと思った。

「——それについても」

十香は話題を変えるように、そして屈託のない笑顔を浮かべながら言う。
「いいものだな、デエトというのは。実にその、なんだ、楽しい」

「…………」

不意な言葉に私は顔を赤くし、心臓をドキリとさせた。

「どうした、顔が赤いぞシオリ」

「ゆ、夕日のせいじゃないかな……」

そう言つて私は顔をそらす。

すると十香が私の両の頬を手で挟み込むようにすると自分の方を向かせる。

「あ……」

「やはり赤いではないか。何かの疾患か?」

吐息が触れそうな距離まで顔を近づけた十香が言う。
夕焼けのオレンジを移し込んだ瞳に見つめられると、私は恥ずかしくなり視線を逸らした。

「ち、違うから…大丈夫だよ…」

そう言つて私は身体を離した。

そして高鳴る心臓を落ち着かせながら、もう一度十香の顔を見る。

そこには初めて出会つたあの日、そして昨日、十香の顔に浮かんでいた鬱々とした悲しい表情は、随分薄くなり、年相応の女の子の表情が浮かんでいた。

「――どうだつた? 今日一日私と…その…デートをしてみて?」

「……ん、皆優しかつた。正直に言えば、まだ信じられないくらいに」

「え…?」

私が少し首を傾げると、十香は自嘲気味に苦笑する。

「あんなにも多くの人間が、私を拒絶しないなんて。私を否定しないなんて。…あのメカメカ団…ええと、なんといったか。エイ…?」

「A S Tのこと?」

「そう、それだ。街の人間全てが奴らの手の者で、私を欺こうとしていたと言われた方が

真実味がある

「そんな…」

私はその言葉に悲しみを覚えた。

だつて…確かに十香にとつては、それが…普通だつたんだ。
否定されるのが…否定され続けるのが…普通。

そんな――悲しい。

「…それじやあ、私もASTの手先つてことになつちやうのかな？」

私の言葉に、十香は静かに頭を振る。

「いや、シオリはあれだ。きっと親兄弟を人質に取られて脅されているのだ」

「な、なにその役柄…」

「シオリ…………おまえが敵とか…そんなのは考えさせるな」

「…えつ？」

「なんでもない」

私の問ひに、そう返せば今度は十香が顔を背ける。

そして表情を無理やりに変えるようにごしごしと顔を手でこすつてから視線を戻してくる。

「――でも本当に、今日はそれくらい、有意義な一日だつた。世界がこんなに優しいだな

「こんなに楽しいだなんて、こんなに綺麗だなんて…思いもしなかった」

「そつか——」

私は口元を綻ばせた、だけど十香は、そんな私に反するように、眉を八の字に歪め苦笑する。

「あいつら…A S Tとやらの考えも、少しだけわかつたしな」「え……？」

私がその言葉に怪訝そうに眉を寄せると、十香は少し悲しそうな顔を作る。

私が嫌いな爵々とした表情とは違う…けど、見てているだけで胸が締め付けられそうな、悲壮感の漂う顔だった。

「私は……いつも現界するたびに、こんなにも素晴らしいものを壊していくんだな」

「——つ」

私は息を詰まらせた。

「で、でも。それは十香の意思とは関係ないんでしょ…ッ!?」

「……ん。現界も、その際の現象も、私にはどうにもならない」

「なら——」

「だがこの世界の住人たちにしてみれば、破壊という結果は変わらない。A S Tが私を殺そうとする道理が、ようやく…知れた」

私は、十香のその言葉に、十香の悲痛な顔に胸が引き絞られ、上手く呼吸が出来ない。

「シオリ。やはり私は——いない方がいいな」

そう言つて——十香は笑つた。

今日一日見せていた明るく年相応の少女の笑みではない。

まるで……まるで自分の死期を悟つたような……弱々しく……痛々しい笑顔だつた。
私はいつの間にか乾ききつて、張り付いた喉からどうにか声を出した。

「そんなことない……」

私はぎりぎりと痛む胸を押さえるように両の手を胸に置き言葉を続ける。

「だつて……だつて今日は空間震が起きてないじやない！きつと、きつといつもと何か違
いがあるんだよ……ッ！それを突き止めれば……」

私の言葉に十香はゆっくりと頭を振る。

「たとえその方法が確立したとしても、不定期に存在がこちらに固着するのは止められ
ない。境界の数は減らないだろう」

「じゃあ……ッ！もう向こうに帰らなければいい!!」

私が叫ぶと、十香は顔を上げて目を見開く。

まるで、そんなことは考えたこともなかつたというように。

「そんなことが——可能なはずが…」

「試したの!? 一度でも!」

「…………」

十香は唇を真一文字に結んで黙り込む。

私は更に酷くなる動悸を抑え込むように胸に置いた両手にさらに力を込める。

咄嗟に叫んだ言葉だつたけど：それが可能なら、空間震は起ころなくなるはず…。琴里の説明では、精霊がこちらの世界に移動する時の余波が空間震となると。

そして十香が自らの意志と関係なく不定期にこちらの世界に引っ張られてしまうなら。

最初からずつとこつちにとどまつていればいい。

「で、でも、あれだぞ。私は知らないことが多すぎるぞ？」

「知らないことは私が全部教える！」

私は十香の言葉に間髪入れずに返す。

「寝床や、食べるものだって必要になる」

「それも私がどうにかするツ！」

「予想外の事態が起こるかもしねない」

「起きたときに考えればいい!!」

十香は俯き、少しの間黙り込む、そして顔を上げると小さく唇を開いた。

「……本当に…私は生きていてもいいのか？」

「うん！」

「この世界にいてもいいのか？」

「もちろん！」

「……そんなことを言つてくれるのは、きっとシオリだけだぞ。ASTはもちろん、他の人間たちだつて、こんな危険な存在が、自分たちの生活空間にいたら嫌に決まつている」「そんなこと知らない!! AST? 他の人間? ほかの人たちが十香、あなたを否定するのなら! 私がそれを超えるくらいにつ!!——」

私は十香あなたにもうあんな悲しい顔はして欲しくない。

あなたには笑顔でいてほしいだから:私は!。

「あなたを肯定するつ!!!」

私は叫んだ。

そして私は…十香に向けて手を伸ばす。

その言葉に、手に、十香の肩が小さく震える。

「握つて! 十香! 今は…それでいい!」

十香は顔を俯かせ…数瞬の間考え込むように沈黙したあと、ゆっくりと顔を上げ、そろそろと手を伸ばしていく。

「シオリ——」

私の伸ばした手に十香の手が触れようとした瞬間。

「——」

私は突如感じた寒氣にびくりと指先を動かす。

まるでざらざらとした舌で全身を舐められるような…嫌な感触。

「十香！」

私ののどは咄嗟にその名を叫んでいた。

そして十香が答えるよりも早く。

「……っ」

私はおもいつきりの力で十香を突き飛ばす。

十香は予想もしていなかつた衝撃に耐えられず、ごろんと後ろに転がつた。
それから僅かな間も置かずに。

「——あ」

私は左わき腹のあたりに凄まじい衝撃を感じた。

「な——何をする！」

砂で汚れた十香が、非難の声を上げた、けど私はその声に答えを返すことができない。
息が：出来ない。

立つて いるこ とが 出来 ない。

私 は ガクツ と 地面 に 膝 を 着く。
と に かく …き もち わる …い。

「シオ …リ?」

十香 が 茫然 と し た 様子 で 言つ て くる。

わた …し は …。

(と …お …か)

そ こ で 私 の 意識 は 途切れ た。

救う者

「シオリ……？」

十香は土織の名を呼ぶが、返事はない。

地面に横たわった土織の身体は大きく抉りとられ止めどなく大量の血を流し続けていた。

着ていた制服とカーディガンは血で赤黒く染まり、見開かれ空を見つめる目元には涙が一筋流れていた。

「シ……オリ……」

十香は立ち上がるとゆつくりと横たわる土織の傍へと向かう。

既に血だまりは大きく広がり、歩く度に水音が響く。

十香は土織の頭の隣に着き膝を折ると、土織の頬を指でつついた。

反応は、無かつた。

そして十香に差し伸べられていた手もまた血だまりに沈んでいた。

数秒間の空白のあと、十香の頭が状況を理解しはじめた。

：あたりに立ちこめる焦げ臭さには覚えがあつた。

いつも十香を殺そうと襲つてくるあの一団のものだ。

如何に十香とはいえ、靈装を纏つていらない状態でいまの攻撃を受けたなら、無事では済まなかつただろう。

まして何の防護も持たない士織がそんな攻撃を受けてしまつたら。

十香は酷い目眩を感じながらも、士織の開かれたままの目にそつと手を置き、ゆつくりと瞼を閉じる。

そして着ていた制服の上着を脱ぎ、優しく士織の亡骸へとかけた。

そして立ち上がるに、俯きながら震える声で呟く。

「シオリがいてくれたなら、もしかしたら…と思つた。すごく大変で難しくとも出来るかもしれない…と思つた…でも…でも駄目だつた…やはり駄目だつた…」

そして空を見上げ叫ぶ。

「世界は……私を否定した！」

そう叫ぶと十香は、のどの奥から、その名を出す。

「〈神威靈装・十番（アドナイ・メレク）〉」

周囲の景色が陽炎の如く歪み、十香の身体に纏いつき、十香の靈装を形作る。

十香は靈装を纏えば、首を回し、背後にある高台に視線を向けた。

そこに今土織を撃つた人間がいる。

殺すに足りてしまつた人間が、いる。

十香は地面に踵を突き立てる。

瞬間、轟音と閃光と共に巨大な剣が背もたれに収められた玉座が現出する。

十番は地を蹴ると
肘掛けに立ち
背もたれから剣を引き抜く

そして、叫ぶ

『燐殺公（サンダルフオン）』——【最後の剣（ハルヴァン・ヘレヴ）!!!】

その言葉を合図とするように、玉座に無数の亀裂が走り、バラバラに碎け散る。

そして碎け散った破片が十香の持つ剣に集約されてゆき、更に大きさを増してゆく。そして全ての欠片が結合するとそこには長さが十メートルはある剣が出来上がる。

「ああ」

そしてその巨大な剣を持った十香はのどを震わせる。

「ああああああああああああああああああああああ」

天高く響くようにな。

地に轟かせるようにな。

「 $\mathcal{C}^{\#}\wedge g_T$ 」

十香の目は湿っていた。

十香は剣を握る手に力を込めると、まるで木の棒のように軽々と振り上げ、その剣を振り下ろした。

刀身の光が一層強くなり、一瞬にして太刀筋の延長線上の高台を切り裂く。

1

そして次の瞬間には十香の姿はその切り裂いた高台にあつた。

そして目前には毎回十香を襲うASTの隊員がいる。

二人の内一人は驚愕に目を見開く女、そしてもう一人は無味な表情を浮かべた少女であつた。

「この……ッ、化物め！」

驚愕していた長身の女は無骨な剣のようなものを振るつて十香に攻撃を仕掛けてきた。
しかし靈装を纏つた十香にそのような攻撃は通る事はなかつた、十香は視線をそちらに向けるだけで攻撃を霧散させた。

「嘘——」

女の顔が、絶望に染まる。

十香はそんなものには興味がないとばかりに、もう一人の少女へと目を向け、唇を開く。

「——貴様、貴様だな。我が友を……我が親友を……シオリを殺したのは……貴様だな」十香がそう言うと、目前の少女は初めて表情を歪めた。

しかし、そんなことは十香にとつてはどうでもいいことだった。

真っ黒に淀んだ瞳で少女を見下ろしながら、十香は冷静に、狂う。

「殺して壊して消し尽くす。死んで絶んで滅に尽くせ」

「土織さん、心拍、脈拍共に無反応です！」
「空間震警報発令されました！」

「フランクシナス」艦橋では報告を上げるクルーたちの声が木霊し合っていた。

「周囲に人家が無いのが救いだけど、この調子じや、いずれ街ごと消し飛ぶわね」

今までの十香が可愛く見えるほどの超絶的な破壊力。

たつた一撃で広大な開拓地と高台は二分され、中心に深淵を作つてしまふ。

そして、〈ラタトスク〉の最終兵器であつた筈の五河士織の死。琴里たちは考えうる限り最悪の状況に立つてゐるはずであつた。

しかし、艦長席に座る琴里はまるで狼狽した様子もなく、口の中でチュツパチャップスを転がしながら言う。

「ま、ちよつと優雅さが足りないけど、騎士としては及第点かしらね。今の狙撃でお姫様がやられてたら目も当てられなかつたわ」

「し、司令……」

そんな琴里に、クルートちは戦慄したような視線を向ける。

それも仕方ないだろう、今まさに姉が死亡したばかりなのだから。

「いいから自分の作業を続けなさい。士織が、これで終わりなわけがないでしよう？」

そう、ここからが、士織の本当の仕事なのだ。

「し、司令！あれは……！」

艦橋下部、メインモニタを見ていた部下が、公園が映つてゐる画面左を見ながら、愕に満ちた声を上げる。

「——來たわね」

琴里はチュツパチャップスの位置を変え、にやりと唇の端を上げる。

画面の中には、公園に横たわり、十香の上着をかけられた士織が映つていた。

そして、その制服が突然燃え始めたのである。

精靈の生成物が消失しているのではない、一切の火の気がないはずなのに制服はどんどん燃えてゆく。

けど正確には燃えていたのは制服ではなかつたのだ。

制服が燃え落ち、無残に抉られた土織の身体が露わになる。

そこで〈フラクシナス〉のクルーたちは再び驚愕の声を上げる。

「き、傷が…」

そう、燃えていたのは土織の身体であつた、酷く抉られた断面が、燃えている。

炎は土織の傷を見えなくするほどに燃え上がつてから、徐々に勢いをなくしてゆく。

そしてその炎が消えたあとには、完全に再生された土織の身体が存在していた。

そして。

『…………んん』

画面の中に横たわっていた土織の瞼が開く、そして跳ね起きるように上体を起こす。

『え…あ、あれ? 私…なんで』

艦橋内は一斉に騒然となる。

「な…し、司令。これは…」

「言つたでしょ。土織はこれじやあ終わらないって」

琴里は唇を舐めながら部下に返す。

クルーたちは皆一斉に訝しげな視線を向けてくるが、琴里はそれを無視する。
「すぐに回収して。彼女を止められるのは土織だけよ」

——意味が分からなかつた。

私は自分のお腹をペタペタと触りながら、眉を寄せた。

着ていたカーディガンとワイシャツは大きく穴が開き、おへそが見えている。
「なんで私：生きてるの…？」

もう一度お腹を触り、呟く。

私はあのときとても嫌な感じがして、十香を突き飛ばした。

そして次の瞬間には凄い衝撃を受けて、意識が途絶えたはず。

実際制服には大きな穴が開いてるし、盛大な血の染みもある、なにより背中と髪が血
でべつとりと汚れている。

「十香は…」

私は周囲を見渡し十香の姿を探した、あの攻撃は間違いなく十香を狙っていた。

瞬間、私のいる公園よりさらに高台から、漆黒の光が発生し、次いで、凄まじい爆発音と衝撃波が撒き散らされた。

「きや…ッ!?」

私は不意の事に、態勢を保てず地面に転がつてしまう。

「なにが…」

爆発のあつた方へ視線を向けると、私は身体を硬直させた。

景色が、私が意識を失う前とはまったく別物になっていた。

山肌はまるで鋭利な刃物で切り取られたような断面を晒し、滅茶苦茶に崩落していった。

「これつて……」

そう呟いた瞬間、身体から重さがなくなつた。

「ひあっ…！」

突然のことに驚きの声を上げたが、すぐに＜フラクシナス＞の転移装置の感覚だと気づいた。

「土織さん、こちらへ！」

そしてすぐに待機していた＜フラクシナス＞のクルーの人が大声を上げる。

「は、はい」

私は少し混乱していたが、クルーの人に連れられ艦橋に向かう。
そして艦橋に到着すると。

「お目覚めの気分はいかが、士織」

艦長席に座った琴里がチュッパチャップスの棒をピコピコ動かしながら言つてくる
「琴里……」

私は混乱する頭を右手で押さえるようにしながら口を開く。

「いまいち状況が分からんんだけど……一体どうなつているの？」

「ん、士織がASTの攻撃でやられて、キレたお姫様がASTを殺しにかかるわ」

琴里はそう言うと、チュッパチャップスの棒で艦橋正面の大型モニタを指す。

「な……十香！」

モニタには十香が巨大な剣を振るい、ASTを攻撃する十香と、応戦するASTの部隊が映っていた。

応戦と言うが、実質十香の一方的な蹂躪だつた。

十香の振るう剣は当たらずとも、掠めるだけでAST隊員を吹き飛ばし逆に、ASTの攻撃は十香に届くことも行動を制限させることも出来ない。

「完全にキレてるわ。よっぽど士織を殺されたのが許せないのね」

琴里が肩をすくめながら言う、私はその言葉にはつとしたように琴里に疑問の言葉を投げかける。

「こ、琴里！…そう、なんで私生きてるの！」

私の疑問に、琴里はニヤニヤと意味深げな笑みを浮かべる。

「ま、その話はあとにしましょ。今はもつと他にする」とがあるんだから」

琴里はそう言いながらモニタに映る十香に目を向けた。

「他にすること…」

「ええ。ウチとしても、精霊関係で人死にが出るのは勘弁願いたいのよ」

「そんなの、当たり前だよ！」

私は叫ぶ。

琴里は私の言葉に楽しそうに目を細める。

「オーケイ、上出来よ騎士様。行くわよ。お姫様を止めにね」

琴里はそう言うと、肩にかけたジャケットを翻し、正面に向き直ると高らかに声を張り上げる。

「〈フラクシナス〉左舷回頭！戦闘ポイントに移動！座標誤差は一メートル以内に抑え

なさい！」

『了解！』

艦橋最前部に座る操舵手が声を上げる。

そしてお腹に響く重低音と共に、〈フラクシナス〉が振動する。

「こ、琴里」

指示を出し終わつた琴里に私は声をかける。

琴里は声をかけられると再び私の方へ向き直る。

「ん、何よ士織」

「十香を止めるつて、どうやつて止めるの？」

私の問いに琴里はあからさまに呆れたような顔を作り。
ため息をついてから、さも当然ともいう感じで言う。

「何言つてるのよ、士織。あなたが止めるのよ」

「わ、私!」

その言葉に私は自分を指しながら驚きの声を上げた。

そんな私に琴里はもう一度大きなため息をはく。

「当たり前でしょ。いつまで日和つてるの。…士織以外には不可能よ」

「どうやつて…」

私が戸惑いの言葉に、琴里は咥えていたチュツパチャップスを引き抜くと、妖しい笑みを浮かべる。

「士織。呪いのかかつたお姫様を助ける方法なんて、相場が決まってるじゃない」

「そう言うと、琴里はその唇でチユツパチャップスにチユツ、と口をつける。

「そ、それって…もしかしなくとも…」

私はその言葉に、激しく動搖していた。

そして疑問の呟きに琴里はその方法を言う。

「そ、キスよ」

私はその言葉に顔をボンッと赤くさせれば口を酸欠の魚のようにパクパクさせる。けどどうの琴里は私を無視しつつなにか考えるようにし、一拍置いてから言う。

「お姫様は滯空中ね、…なら士織をここから突き落としましょ。」

琴里の穏やかでない言葉に私はハツとすると声を上げる。

「ちよ、琴里！ 突き落とすってなに？…それにキスつて！」

琴里は私の言葉を無視しつつ、パチンと指を鳴らす。

そしてどこからか現れた女の人二人が私の両脇を抱えてきた。

「さあ、士織。行つてきなさい」

琴里のその言葉を合図に私は引きずられていく

「ちよつと、琴里いい…」

「頑張つてね」

そんな言葉を聞きながら、船体下部にあるハツチまで私は連れてこられ。

『幸運を、
土織』

空中へと放り出された私の身体は重力に引かれ落下してゆく、凄まじい風が長い髪をスカートをはためかせる。

余りの恐怖に意識が飛びそうになる、けど視界に入つた影にその恐怖心を押さえ込む。

両手足を伸ばし、なんとか姿勢を安定させる。

そして次第に近づく巨大な剣を持つ少女。

私はその名を叫ぶ。

二

喉の限界を超える名、十香の名を叫ぶ。

瞬間、身体にかかっていた重力が和らぎ、落下速度が低下する。

おおおおおお

私の声に気が付いたのか、巨大な剣を振りかぶり、地面に横たわるAST隊員に止めを刺そうとしていた十香は顔を上に向けた。

その顔は涙で余すところなく濡れ、目と鼻も真っ赤に染まっていた。

そして私と目が合った。

「シオリ……？」

突然のことに十香は茫然としたまま呟いた。

緩やかになつた落下の中、私は十香の両の肩にそつと手をかける。

空に浮かぶ十香の助けを借りるようにしながら、その場にとどまる。

「……十香」

名前を呼ぶ私に十香は震える唇を開く。

「シオリ……ほ、本物、か……？」

「一応、本物だと思うかな」

私の言葉に、十香は瞳から更に涙を溢れさせる。

流れ落ちる涙は夕日を反射させ、キラキラと光る。

「シオリ、シオリ、シオリ……ッ！」

「うん、十香——」

十香の言葉に答えかけたところで、私の視界に凄まじい閃光が満ちる。

十香が振り上げていた剣が周囲を闇夜に染めそうなほどの漆黒の輝きを放っていた。

「と、十香、これって…」

「最後の剣（ハルヴアン・ヘレヴ）の制御を誤った…どこかに放出するしかない…！」

十香はそう言いながら視線を地面の方へと向けた。

私もつられて視線を向ければ、そこには今にも死んでしまいそうな鳶一さんの姿が見えた。

「だ、駄目っ！ 十香そつちは駄目っ！」

「で、ではどうしろというのだ！ もう臨海状態なのだぞ！」

そうこうしている内にも、十香の剣からは漆黒の雷が四方八方に放出され、山肌を抉つていた。

そして私は琴里の言葉を思い出す。

十香を止め。

十香を助ける唯一の方法。

「と、十香。あ、あのね…私とキスをしよう…ツ！」

「何！」

私の突然の言葉に十香を眉を寄せ驚きの声を上げる。

「え、えっと、やつぱり、忘れ——」

「キスとはなんだ!?」

「え…？」

「早く教えろ！」

「え…き、キスっていうのは、その、唇と唇を合わせ——」

私の言葉の途中で。

十香の顔が一気に目前まで接近する。

そして私の唇に——十香の唇が押しつけられた。

「——つ!?」

私は目を見開き、声にならない声を上げる。

十香は更に強く唇を押し当てる。

十香の唇の感触が——。

十香の甘い匂いが——。

私の頭の中、そして身体を駆け巡る。

瞬間、天を向いていた十香の剣に無数のひび割れが発生し、一拍後バラバラに碎け散

り、光の粒子となる。

そして十香が身に纏っていたドレスが同じような光の粒子となり空中へ溶けてゆく。

また私たちの身体もゆっくりと地面に向けて降下してゆく、落下する私たちに合わせ

て光の粒子もまた上昇するように空へ溶けていく。

ドレスが全て消え去ったと同時に私たちは公園へとゆっくり降り立つた。幾ばくかの間の後。

ゆっくりと十香が唇を離す。

私はあたふたとしながら言葉を発する。

「（ジジジジジ）、「ごめんね十香っ！」こうするしかないって琴里に：」

そんな私の言葉を遮るように十香はピツタリと私に抱き付く。

そして顔を真っ赤にしながら私の顔を見る。

「あまり見るな、馬鹿者：」

「う、うん：」

しばしの間、私と十香は静かに抱き合っていた。

「…シオリ」

十香が静かに声を上げる。

「なに？」

「また…、デエトに連れていくてくれるか…？」

「うん。いつでも連れていくてあげる」

私は十香を強く抱きしめながらそう答えた。

「…………ふああ」

あれから週末を挟んだ月曜日。
復興部隊の作業により完璧に修復された校舎には、既に相当数の生徒が当校してい
た。

そんな賑わう教室の中、私は自分の席に腰を下ろし。ぼうつと窓の外を眺めていた。
あの日。

あの後すぐに私は気を失ってしまい、再び〈フラクシナス〉の医務室のベッドに寝か
されていた。

私が覚めたあとも、施設でよく分からぬ検査やメディカルチェックを受けさせられ
た。

けど気を失つてから一度も十香の姿は見ていなかつた。

琴里に言つても検査があるからとの一点張りで結局姿を見ることが出来なかつた。

「…………はあああ」

十香と出会った日から、色々な事があった。

そんな慌ただしい日々が嘘のように、ただ何もない休日はある種の喪失感を感じる日だつた。

だけど…一つ。

一つだけ私の中で引つかかるものがあつた。

あの日。

私は十香とキスを交わした。

その瞬間、十香の靈装が消え去り、同時に自分の身体の中に、何か温かいものが流れ込んでくるのを感じていた。

…あれは何だつたんだろう。

「…………」

私は無言で自分の唇に触れた。

あの日から三日も経つていたが、まだ十香の唇の感触が残っている気がして、私は顔を赤くする。

私はハツとしてからブンブンと頭を振つた。

そこで教室の扉が開く音と、教室がざわめく音が聞こえてきた。

私は視線を扉の方へ向ける、そこには鳶一さんが手足や額に包帯を幾重にも巻いて

立っていたのだから。

「……」

私は息を詰まらせた。

顕現装置（リアライザ）を用いれば大殆どの怪我はすぐに治るらしい。けど鳶一さんは三日経つたというのにあれだけの包帯を巻いている。相当酷い怪我だつたんだろう。

「…………」

鳶一さんは教室中の注目を集めながら、自分の席へと向かうかと思った。けど実際には私の目の前まで歩いてくる。

「お、おはよう、鳶一さん」

少し気まずかつたけど挨拶をすれば、鳶一さんは深々と頭を下げた。

「と、鳶一さん！」

私が驚くと同時に教室内もまた騒然となる。

しかし鳶一さんは全く気にする様子もなく、頭を下げたまま言葉を発する。

「ごめんなさい。謝つて済む問題ではないけれど」

あとで聞いた話によると、十香を狙つていたあの一撃は、鳶一さんが放つたものだつたらしい。

「え、あ、とりあえず頭は上げて、ね？」

私が若干戸惑いながら言うと、鳶一さんは頭を上げる。

けど頭を上げた後も鳶一さんは私の前から動こうとはしなかった。

私はどうしよう、と頭を悩ませていると、救いの女神さまが現れる。

「はーい、皆さーん。ホームルーム始めますよおー」

教室前扉を開け、タマちゃん先生が入ってきたからだ。

鳶一さんも先生が入つてくるともう一度私に頭を下げてから自分の席へと戻つていった。

「はい、皆さん席に着きましたね？」

タマちゃん先生は鳶一さんが着席したのを確認すれば元気な声でそう言う。

「そして今日は出席を取る前にサプライズがあるのぉ！……入つてきて！」

タマちゃん先生の言葉にクラスメイト達がざわめき出す。

「転校生？」

「マジで!？」

「女の子？男の子？」

などという声がそこかしこから聞こえてきた、そして一拍置いて。

「ん」

と、返事をするような声が聞こえて。

私は驚きで一瞬息が止まつた。

だつて今、教室に入ってきたのは。

「——今日から厄介になる、夜刀神十香だ。皆よろしく頼む」

来禅高校の制服を着た十香が、ものすごくいい笑顔をしながらそう言った。

四糸乃編

新しい家族

5月

あの衝撃な日々から約一ヶ月。

私の日常は様々な所で変化していた、その最たるものは。

「おねーちゃん、おつはよー！」

朝、私が朝食を作っていると、中学校の制服に着替えた妹の琴里が元気よくリビングに入ってくる。

「おはよう、琴里」

琴里はそのままソファーアに座ると、テレビのリモコンを手に取り電源スイッチを押す。

テレビの電源が入れば朝の情報番組が画面に映り、コメントーターの陽気な声が聞こえてくる。

ちょうどその時、リビングの扉が再び開く。

「おはようなのだ、シオリ、琴里」

そう言いながら夜色の髪を赤いリボンでポニー・テールに結い上げ、眠そうに擦る目はまるで水晶を思わせる輝きを放つ少女がリビングに入ってくる。

「おはよう、十香」

「おっはよー、十香！」

そう私たち五河家の新しい家族、十香だ。

十香はふああともう一度大きなあくびをすると琴里と同じようにソファーアーに腰かける。

そして首を回し、キッチンに立つ私の方を見る。

「シオリ、朝餉はまだか？」

「もうすぐ出来るから、待つててね」

「うむ！」

十香は元気よく返事をすれば、首を戻し、テレビを見る。

そんな様子を見ながら、私は調理を再開する。

そう丁度三週間程前。

——三週間前——

急に降り始めた雨の中、私は一応と持っていた折り畳み傘を差しながら、高校からの

帰路に着いていた。

十香が学校に入つてから一週間程。

十香も学校に慣れはじめてきて、私としても随分安心できるようになつていたが。何かあるたびに鳶一さんと小競り合いを起こしており、その度に私が止めに入るという事もまた日常になりつつあつた。

「なんとかならないのかなあ」

そんな事を考えながら、丁度神社の前を通りかかつた時のことだつた。

「女の子？」

そう雨の降りしきるなか、可愛らしいウサギの耳のような飾りを着けた外套に身を包んだ小柄な少女が神社の境内に傘も差さず、ぴょんぴょんと跳ね回つていたのだ。

そして何度目かのジャンプの後。

ずるべつたあああああああん

と言う音がしそうなほど綺麗に顔から転んだのだ。

その際になにか白い物も一緒に前の方に飛んでいくのも見えた。

「ちょっと…」

流石に放つてはおけず、私は小走りで女の子に近づく。

そしてすぐ隣にまで寄れば膝をおり、手を伸ばす。

「大丈夫？」

私はそつと少女を抱き起こす。

そこでやつと顔を見ることが出来た。

歳は琴里と同じくらいだろうか、軽くウェーブの掛かった空色の髪に可愛らしい顔。

私はお人形さんみたいだと思った。

「……！」

そんな事を考えていると、少女が目を開く。

開かれた目はサファイアを彷彿とさせる澄んだ青色だった。

「大丈夫？ 怪我はない？」

私はそう声をかけるが少女は顔を真っ青に染め、唇をふるふると震わせ、何かを探すように首を左右に振るだけだった。

「えっと…大丈夫だから、ね？」

私は震える少女の頭をそつと撫でながらそう言う。

少女は当初こそ酷く怯えていたが、徐々に落ち着いてくれた。

その様子にホツとすると視界の端に白い物が見えた。

私は少女の右手を取り、そつと傘を握らせるときち上がりその白いものを取りに行く。

白いものはウサギのパペツトだつた。

私はパペツトを拾い上げれば、再び少女のそばに戻る。

少女は私が戻つてくるとびくつと身体を震わせる。

私はしゃがみ込み、少女と目線を合わせれば、傘を握つていなし左手にパペツトをはめてあげた。

『たつはー、ありがとねおねーさん。たーすかつたよー』

「えーと…」

少女は突然はめてあげたパペツトの口を、バクバクと動かし始めた。

そして困惑する私を他所に言葉を発する。

『いつやー、よしのんとしたことが、ころんじやうだなんてほんとツイでないねー』

パペツトはカラカラと身体を揺らしながら笑いを表現する。

私は困惑しながらも、視線を少女の方へ向けようとしたが、パペツトが間にに入るよう

に動く。

『どつころでさー、おねーさん。これすつごいいいねー、なんなんだいこれ？よしのん初
めて見たよー』

パペツトは先ほど少女に握らせてあげた折り畳み傘を指しながら言う。

困惑も収まつた私は、ちょうど琴里を見てあげるような目で少女とパペツトを見なが

ら答える。

「これはね、折り畳み傘だよ。よかつたらお家に帰るまで使って」

『いいの？ よしのん返さないかもよ？』

「いいよ、けど大事に使つてね？」

『もちだよ、おねーさん』

パペツトがそう言うと、少女は飛び跳ねるように立ち上がる。

『うんじやね。おねーさん、これありがとね』

そう言いながら少女は踵を返し境内から走り去つていった。

私は手を振つて見送れば、私はようやく自分の状態に気づく。

長い髪は雨に濡れ、カーディガンは裾のあたりから水滴を垂らすほどにびしょ濡れ

だつた。

「あー……」

私はガクツと肩を落とせば、立ち上がり自宅へと歩き出す。

数分後、自宅に着けば鞄の中からキー ホルダーに繋がつた鍵を取り出し、鍵穴に差し込み、回す。

「あれつ？」

私は首を傾げた、鍵を回しても開いた音がしなかつたからだ、試しにドアノブに手を

掛け、ドアを引いてみる。

するとドアは抵抗なく開く。

「琴里、ようやく帰ってきたのかな？」

私はそんな事を呟きながらドアを開け、玄関に足を踏み入れる。

そうあの日、十香を保護したあとから琴里は事後処理とやらで家に帰ってきていた。かつた。

私としてはいくら忙しくても家には帰つてきて欲しかつたし、なにより。

一週間前のあの非日常的な出来事について聞きたい事が山ほどあつた。

「琴里ー、ただいまー」

私はスカートとカーディガンを軽く絞りながら声をかける。

「とりあえずシャワー浴びなきや…」

そう呟き。制服を絞り終えると、ローファーと濡れた靴下も脱いで、玄関を上がる。

濡れた足がフローリングに着く度にペタペタと音を立てる、ちようどリビングのドアの前あたりになるとテレビの音が聞こえてきた。

その音を聞き、琴里はテレビ見てるのかな、などと考えつつお風呂場に向かい、脱衣所の扉を開けた。

この家には今は私と琴里しか居ない、必然琴里がリビングに居れば他には誰も居ないと思つていた。

だが、そこには思わぬ先客が居た。

膝まで届きそうな夜色の髪に水晶を思わせる瞳を持つ美少女が。

「……十香？」

「ぬ…、おおシオリカ」

そう、脱衣所に十香が居たのだ。

ちょうど十香はワイシャツを脱ぎ、下着に手を掛けていた所だつた。

私は驚きで扉を開けたまま固まつてしまつっていた。

十香はそんな私の様子をみると唇を開く。

「どうしたのだシオリ」

「え、えっと、その…」

言葉が中々出てこない、頭の中にはなんで十香が家に？とか十香の身体つてやつぱり綺麗だなーなどという事で溢れかえつていたからだ。

そうこうしている内に濡れ鼠になつていた私の姿を見て得心がいつたとばかりに十香は頷く。

「おお、そうかシオリも湯浴みをしにきたのだな、ちょうどいい、一緒に入ろうではない

か一

そう言いながら十香は扉を開けたまま固まっていた私の手を掴むと脱衣所に引き込む。

——数分後

湯気が立ち込めるお風呂場の中、私と十香は湯船に向かい合う形で一緒に入浴していった。

十香はご機嫌そうに再放送しているアニメの主題歌を鼻歌で奏でていた。

一方の私はとていうと、とりあえず落ち着きは取り戻していた。
誰かと一緒にお風呂だなんて中学校の頃に琴里と一緒に入っていた事があるくらいで、同年代の女の子と一緒に入るのは初めてな気がする。

自然と…私の視線は十香に向いていた。

同じ年代とは思えないプロポーション、シミ一つない白磁のような肌、お風呂で上気し赤みがさした頬。

そしてぷつくりとした桜色の唇。

と私はそこまで見てからハツとし頭をブンブンと振っていた。

(なんで私こんなに見ているの…)

雑念を振り払うようにお湯で顔を洗う

そして落ち着いた所で当初の疑問を思い出す。

「十香、そういうえばなんでもうちに居たの？」

当然の疑問ではあつた、十香は〈フラクシナス〉で生活していたはずだつた。

十香は私の質問に鼻歌を止めれば、首を傾げた。

「妹から聞いていないのか？なにやら、私の検査も終わつたからこれからはごく普通の生活に慣れるためとやらでしばらくの間ここに住むことになつたのだ」

「こーとーりー…」

十香の言葉に私はため息をつく。

そういう大事な事は早めに言つて欲しかつた。

十香がウチで生活するなら色々必要なものもあるしお部屋だつて用意しないといけないので、などと困り顔で考へてみると十香が不安げな眼差しを送つてきていた。

「…シオリ、迷惑だつたか…？」

その言葉に私は手を伸ばし、十香の頭を撫でながら言う。

「もう…迷惑だなんて思うわけないよ、十香」

十香は私の言葉に笑顔になれば再び上機嫌で鼻歌を歌いだす。

お風呂から上がった私達はお互に髪を乾かし、部屋着に着替えたあとリビングに向かつた。

そしてリビングでくつろいでいた琴里と何故かお母さんの服を着てコーヒーを飲んでいた令音さんを引っ張つて自分の部屋へと向かつた。

十香はちょうど始まつた再放送のアニメを見ているから三十分位は一人で大丈夫だと思う。

自室に着けば琴里と令音さんにクツシヨンを渡して座つてもらい、机を挟んで反対に私も座つた。

「で、琴里、何か言うことは？」

琴里は私の問いに頬を指で持ち上げてから言う。

「今日からしばらく十香がうちに住むことになつたのだ！」

そう言い切るとえつへんと胸を反らし、いつもの無邪気な笑顔を作る。

私は頭を押さえながらため息を一つつく

「それは十香から聞いたし、私としても歓迎するんだけど。せめて一言くらい事前に

言つて欲しかつたかな」

「…それに関しては、すまなかつた」

と今の今まで口を開かなかつた令音さんが口を開いた。

「…今日は十香のアフターケアの為にもなるべく早くしたかつたから、このような形になつてしまたんだ」

「アフターケアですか？」

「…ああ、君は先週、口づけによつて十香の力を封印したね？」
「あ、う…はい…」

私は消え去りそうな声で返事をしながら首を前に倒す。

そして唇にあのときの感覚が蘇つてきて、顔を赤くする。

「おねーちゃん、赤くなつてるー。かわいいー」

「あうう…」

琴里の心底楽しそうな声に、私はまた少し顔を赤くする。

「…まあ、そこまではいいのだが、一つ問題があつてね。…今、シアと十香の間には目に見えないバスのようなものが繋がつて いる状態なんだ」

「バスですか…どういうことなんですか？」

「…簡単に言うと、十香の精神状態が不安定になると、君の身体に封印してある精霊の力が、十香に逆流してしまう恐れがあるということさ」

「そんな…」

私は驚きが隠せなかつた。

封印した十香の力が、精靈の力が逆流する。

あの大剣の一振りで天を裂き、大地を割る力を再び十香が持つてしまふということだろうか。

やつと普通の女の子として生活している十香が…また。

令音さんは言葉を続ける。

「…君も知つての通り、十香は今日まで〈フラクシナス〉の隔離エリアで生活していた」

私は令音さんが言葉を続けた事で考えをやめ、話に耳を傾ける。

「…十香の精神状態は當時モニタリングしているのだが…〈フラクシナス〉にいると、学校にいるときと比べて、ストレス値の蓄積が激しいんだ」

「そう、なんですか？」

「…ああ、それに一日に二回行つていた定期検査もあまりお気に召さなかつたようでね。今はまだ許容範囲内だが、このまま放置しておくのも好手とは言い難い。」

そこまで言うと令音さんはあごに指をてる。

「…検査の結果も安定してきたから、そろそろ〈フラクシナス〉外部に、十香の住居を移そうという事になつてね」

「そういう事だつたんですか」

「…ああ、それに君の家になつたのも十香の為でもあるんだ。シア、君といふときが一番
十香の状態が安定するんだよ」

私は令音さんの言葉に、十香の顔を想い浮かべていた。

いつも学校で元気に振る舞つてゐる十香もやつぱり内心では不安だったのではと。

「…逆に言えば、君以外の人間は、まだ十香の信頼を得てゐるとは言い難いのさ。私や琴
里は比較的顔を合わせる機会が多いが、それでもね」

「わかりました、…けどこれで一件落着なんだね」

私はふうと息を吐き出しながら、ホツとしたように言つた。

けど令音さんはゆらゆらと首を横に振つた。

「…精霊が十香一人だけだなんて、誰が言つたのかな？」

「そ、それって…」

「…ああ、空間震を起こす特殊災害指定生物、通称・精霊は十香だけではない。現在彼女
の他にも数種が確認されているんだ」

「そんな…」

私は言葉を失つた。

精霊は十香一人だけじゃない…。

緊張とも、戦慄とも分からぬ感情が心の底をぐるぐると渦を巻く。

私はギュッと膝の上で手を握りしめていた。

令音さんはそんな私に構わぬ言葉を続ける。

「…シア。君には引き続き、精霊との会話役を務めてもらいたい」

私は考えた。

精霊が他にも居るということを。

精霊が居るということはまた空間震も発生しつづけるということ。

そして：他の精霊もまた十香のように：望まぬ現界やASTとの戦いを強いられているのではと。

けどそんな精霊を助ける術を私は持っている。

私は…。

「…ります、精霊はみんな私が助けてみせます」

私は令音さんの目を真つ直ぐ見つめそう言つた。

するとパチパチと手を叩く音が聞こえた、目をそつちに向けると琴里がチュッパチャップスを咥え、手を叩いていた。

「流石、士織ね。そう言つてくれると思つてたわ」

そう言う琴里は〈フラクシナス〉に居るときに着けている漆黒のリボンで髪を纏めていた。

俗にいう司令官モードというのだ、私は琴里の方へ向き直る。

そう当初の目的だつた聞きたいことが山ほどあつたのを思い出したからだ。

「ねえ…琴里」

「何かしら？」

琴里は悠然と返事を返してくる。

「その、聞きそびれていたんだけど。結局〈ラタトスク〉は一体何なの？そして琴里、琴里は一体いつ〈ラタトスク〉に入つたの？それに…」

そう、この質問以上に私が聞きたかったこと。

私は胸を押さえるようにながら問う。

「…私の…あの十香を封印した力は…一体なに？」

琴里は舐め終わつたチユツパチャプラスの棒を口から出せば、新しいチユツパチャプラスを取り出し、包装を解き口に咥え話し始める。

「…ちょうどいい機会だから簡単に話しておこうかしらね」

そして渡したクッショーンに体重を掛ける。

「〈ラタトスク〉は有志により結成された…言うなれば自然保護団体みたいなものよ。まあ、存在は公表されていないけれどね」

「保護団体…」

若干腑に落ちない部分もあつたが、まあ、精霊という存在を保護している訳ではあるからあながちその表現は間違っていないのかな、と考える。

「ええ、そして＜ラタトスク＞結成の理由にして、最大の目的は精霊を保護して、幸福な生活を送らせることよ。…ま、最高幹部連の中には精霊の力を得てどうこうしようつていう奴もいるようだけれど」

「あ、空間震を防ぐことじやないんだね」

「それはあくまで副次的なものよ。そこだけ見るのなら、私たちもA S Tも変わらないわ」

「…それもそつか。…そういう組織があるとして、琴里。琴里はいつ、どんな理由があつて司令官になんてなつたの？私全然気づかなかつた」

正直琴里に隠し事をされていたのは少し悲しい、けど隠し事をするなどは言えないけれど。

けどまだ中学生の琴里がこんな重大で、命にも関わるかもしれないことに携わつていたことは姉としてすこし不満でもあり悲しかつた。

琴里は表情から私の心境を察してくれたのか、鼻から息をふうと吐く。

「私が＜ラタトスク＞実戦部隊の司令官に着任したのは…大体五年前のことよ」

「五年前……五年前！」

私はつい大声を上げてしまつた。

けど五年前というと琴里はまだ小学三年生の筈だ。

私の驚愕と困惑を他所に琴里は話を続ける。

「ま、数年の間はずつと研修みたいなものよ。実際に部隊の指揮を執りだしたのはここ最近」

「そ、そういうことじゃないよ琴里。そんな小さな女の子を——」

「まあ、なんていうの？〈ラタトスク〉が私の溢れ出る知性に気付いてしまつたのよね」「なななな、納得できないよ！」

「納得できないと言われても、事実なんだから仕方ないじゃない。少しは素直に妹の言葉を信じなさいよ、人の言葉を疑えば自分の頭が良く見えるとでも思つてるの？」

普段の可愛い琴里とまるで違つた挙動、言葉に私は戸惑う。

「琴里のその……二重人格みたいなのは……えつと……〈ラタトスク〉の影響なの？」

私の質問に琴里はフンと鼻を鳴らす。

「失礼かつ短絡的な発想ね。もう少し頭を使つてものを言いなさい。第一これは……」「これは……？」

「……」

琴里はまるでしまつたといつた微妙な表情を浮かべ私を見たあと、ブンブンと首を振

る。

「…その話はどうでもいいの。今は〈ラタトスク〉の話でしょ。同じく五年前、組織の転機となつた、ある出来事が起つたの」

「琴里、はぐらかさ…」

その言葉を遮るように琴里は咥えていたチュツパチャップスの棒を指で挟み、私に向ってきた。

「キスによつて、精霊の力を封印することのできる少女が発見されたのよ。それによつて〈ラタトスク〉は積極的に精霊を保護しようとする方針にシフトしていくつたわ」

「な……」

私は驚愕に眉を寄せ、言葉を詰まらせる。

「それが…私…？」

「ええ」

琴里はうなずき、私に向けていたチュツパチャップスを咥えなおす。

私は混乱していたが、あと一つ分からぬことがある。

「なんで…なんで私にはそんな力があるの？」

「さあ？」

「ちょ…さあ、て…」

「私は本当に知らないだけ。『キスを介して、精霊から力を奪い、安全な状態にし、自身に封印する』。という能力が士織に備わっているのを知っているだけ、なぜ士織にそんな力があるのかは少なくとも私は知らないわ」

「じゃ、じゃあなんで私にそんな力があるってわかったの？その五年前に何があったの？」

？

私は机に手をつき身を琴里の方へと乗り出すようにしながら問う。

けど琴里は目線を下に逸らし、少し憂いを帯びた、この司令官の時には見せない表情を浮かべる。

そう、感慨に浸るような…悲しい思い出を思い起こすかのような。

過ちを悔いるような…そんな顔を。

「琴里…？」

私は流石に心配になり声をかける、すると琴里はハツとしたように肩を震わせ、顔を上げる。

「えと…そう、〈ラタトスク〉の観測器で…調べたの。それでわかったのよ。私も同じ

…

琴里は歯切れの悪い調子で言うだけだつた。

けどそんな琴里を更に追及することは私には出来なかつた。

「と、とにかくよ」

琴里はバツの悪そうにしたあとコホンと咳払いし、私を指さす。

「必要な情報は『土織には精霊をなんとかする力がある』。それだけよ、はい：話はお終い」

琴里はそう言つて話を終わりにすると立ち上がる。

そしてポカンとする私を無視するようにスタッタと扉に向かい出て行つてしまふ。
令音さんもそれに続くよう立上ると部屋から出て行つた。

私はしばらくポカンとしていたが、扉がバタンと閉まるど、大きく息を吐きながらベッドに寝ころんだ。

「はあ…」

そして寝転がり天井を見上げ、考える。

琴里にもやつぱり言えないこと言いたくないことの一つや二つはあるのだろう。
それにもやつぱり言えないことの一つや二つはあるのだろう。
それにもやつぱり言えないことの一つや二つはあるのだろう。

それにもやつぱり言えないことの一つや二つはあるのだろう。

などと考えていたが不意に扉が開く音がした、私は上体を起こし、扉の方を見る。

そこには十香は不安げな眼差しを私に送つていた。

「…シオリ、琴里と喧嘩してしまったのか？」

琴里が部屋から出ていくところを見ていたのか十香がそんなことを言つてきた。

私はベッドから降り立ち上がると十香の方へと向かう。

「大丈夫だよ、十香。喧嘩はしていないから」

「本当か、シオリ。もし：私のせいだつたら…」

十香がそこまで言いかけた所で私は十香の頭をわしゃわしゃと撫でる。

「大丈夫だつてば。それより十香。そろそろお腹すいたでしょ？お夕飯作るから下に降りよ」

「うむ！」

十香は顔を明るくすれば元気よくそう返事した。

雨の少女

そんな事があつたのが三週間前のこと。

十香もすっかり馴染んで、今は琴里と肩を並べてテレビを見ている。

私はそんな二人の後姿を見ながら朝ご飯の支度をしている。

お出汁と合わせた卵液をフライパンへと何度も分け流し入れながらくるくると巻いてゆく。

「よしつ、出来た」

数分後、キッチンとリビングにはお味噌汁と卵焼きの香りが広がっていた。

今日の献立はご飯、ネギと岩海苔のお味噌汁、焼き魚、出し巻き卵、付け合わせのお惣菜、等々純和風に仕上がっている。

器に盛りつけながらテレビを見る二人に声を掛ける。

「二人ともご飯出来たよ

「待つて いたゞ、おねーちゃん！」

「うむ！」

その声に二人はソファーから立ち上がり、キッチンの方へと向かってくれば盛り付け

の終わつたものから順にテーブルに運ぶのを手伝つてくれる。
運び終われば、それぞれ椅子に座る。

「いただきます」

「いただきまーす!」

「いただくのだ!・」

三人で手を合わせてそう言えばご飯を食べ始める。

朝食後、食器を片付け残りの準備を終えれば三人揃つて玄関を出て学校へと向かう。
学校に到着し自教室に着き、扉を開ける。

すると私達の目の前にササッと殿町君が素早く出てくる。

「やあ、士織ちゃん、十香ちゃん。今日もまた一段と綺麗だね」

と開口一番そう言いながら。

殿町君は左手をお腹に当て、右手を後ろに回しながらまるで執事のような礼をする。

「あはは、おはよう、殿町君」

「うむ、おはようなのだ」

毎回のことなのだけど殿町君の大仰なポーズには慣れない。

十香はと、元気に挨拶を返している。

殿町君は体勢を崩せば腰に手をあてうんうんと頷いていた。

「いやー、今日も朝からこうやつて学校が誇る美少女二人に挨拶を返してもらえて幸せだな」

と、そんな殿町君の後ろにいつの間にかクラスメイトの男子と少数の女子がもの凄くいい笑顔で立っていた。

そして男子二人がガシツと、殿町君の両脇を抱える。

「え、あれ？」

困惑する殿町君をそのまま教室の外へ連れ出していつてしまつた。

ポカンとする私と十香だつたがしばらくして聞こえてきた悲鳴に顔を見合わせる。するとどちようど予鈴が鳴つたのでそれぞれの席に着いた。

私たちが席に着くのと同時に先ほど殿町君を連れて行つたクラスメイトがぞろぞろと戻ってきた。

「はいはーい、みなさん。おはよおござります」

それに続くようにタマちゃん先生も教室に入つてくる。

そして教卓に着けば出席を確認する。

「えーと、殿町君は…お休みですかねえ？」

そう言いながら出席簿に×印を記入する。

哀れ殿町君。

「それじやあ、連絡していた通り今日は一限から三限は、家庭科になります。班分けは言われていると思うので皆さん移動してくださいねえ」

タマちゃん先生の言葉に教室が賑やかになる。

そう今日の家庭科の時間は男女を二組に分けて被服と調理実習を行う予定だった。私は自分の班分けを思い出しつつ席を立つ。

ふと隣の十香を見れば初めての調理実習にウキウキしているようだ。

「ほら、十香も移動しないと」

「シオリ、私の作る物を楽しみにしていてくれ！」

「うん、楽しみにしてる」

十香はそう言いながら手を振りながら教室を後にする。

私も十香を見送れば自分の移動先である被服室に向かう。

「シオリ！ クツキイというものを作ったぞ！」

午前中の授業が終わつたお昼休み、十香が白いプラスチック製の容器を手に持ち、教

室へと戻つてきた私の前にやつてくる。

そして興奮氣味にそう言いながらずいと容器を突き出す。

「そつか、今日はクツキーだつたんだね」

「うむ！皆に教えてもらひながら、私がこねたのだ！食べてみてくれ！」

十香はそう言いながら手にした容器の蓋を開ける。

そこには、ちよつと形が崩れでいたり、ところどころ焦げたりした星型だつたり人型だつたりするクツキーが沢山詰まつていた。

私は十香が一生懸命にクツキー生地をこね、形を作る姿を想像しながら容器から一枚、クツキーを手に取ろう手を伸ばそうとした、が。

「待つて」

私の右側から聞こえた聞き覚えのある声にピタツと手を止める。

視線をそちらに向ければ想像した通りの人。

肩に届くか届かないかの髪に、整つた顔だちの少女。

鳶一さんが左手に十香が持つてているものと同じ容器を持ちながら立つていた。

「鳶一さん？」

「ぬ」

私は首を傾げながら名前を呼ぶ、対して十香は不機嫌そうに眉根を寄せ不満げな声を

上げる。

鳶一さんは私達二人を見つめながら、ゆっくりと近づいてくる。

そして私の目の前、どどのつまり十香の隣に辿り着くと、左手に持った容器の蓋を開け、十香と同じように私に向けて突き出してくる。

「夜刀神十香のそれを口にする必要はない。食べるならこれを」

容器の中には整然と同じ大きさ、形のクツキーがびつしりと綺麗に並んで詰まっていた。

「え、えっと…」

「邪魔をするな！・シオリは私のクツキーを食べるのだ！」

私が困惑の声を上げると、十香がふんすか！といつたようなふうに声を上げる。

けど鳶一さんは微塵も怯まず、表情も動かさず、声を出す。

「邪魔なのはあなた。すぐに立ち去るべき」

「何を言うか！あとから来ておいて偉そうに！真似をするでない！」

「焼いた時刻は私の方が早い。そしてあなたのクツキーを彼女に摂取させるわけにはい

かない」

「な、なんだと?!」

「あなたは手洗いが不十分だつた。加えて調理中、舞い上がつた小麦粉で咽せ、くしゃみ

を三度している。これは非常に不衛生

「し、シオリは強いからそれくらい大丈夫なのだ！」

「因果関係が不明瞭。…それに、あなたは材料の分量を間違えていた。レシピ通りに仕上がっているとは思えない」

「つ？」

鳶一さんの指摘に十香は眉をひそめ、自分のクツキーと鳶一さんのクツキーを交互に見る。

「な…つ、何故その場で言わんのだ！」

「指摘する義務は私にはない。…ともあれ私の方が、彼女を満足させる可能性が高いことは明白

「う、うるさいっ！貴様のクツキイなぞ、美味いはずがあるかつ！」

十香はそう叫ぶと、目にもとまらぬ速さで、鳶一さんの容器からクツキーを一枚つかみ取り、自分の口へと放り込んだ。

そして数回咀嚼すると。

「ふあ…つ」

白い頬をほんのりと桜色に染め、恍惚とした表情を浮かべる。
どうやら相当に美味しかったみたいだつた。

けど十香はすぐにハツとしたように首をブンブンと横に振り、再び不機嫌そうな顔を作った。

「ふ、ふん、大したことはないなーし、シオリ早く私のクツキイを食べるがいい！」

十香はそう言うやズイズイと容器を私の顔の目の前まで突き出してくる。

「私のを食べるべき」

鳶一さんも対抗してか同じように容器を突き出してくる。

二人の射貫くような視線に私は少したじろぐ。

：どちらかを先に食べてしまつたら大変な気がする。

私はちよつとお行儀が悪いと思いつつも両の手で十香と鳶一さんの容器から一つづつクツキイを取り、同時に齧る。

「う、うん。とつても美味しいよ二人とも」

十香と鳶一さんはそんな私をジーッと見る。

「私のほうがちよびつと速かつた」

「私の方が、○・○一秒速かつた」

十香と鳶一さんが同時にそう言い放ち、そして静かに顔を見合わせる。

「ええと…」

いつものパターンだとこのまま取つ組み合いになりそうになるので私は二人の間に

割り込むように身体を進める

二人も私が間に入れば取つ組み合いは自重してくれたようだ。

「はああ…」

どうしたものかと一度大きなため息を吐く。

瞬間。

ウウウウウウウウウウウウウウ——

街中にけたたましく不快な警報音が鳴り響く。

お昼休みでざわついていた教室がシーンと静まりかかる。

空間震警報。

「…………」

隣の鳶一さんは一瞬逡巡のようなものを見せるも、容器をどこかに一瞬でしまうと目にも止まらぬ速さで教室から出て行ってしまう。

「…………ツ」

私は複雑な心境でその後ろ姿を目で追う事しか出来なかつた。

鳶一さんはA S Tの隊員。

空間震が起ころということは精霊が出現するという事。

戦いの場。

——すなわち精霊を殺すための。

「……」

私はギュツと手を握りしめた。

私には鳶一さんを止めるることは出来ない。けど……。

そこに先ほど鳶一さんが出て行つた扉から、ぼうつとした調子の声が教室に響く。
「…皆、警報だ。すぐにシェルターに避難してくれ」

声の主、白衣を纏つた令音さんが廊下の方へ指を向けながら言う。

クラスメイト達はその言葉に続々と廊下へと出てゆく。

「ぬ？ シオリ、一体皆はどうへ行くのだ？」

十香がクラスメイト達の様子を見て首を傾げる。

「えっとね…シェルターだよ。学校の地下にあるの」

「シェルター？」

「うん。説明はあとでするから私達も行こう、十香」

「ぬ、ぬう」

十香は怪訝そうな顔をしながらも手にした容器に蓋をする。

そして、一緒にクラスメイト達の後に続いて廊下に出ようとしたところで。

「…シア。君はこっちだ」

私は令音さんに首根っこを掴まる。

「れ、令音さん？こつちつて…＜フラクシナス＞…ですか？」

「…そうだ、＜フラクシナス＞だ」

私は他の生徒に聞こえないよう声をひそめながら問う。

令音さんも同じように声をひそめ答える。

「…前に君は精霊を助けると決めてくれた。だからもう一度しつかりと見てほしい。精霊とそれを取り巻く現状を」

「…わかりました」

令音さんは私の返事に眠たげな半眼のまま小さく首肯する。

そしてクラスメイト達が全員列に並ぶのを見れば昇降口の方へと顔を向ける。

「…さあ、急ごう。空間震まで、もう間もない」

「は、はい。とお…あ、令音さん。十香は…一緒に行かなくともいいんですか？」

私は十香の方に視線を向け令音さんに訊く。

十香はシエルターに向かう為に列を作るクラスメイト達に驚いたような視線を送つていた。

「…ああ、そのことか。…うむ、十香は皆と一緒に避難してもらおう」「え？いいんですか？」

「…ああ。力を封印した今の十香は人間とそう変わらない。それに、精霊とASTの戦いを見て、自分のときのことを思い出されても困る。言つただろう？〈ラタトスク〉としては出来るだけ十香のストレスを蓄積させたくないんだ」

「え、でも…」

私がそう言いかけたところで廊下の奥から甲高い声が響いてくる。

「ほ、ほらつ、五河さんに夜刀神さん、それに村雨先生までっ！そ、そこで立ち止まらないでくださいっ！早く避難しないと危険が危ないですよ！」

私たちのクラス担任のタマちゃん先生が焦った様子で言つてくる。

先生、ちょっとと言葉が支離滅裂ですよ。

「…ん、捕まつても面倒だ。行こうか」

令音さんは目配せすると昇降口の方へと足を向けた。

「あ、れ、令音さん——」

昇降口へと向かう令音さんにはあと息を吐く。

私は十香の手を取り、その手をタマちゃん先生に預ける。

「先生。十香をお願いします」

「ふえ？あ、え、は、はい。それはもちろん」

私から急に十香任せられたタマちゃん先生が呆気にとられたような目と口調で言

う。

十香は、と、いうと、不安そうに眉を寄せ、私を見てくる。

「シオリ…？」

「十香。いい？先生と一緒にシェルターに避難しててね」

「シオリは、シオリはどうするのだ？」

「わ：私は、ちよつと大事な用事があるんだ。先に行つててね。ね？」
私は、そう十香に言えば、先を行く令音さんの後を追う。

「！　し、シオリ！」

「五河さん！村雨先生まで！」

心配そうな二人の声を聞きながら、私と令音さんは校舎の外へと走つてゆく。

|

「…ああ、来たわね二人とも。もうすぐ精霊が出現するわ。令音は準備をお願い」

私と令音さんが、＜フラクシナス＞艦橋に到着すると、艦長席に座つた琴里から、そう言葉が飛んできた。

「…ああ」

令音さんは小さく頷くと艦橋下段のコンソールへとつく。

「さて…土織」

無言でいた私に琴里が声を掛けてくる。

「この前に腹は決めてもらつたのだけれど、心の準備は大丈夫かしら？」

「だ、大丈夫…だと思う…」

私は緊張した面持ちで答える。

そこへ艦橋内に警報音が鳴り響く。

「な…なに？」

「非常に強い靈波反応を確認、来ます！」

私が警報音にたじろいでいると艦橋下段から男性クルーの声が聞こえてくる。

琴里は報告を聞くと指を鳴らす。

「オーケイ。メインモニタに出現予測地点の映像を出してちようだい」

琴里の指示でメインモニタに街の映像が映し出される。

映し出されたのは私もお買い物に行く時に通つたりもする大通りだつた。

当然の事だけど人の姿はなく、ゴーストタウンを思わせる様子だつた。

そんな映像の中心が揺んだ。

「え…？」

モニターが故障したのかと思った、けど違った。

何もないはずの空間に水面に石を投げ入れたときにできるような波紋が断続的に出来ていた。

「な、なにこれ…」

「ああ、士織は見るのは初めてだつけ？」

琴里がそう言うのと同時に小さな閃光がディスプレイに生じ、瞬間轟音と共に画面が真っ白くホワイトアウトする。

「――！」

私は両手で口を押さえ声にならない声を上げる。

数秒後、ディスプレイは再び景色を映し出した。

そこに映る景色は先ほどとはまつたく違う物になっていた。

オフィスビルやショッピングセンターが立ち並んでいた通りの一部がすり鉢状に綺麗に削り取られていた。

また爆発の余波のせいだろうか、街路樹や看板などは折れ曲がったり、建物のガラスなども軒並み割れてしまっている。

その様は、ひと月前に私が初めて十香と出会った場所と同じだった。

「これが…空間震…」

私が震える声でそう呟くと、琴里が「ええ」と言いながら首肯する。

「…精霊がこちらの世界に現界する際の空間の歪み。それが引き起こす突発性災害よ」

「……」

十香と出会ったときなどで廃墟を見たことはあつたけど、実際に起ころる瞬間をはつきりと見たのは初めてだつた。

小さく指先が震える。

「ま、今回のは比較的小規模ね」

「そのようですね」

艦長席に座る琴里が腕組みをしながら言い、右斜め後ろに立つ神無月さんが相槌をうつ。

「僕倆…と言いたい所ですが〈ハーミット〉ならばこんなものでしよう」

「まあ、そうね。精霊の中でも気性の大人しいタイプだし」

今のが小規模?

私は一瞬何を言つてゐるの?と思つたが、すぐに思い直した。

確かに最初に十香と出会ったときはそれこそ被害範囲は直径で百メートルはありそ
うだつた。

けど今回はだいたい十数メートルほど、何度も見てきたことのある琴里達にしてみれ

ば確かに小規模なんだろう。

けど、頭では理解できても、早く大きく鳴る心臓は静まつてはくれない。

「…ねえ、琴里」

「何？土織」

琴里たちの会話の中に聞いたことのない単語を聞き、私は琴里に声を掛けた。

「〈ハーミット〉って、一体なんなの？」

「ああ、今現れた精霊の識別符号…まあコードネームよ。ちょっと待つてなさい。——
画像拡大できる？」

琴里はそう言うとクルーに指示を出す。

すぐに映像がグングンとズームアップされてゆく。

「…雨？」

小さく呟く。

映像に雨と思われる水滴が降り注いでいた。

けどそれはすぐに気にならなくなつた。

クレーターの中心に小さな少女の姿が確認できたから。

「……っ！」

衝撃が全身を駆け抜けた。

画面の中心に映る、一人の少女。

その姿を私は一度見たことがあつたから。

「あ、あの子…」

フードにウサギの耳のようなものがついた緑色のコートを羽織り。

左手にはウサギのパペツトを付けた、十三か十四歳くらいの青い髪の女の子。

私の記憶違いか見間違いでなければ間違いない。

三週間前、十香が家にやつてきた日に出会つた女の子だ。

「…？どうしたのよ、土織」

私の様子を不審に思つてか琴里が怪訝そうに声を掛けてくる。

一度唇を湿らせると私は唇を開いた。

「私…あの子に、会つたことがある…」

「なんですか？一体何時？」

「三週間前…十香がうちに初めて來た日に…」

私はあの日のことを一つづつ思い出しながら琴里に話す。

一通りの話を聞いた琴里はクルーに指示を飛ばす。

「三週間前の一六〇〇時から一八〇〇時までの観測データを私の端末に出して。大至急

よ…」

数秒後データが送られてきたのか琴里は手元の端末に視線を落とし、しばし見つめる。

「…目立った数値の乱れは確認できないわね。十香の時と同じか。…士織、なんで早いうちに言わなかつたの？」

「だ、だつて精霊だつたなんて思わなかつたのから…」

私が答えるのと同時に先ほどとは違う警報音が艦橋に響く。

「!?、こ、こんどは何？」

「精霊が現れたんだもの。動くのは私たちだけじゃないわ」

琴里のその言葉で私は分かつた。

「A S T…」

「そつ」

画面に再び視線を向ければ少女…<ハーミット>と呼ばれる精霊がいる場所に向かいくつもの白煙が向かっていくそして爆発が発生する。

爆炎と土煙の中から小さなシルエットが飛び出す、<ハーミット>だ。

彼女はペペットを掲げるような格好のまま宙を舞い、上空に浮遊するA S T隊員たちの間をすり抜けるように身を翻し、飛翔する。

けどA S T隊員たちは間髪いれずに対応する両腕や肩部に装着している機関砲やミ

サイル、ロケットなどなどありとあらゆる火器を使用して攻撃を行う。

「あ、危ない！」

私は思わず叫ぶ、がそんな声は無意味であり放たれた機関砲弾やミサイルは〈ハーミット〉に吸い込まれるように命中する。

「あんなに小さな子なのに……」

口に両の手をあて震むような声でいう。

「……今更何言つてるのよ、士織」

琴里がそんな私を半眼で見ながら言つてくる。

「十香の時に学習しなかつた？ ASTにとつて精霊がどんな姿形をしているかだなんて一切関係ないわ。あるのは日本、ひいては世界を守る使命感と、人類にとつて最も危険な存在を排除するっていう至極まつとうな生存本能だけよ」

「だからつて……そんな……」

私がそう呟いたと同時に爆炎の中から少女が再び飛び出してくる。

そして私は気づいた、さつきもそうだつたが彼女は……〈ハーミット〉は一切の反撃などをせず只々逃げ回つてているだけだつたから。

「あの子は……反撃しないの……？」

「ええ。いつものことよ。〈ハーミット〉は精霊の中でも極めて大人しいタイプだし」

「なら…つ」

「A S Tに情けや容赦を求めるのは無駄よ。彼女が、精霊である限り」「……つ」

琴里の言葉に私は唇を噛む。

自分でも分かっていた。

彼女の〈ハーミット〉の気性や性格なんて A S Tには関係ない。

彼らはただ、この世界に仇なす敵を討つだけなんだから。

それを止める方法は一つしかない。

私にしかできないこと。

「……琴里」

「何よ」

「私は——あの娘を、助けたい！」

琴里は無言で私を見つめ、口の端を僅かに吊り上げる。

「だから——手伝つて！」

そこまで私が言い切ると、琴里はニヤリと口角を上げ、口にしたチユツパチャップスの棒をピンと立てる。

「それでこそ私のおねーちゃんよ」

そして身体を正面に向き直すと艦橋の全クルーに向かつて声を投げる。

「総員、第一級攻略準備!!」

「はツ！」

その言葉に全クルーが一齊に返事をし端末を操作し始める。

琴里はその光景を眺めながら唇をペロリと舐める。

「さあ…私たちの戦争〈デート〉を始めましょう」

雨の少女Ⅱ

「えつと…ここでいいのかな?」

私はインカムに向けてそう問い合わせた。

あの後〈ブラックシナス〉船体下部にある転送装置で地上へと送られた私は商店街を過ぎた所にあるデパートの中に居た。

『ええ。精霊も建物内に入ったわ。ファーストコンタクトを間違わないようね』

「うん、分かった』

そう言うと私は一度辺りを見回した。

琴里と令音さんによると〈ハーミット〉は境界数が多いらしく、過去の行動パターンと令音さんの解析を突き合わせれば進路や行動の予想がつく…らしい。

「…」

ふと一か月前の事を思い出す。

今みたいに〈ラタトスク〉からアドバイスや指示を貰い、受けつつ十香と会話したときのことを。

けど、まさかひと月程で再び精霊と会話することになるとは思つてもみなかつたけ

ど。

『土織。〈ハーミット〉の反応がフロア内に入つたわ』

「！」

不意にインカムから響いた琴里の言葉に一瞬身体を硬直させる。

——瞬間。

『君も、よしのんをいじめにきたのかなあ……？』

「きやつ！？」

そんな言葉と同時に目の前に頭上からにゅつとウサギが現れる。

私が驚きの声を上げ、尻餅をついてしまうのと同時にウサギ、もといパペツトを持った〈ハーミット〉が目の前にスッと降りてくる。

『駄目だよー。よしのんが優しいからつておイタし過ぎるのは。……って、んん？』

訝し気な声を上げ、パペツトが私の顔をまじまじと見てくる。

しばらくすれば、パペツトが器用にほん、と手を打ち、パクパクとパペツトの口を動かし言葉を発する。

『おおやあ？ 誰かと思ったら、親切なないすばでーのおねーさんじやない』

「な……」

『待ちなさい、土織』

私が口を開こうとしたところでインカムから琴里の声が聞こえてきた。

しばらく後、再び琴里の声が聞こえてくる。

「ほ…本当にそんなこと言うの…?」

私は床にお尻をつけたまま、小さく咳く。

だつて琴里の指示があまりにも突飛だつたから。

『ううん? どつたの?』

私の咳きに、パペツトが器用に首を傾げ疑問の声を上げる。

『早くなさい、士織』

私は意を決すると、立ち上がり右手を腰に当て、左手で髪を流すようにかき上げ。

「ふ…つ、そんな奴のことは知らないわ。私は、通りすがりの風来坊よ…」

そう言い切つた。

…穴があつたら飛び込みたい位に、もの凄く恥ずかしい。

『……』

案の定、パペツトはボカンと口を大きく開けたまま黙つてしまつ。

そしてそのまま互いに無言のまま数秒の時が過ぎる。

「…ちょ…ちょつと、琴里。どうしよう…」

流石にまずいのではないかと思つてそう言つた瞬間。

『っふ……つ、はあ、はははははははつ！』

ペペツトがカラカラと頭を揺らしながら笑い出した。

『なあーにい、おねーさん意外とひょうきん物？あつはつは、今どきそれはないわー』

「あはははは…」

私もペペツトに合わせるように苦笑する。

『どーよ』

「…あー…うん、ごめんね」

自慢気に言う琴里に小声で返すと、私は〈ハーミット〉の方へと向き直り、腰を落とし目線を合わせる。

〈ハーミット〉も合わせるように私の顔に視線をさせてきた。

「えつと、私は五河士織。あなたは？」

そう言うと、ペペツトが大きく口を開け、しまつたつといった動きを見せ言葉を発する。

『おおつ、なんてみしていくつーよしのんとしたことが、自己紹介を忘れるだなんてつ！、よしのんの名前はよしのん！。可愛いっしょ？ 可愛 いつしょ？』

「うん、いいお名前だね。…えつと、よしのんはペペツトさんの名前であつてるのかな？、それともあなたの名前？」

そう言いながらパペットの奥、フードを被つた青い目の女の子へと視線を向ける。

『……』

するとパペットがピタリ、と身体を動かすことを止め、口を真一文字に閉じてしまつた。

と、同時にインカムから琴里の声と、後ろから鳴り響く警告音が響いてくる。

『士織、精霊の機嫌数値が一気に下がつてゐるわ。あなた何を言つたの?』

『え…、私はただ、パペットの名前なのが聞いて…それになんで腹話術でしか喋らないのかなつて…』

そう琴里に返すと、パペットが顔を目の前までスッと近づいてきた。

『士織ちゃんの言つてることがわからないなあ…。パペットとか…腹話術つて…なんのこと?』

さつきまでの陽気な口調から変わつて穏やかな口調、それなのに何故かとてつもないプレッシャーのようなものを感じて、私は少し後ずさる。

『士織。原因はあとで探りましよう。今はとにかく機嫌を直すのよ』

琴里からの指示が聞こえてくる。

「そ、そうだよね。よしのんはよしのんだよね。あははは…」
と。

『ううんつ、もう、士織ちゃんたらおちゃめさんなんだから』

さつきまでの凄みの様なものがふつと霧散し、陽気な口調でそう言う。

「な…何だつたんだろう、今の」

『でえ、士織ちゃんは、よしのんになんのよう?』

「えつと…」

『士織』

咄嗟に言葉が出ないで、視線を泳がせていると琴里から通信に入る。

『間を空けないで。とにかく、精霊の方から聞いてきたのだからここは一気に進めましょう。』

「一気に…つて?」

『デートよ、デート。せつかくの大型デパートよ、これを生かさない手はないわ。私とデートしましよう、でいいのよ。いい士織? 「デートしない?」じや駄目よ、相手に選択肢をまた渡さない事が重要よ。』

「う、うん…」

私は琴里に返事をすれば、『よしのん』に向き直った。

「わ、私とデートしましよう」

と、琴里が言つたままの台詞を言つてしまふ。

『…誰がそのまま言えって言つたかしら』

琴里の呆れかえつた声が聞こえてくる。

けど『よしのん』は気とした様子を見せないで、むしろテンションが上がつていてるのか、パペツトの小さな手を激しく振つている。

『ほつほく！、いいね、いいね！土織ちゃん！かわいい見かけによらず大胆に誘つてくれるじやないの。もつちろんオーケイよん』

「あ、ありがと」

『…ま、結果オーライにしといてあげる』

『ほらほらあ、土織ちゃん。はやくう』

「あ、ま、待つてー」

私は琴里のため息交じりの声を聞きながら、既に歩き出している『よしのん』を追いかける。

『よしのん』と出会つてからどれほどの時間が経つただろう。

私と『よしのん』はデパートの中を『よしのん』の興味の赴くまま歩き回りながら、会

話に花を咲かせていた。

時折琴里からの指示も来るのだけれど、『よしのん』は笑いの沸点が低いようで、些細な事にも身体を震わせカラカラと笑つてている。

『存外いい感じじゃない』

琴里のそんな声が聞こえてくる。

この子の精神状態を常時モニタリングしている〈フラクシナス〉でもいい数値が出ているらしい。

『もともと人懐っこい性格なのかしら。好感度も上々。なんだつたら今すぐにキスしようとしても、拒まれないんじゃない?』

「あ、あはは…」

本気か冗談かわからない琴里の言葉に頬をかく。
けど私も驚いてはいる。

それこそ今では普通に会話が出来る十香も、最初に出会ったときは酷い人間不信で、言葉を間違つたらなら死んじやいそうな目にあつたから。

——けど。

『いやあ、やっぱりお喋りするのはたーのしーねー』

「そうだね」

パペツトが言う言葉に返しながら、私は視線をパペツトを扱う女の子の方へと向ける。

三週間前に会つたときも、今も。陽気に、雄弁に喋るのはパペツトの腹話術だけ。本人の口はちつとも動いていない。

自分はここに居ないとでもいうよう…。

『お、おお？』

「！」

不意に響いた声に私は思考を中断した。

『すつごおい！何かねありやー！』

パペツトは興奮を表すみたいに手をバタつかせ、走り出した。

その先には、お子様用の高さ一メートル程のカラフルなジャングルジムだつた。

『よしのん』はスルスルとシャングルジムを上つてゆくと天辺の棒の上に立ち私の方へと向く。

『わつはははは、どーよ士織ちゃん。カツコいい？よしのんカツコいい？』

「そ、そんなところに立つたら危ないよ」

私はジャングルジムの下へ駆け寄りながらジャングルジムの上に立つ『よしのん』へ言う。

けど『よしのん』は不満げにペベツトの腕を組む。

その間にも身体はフラフラと揺れて今にも落ちてしまいそうだ。

『んもう。カツコいいかどうかって聞いてるのにー…のわつ、わわわつ!?』

「あ
——
つ！
」

ついにバランスを崩してしまったのか『よしのん』はバタバタと手を振つてからすぐ下に居る私の方へと落ちてきた。

私は為す術もなく『よしのん』に押しつぶされる様に床に倒れ込んでしまう。「つ……いふあ……」

私は仰向けのまま声を出した。背中も痛いけど何故か顔ももの凄く痛い。

そして私は気付く。

目の前、サフアイアの様な蒼い瞳と同色の髪、そして端正な顔に。
——唇に触れる柔らかい感触にも。

1?

数瞬の間の後、今どういう状況なのかを頭が理解した。

『…やるわね、士織』

琴里の驚いたような声が、真っ白になつてゐる頭に響く。

...
[

数秒後、『よしのん』がすくりと無言のまま身を起こした。

そこでようやく唇が離れた。

キスをしてしまった。

けど…これで『よしのん』の力は封印できたはずだよね

だけど…なんだろう、十香とキスをしたときのような…。

身体に温かいものが流れ込んでくるような感覚が無かつたような…。
そんな思考はインカムから鳴り響く警告音によつて断ち切られた。

「え…？」

この音は精霊の機嫌が悪くなつたときに鳴るものだつたはず。

私は顔をハッとあげ『よしのん』を見る。

『あいたたたあー…ごめんごめん、士織ちゃん』

『よしのん』は先ほどと変わらない口調でそう言う。

「あれ…？」

『よしのん』に怒つた様子は全然見られない。

私が首を少し傾げたとき、インカムから焦つたような口調の琴里の声が聞こえてくる。

『士織、緊急事態よ。…たぶん最悪の』

その言葉と同時に足音が響く。

その足音に私は首を回し視線を音のした方へと向ける。

そこには――。

「ど、十香……」

そこに立っていたのは紛れもない十香だつた。

雨に打たれた全身はびしょ濡れになり、走ってきたのか肩を上下させ荒く息をしてい
る。

けど……なんで、どうして此処に……。

「……シオリ」

私の思考を遮るように、十香が声を出し、鋭い視線で私を見る。

「……今、何をしていた？」

「な、何つて……」

私はその問いに思わず唇に触れた、けどすぐにハツとしてその手を背中に隠すようにな
しまう。

「……あれだけ心配させておいて……女とイチャコラしているとは何事かああああああああああつ!!」

ダンツ――！

十香がそう叫ぶように言うと同時に足を床に打ち付けた。

瞬間、床が十数センチほど陥没し放射状の無数の亀裂を発生させた。

「な……」

『あつちやー、だいぶ精神状態が不安定になってるわね、精霊の力が逆流しちゃってるわよ』

琴里がため息交じりに言う。

『そういうえば令音さんがそんな事を言つていた。』

「ど、どうしよう……」

『どうするもこうするも、なんとかして十香の機嫌を直しなさい』

『そんなこと言われても……』

私と琴里が会話を交わしている間に十香は私と『よしのん』の場所に着く。

そして射貫くような鋭い視線で私と『よしのん』を交互に見ると、唇を引き結ぶと私は視線を、左手でピシリと『よしのん』を指した。

『シオリ！お前の言つていた大事な用とは、この娘と会うことだつたのか？』

「えと、その……」

確かに十香の言う通りではあるんだけど、多分はいつて言つても十香には真意は伝わらないと思う。

どうしたら——。

『おねーさん?ええと…』

今まで十香の登場にキョトンとしていた『よしのん』が十香に向けて声を出す。
気のせいだと思うけど、パペットの顔がもの凄く悪戯っぽいような笑顔になつて
いる。

「十香だ」

『よしのん』に問われた十香は『よしのん』の方へ身体を向け、腰に両手を当て慄然とし
た様子で返す。

『よしのん』はそんな十香を悪戯っぽい顔で見ながら口を開いた。

『十香ちやあん。君には悪いんだけどお、士織ちゃんは君に飽きちゃつたみたいなんだ
よねえ』

「な…つ」

私と十香が同時に驚愕の声を出す、『よしのん』はそのまま言葉を続ける。

『話を聞いてると、どうやら十香ちゃんとの約束すっぽかしてよしのんのところに来
ちゃつたみたいじやない?これつてもう決定的じやない?』

「…つ」

十香が肩をぴくりと揺らす、見れば今にも泣きだしてしまいそうな顔を作つていた。

「よ、よしのん、何を言つて——」

私は抗議の言葉を上げようとしたけど——十香が私の口を手で覆い遮る。

「シオリは少し黙つていろ」

十香は有無を言わせないようなプレッシャーを向けてくる。

「——、——！」

私はどうにか手を離してもらおうとするが今の十香の力には敵う筈もなかつた。

そんな私たちの様子が愉快で仕方ないよう、『よしのん』は言葉を続ける。

『やあー、ごめんねえ、これもよしのんが魅力的すぎるのがいけないのよねえ。別に十香ちゃんが悪いって言つてるわけじゃないのよう？たーだあー、だからと言つて十香ちゃんを捨ててよしのんの元に走つちゃつた土織ちゃんを責めるこども出来ないってゆうかあ』

「む、むがーつ！」

十香が遂に我慢の限界に達したのか叫び声を上げた。

「うるさい！黙れ黙れ黙れえ！駄目なのだ！そんなのは駄目なのだ！」

十香はまるで駄々を捏ねる子供の様に手をバタバタと振りながら声を上げる。

『ええー、駄目つて言われてもねえ。ほらほらあ、土織ちゃんもはつきり言つてあげなよう』

そこまで言つてからパペツトが私の方を一瞬向いた。

『十香ちゃんはもういるない子、つて』

「つ！」

瞬間、十香は素早い動作でパペツトの胸ぐらを両の手で掴み持ち上げた。

小さなパペツトは、簡単に『よしのん』の手から外れ、高く持ち上げられる。

「……!?」

瞬間、『よしのん』が崩れ落ちるかのように床に座り込んでしまった。

見ると顔は蒼白になつて呼吸もひどく荒くなつていて。

一方の十香は両手で掴み上げたパペツトに切り裂きそうなほどの鋭い視線を向け詰め寄つている。

「私は……私は、いらない子ではない！・シオリが・シオリが私に、ここに居ていないと！
そう言つてくれたのだ！それ以上の愚弄は許さんぞ！」

十香は目元に涙を滲ませ、そう言う。

けどパペツトは当然答えることは出来ない。

十香はパペツトが喋つていたと思つてゐるようで、ウサギをグラグラと揺すりながら更に問い合わせる。

「答える！何とか言つたらどうだ！」

そんな様子を震える瞳で見ていた『よしのん』が被つていたフードを深く被り直し、立ち上がる。

そして恐る恐るといった様子で十香の服の裾を引っ張る。

「ぬ…。なんだ? 私は今こやつと…」

「か…え、して…つ、 くださ…つ」

十香が掴み上げたパペツトを取ろうと両手を伸ばしてぴょんぴょんとジャンプをする。

(そういえばあの子のちゃんとした声を聞いたのは初めて…)

『何しているの土織。よしのんの精神状態まで揺らぎまくりよ。早く止めなさい!』

琴里の声に私は一度唾を飲み込んでから唇を開く。

「えつと…ねえ、 十香。 その…パペツト返してあげてもらえないかな…?」
「…!」

私の言葉に、 十香がかつと目を見開いて、 愕然とした様子を見せる。

「シオリ…やはり…私よりこの娘の方が…」

「つ…ち、 ちが…」

十香の言葉に私が返そうとした瞬間。

「<氷結傀儡 (ザドキエル) >…つ!」

「よしのん」が右手を振り上げ、そう叫ぶように言いながらその手を床へ向けて振り下ろす。

——瞬間。『よしのん』の背後の床がひび割れ、そこから突き破るように巨大なウサギが現れた。

「な……」

私と十香が驚きを隠せないでいると、『よしのん』がウサギの背中に飛び乗る。

次の瞬間、ウサギの眼が赤く煌くと同時にグゥオオオオと咆哮を響かせる。

同時にウサギの全身から真っ白い煙が噴出する。

「冷た……!?

煙の冷たさに思わず身震いする、同時に琴里の叫ぶような声が響く。

『このタイミングで天使を顕現!?!——まずいわ逃げなさい、士織!』

「天使つて……」

『十香の『塵殺公(サンダルフォン)』と同じものよ!忘れたの!』

その言葉に私は驚きで眼を見開く。

天使がどんな物か分かつた事と、そしてもう一つ。

さつき偶然とはいえ『よしのん』とはキスをしたのに、精霊の力が封印出来ていないと、事に……。

瞬間、ウサギ：＜氷結傀儡（ザドキエル）＞が再び咆哮を上げる。

同時にフロアの窓ガラスが甲高い音と共に割れ、碎け散り、フロアに雨粒が入つてき
た。

そして雨粒がフロアに漂う煙に触れた瞬間、包丁程の大きさの鋭い氷の刃に姿を変え
た。

氷の刃はフロアの商品を切り刻みながら私達の方：いや十香へと向かつてきた。

「十香！」

私は十香の名前を叫ぶのが早いか、傍らに立つ手を引っ張り、十香の身体を抱きしめ
るように床に身を伏せた。

その一瞬後に十香の立つていた場所に無数の氷の刃が突き刺さった。

私は十香を抱きしめたまま顔を＜よしのん＞と＜氷結傀儡（ザドキエル）＞の方へと
向けた。

＜氷結傀儡（ザドキエル）＞は身を翻すと巨大な体とは裏腹に、身軽な動きでさつきま
で十香が居た場所を通り抜け、割れた窓から外へと飛び出していった。

＜氷結傀儡（ザドキエル）＞が飛び出すと同時に、無数の銃声や爆発音が鳴り響いてい
たが、それも暫くすると鳴り止んだ。

私は息を吐き、唇を開く。

「助かつた…のかな…」

『ええ…反応は完全に消失したわ。A S Tも引き上げるみたいね。にしても…なかなか無茶するわね、土織』

私の呟きに琴里がホツしたような、呆れたような声で返してくる。

私はもう一度息を吐いてから、抱きしめたままの十香を見る。

「怪我はない、十香？」

「いいから早く離さんかっ…！」

十香はそう言いながら私の胸を押し、離れた。

十香は頬を赤くさせ、駄々つ子みたいな表情を作りながら立ち上がる。

「十香…？」

私は十香に向けて手を伸ばす。
けど――。

「…っ！触るなっ！」

「いた…っ」

伸ばした手は十香の振り払うような手で弾かれた。

私が手を引っ込めるのを見た十香は一瞬ハツとして悲しそうな顔を作る。
けどすぐに「むむむ…」とうなり声を上げると顔を背けてしまう。

「十香…あの…」

「うるさいっ！話しかけるな！どうせシオリは、私よりあの娘の方が大事なのだろう…っ！」

「な…っ、何を言つて…」

私が呆気にとられたような声を出すと、十香は苛立たしそうに地団太を踏んだ。
その度にフロアの床に亀裂が走つて、陥没していく。

「きやつ…!?

十香は私を一瞥した後、肩を怒らせながらフロアの出口へと歩いていく。

「十香……」

私はその後ろ姿を見送る事しか出来なかつた。

雨まだ止まず

「ねえ…十香ー」

私は眉間に皺を寄せ、声を出しながら、目の前の扉をノックする。
反応は…ない。

「十香…お願い、話を聞いて…」

そう言いながら再びノックする。

瞬間、返事の代わりにとばかりにドンッと凄まじい音が響き、家が文字通り震えた。

「…！」

思わず私はビクッと身体を揺らしてしまう。

そして扉の向こうから十香のくぐもった声が聞こえてきた。

「ふん、構うな。…とつととあつちに行つてしまえば一かば一か！」

そこまで言うと、また反応が無くなってしまった。

「はあ…」

大きくため息をつき、私は一度十香の部屋の前から離れ、廊下を自分の部屋へと向かいながら独りごちる。

「どうしたらいいんだろう……」

『士織、ちよつといいかしら？ 確認しておきたいことがあるのだけれど』

『そんな時、琴里の声が右耳から響いてきた。

『そうだインカムを付けたままだつた。

「あ…琴里…。えつと…なにかな？」

『士織、あなた、ちゃんとよしのんとキスをしたのよね？』

「ひやい…っ？」

いきなりの質問に私は素つ頓狂な声を出してしまう。

『いいから、答えてちようだい。士織はあるのとき、確かによしのんと唇を合わせた。…それに間違いはないわね？』

「う…、うん…」

『ふーむ…』

「な…なに…。あ、あの、あれは事故だから…っ」

『あー、はいはい。わかつてるわよ。むしろアレを狙つてやつっていたのだつたら褒めてあげたいくらい』

「うう…、じやあ何なの？」

私が問い合わせると、琴里は少しうなつてから返してくる。

『…どうやら、キスをしたのに精霊の力が全く封印されていないみたいなのよ』
その言葉に私は眼を見開いた。

確かに…『よしのん』はあのキスのあとにも精霊の力を発揮していた。

『まあ、十香の時ほど好感度が高かつたわけでもないし、力全てを封印することは出来なくとも——ほんの少しも封印出来ていないつていうのは引つかかるところね。あの時の数値的には力の二、三割はいけると思つたのだけれど』

そこまで言つてから琴里がまたうなり声をあげる。

『何か…そう、よしのんに特殊な能力があるのかしら。それとも…』

「ねえ…琴里。よしのんの方も大事だと思うんだけど…その…」

私の言葉に琴里も察してくれたみたいで、すぐに返してきた。

『ああ…、十香のことね。で、どうなの、様子は』

「うん…お話しをしようとしてはいるんだけど、全然駄目で…」

『なるほどね。数値は落ち着いて、顕在化した力は経路を通して再封印はされたみたいだけど…。兎も角早めに機嫌を直しておいた方がよさそうね』

「けど今はいくら私が話しかけても…」

『…なら、シア。よければなんだが、その件は私に任せてはくれないか?』

私の声に答えたのは琴里ではなく、妙に眠たそうな声…令音さんだ。

「令音さん…」

『…十香もシア、君と今顔を合わすのは気まずかつたりするだろう。なら当事者以外が一度話を聞いてみるのが良いと思うが』
「はい…」

確かに、この状況なら誰か信頼のおける人に任せてみるのも手かもしれない。

「では明日…土曜日だつたね。日中、十香を借りていくよ。そうだな…生活用品の買い出しどとでも言えばいいか」

翌、5月27日。

「と、いうわけで、十香。買い物に行こうと思うのだが、ご同行願えるかな?」

昨日言つた通り、令音さんが家にやつて来て、十香の部屋の扉の前に立ちそう言つた。
令音さんはいつもの白衣と軍服の組み合わせではなく、白色のシャーリングカットソーや暗めの色のスキニージーンズ、トートバッグを肩掛けにしたお買い物スタイルだつた。

すると、中から昨日と変わらない苛立たしそうな十香の声が響いてくる。

「うるさいつ、私のことは放つておけと…」

「…ふむ」

「昨日からこんな感じで：」

令音さんは暫くあごに手を当てて、考え方をする。

そして肩に掛けたトートバッグからタブレット端末みたいなものを取り出して、画面を見ながら何か操作をしていた。

暫くした後、令音さんは端末をバッグの中に仕舞うと、声を発した。

「…十香」

「構うなと言つているだろう！私は——」

「…買い物のついでに外で食事を、と思つているのだが…どうかな？」

令音さんがそう言うと、十香が途端に黙り込んでしまう。

数十秒程経つた頃、不意に扉がギイと音を立てて開き、中から不機嫌そうな顔をした十香が顔を出す。

十香は一応着替えていたのか、薄いベージュのペプラムニットソーに桜色のプレイリーエンブロイダースカートといつた格好をしていた。

けど寝ていなか目元には隈がうつすらと浮かんでいた。

「十香…」

「ふんっ…」

十香は私の姿を確認するなり鼻を鳴らしこいつと顔を背けて、のしのしと階段へと歩

いていく。

「早く行くぞっ！」

「…ん、そうしよう。ああ…今日も朝方から雨が降り続いている。傘を忘れないようにしてくれ」

そう言いながら令音さんも十香の後を追うように歩き出す、途中振り返つて私に目配せをしてきた。「任せてくれ」と言つているみたいに。

「お願ひします」

私は令音さんに頭を下げ、二人を見送る。

「はあああ…」

大きくため息をついてから私も歩き出す。

階段を降りながら呟く。

「私もお買い物に行つてこようかな」

昨日、学校の帰り道に商店街で買い物をする予定だったけど、結局出来なかつた事を思い出す。

階段の途中で踵を返して自分の部屋へと向かう。手早く身支度を整えてから家を出た。

「えつと…まずは八百屋さんかな」

歩いて十数分、商店街近くまで着いた私は必要な物を頭の中リストアップしながら歩いていた。

「あれ…？」

歩きながら辺りを見ていた時だつた。

昨日の空間震で破壊された場所、その規制線の向こう側。

瓦礫の陰で動く影を見かけて、私はその場で立ち止まつた。

そして目を凝らして影を見る。

フードにウサギの耳のようなものがついた緑色のレインコートを着た女の子が濡れた路面に膝を置いて瓦礫の辺りを何かを探すように漁つていた。

「よ…よしのん…？」

「…っ!
!!」

私はその見覚えのある姿を見て、その名前を口に出していた。

瞬間、『よしのん』がビクッと身体を震わせ、私の方へと振り向いた。

そして急いで立ち上ると私に背を向けて逃げるよう走り出す。

「ま、待つて！、なにもしないからっ！」

咄嗟に私は『よしのん』へそう呼びかけた。

『よしのん』は少し逡巡するようにした後、足を止め私を窺うように僅かに顔をこっちに向けてくる。

昨日とは違つて怯えたような表情を浮かべる『よしのん』に私は驚く。

「えつと……」

そして呼び止めたのは良いけどこの後を考えていなかつた私は中々言葉を繋げられないでいた。

なにかないと『よしのん』を見て気付く、左手に昨日着けていた筈のパペツトが見えないことに。

「あ……その、パペツトどうしたのかな？」

「……！」

私がその疑問を口にすると、私を窺つていた『よしのん』のカツと見開かれる。

そして踵を返し私の元へとパタパタと走り寄ってきたと思うと、私の服を掴みグイグ

イとまるで問い合わせる様に引っ張つてくる。

「あ、えつと。パペツトを探しているのかな？」

「……！」

私がそう言うと『よしのん』は一層強く服を引っ張りながら力強く何度もうなづく。そして不安そうな瞳で私を見上げるようになる。

「う、うめんね。私も分からないんだ…」

私がそう答えると『よしのん』は希望が無くなつたような顔を見せると、その場にペタリと座り込んでしまつた。

「うえ…つ、え…つ…」

そして顔を俯かせ嗚咽を漏らす。

「あ、えと……」

私は一瞬困惑の声を上げる、けどすぐに差していた傘を傍らに置き、膝を路面につければ『よしのん』を優しく抱きしめる。

「大丈夫、大丈夫だから…」

そう言いながら『よしのん』の背中をさする。

雨の降りしきる中暫くの間、『よしのん』を抱きしめていると次第に嗚咽が小さくなつてくる。

「よしのん、私もパペツトを探すの手伝うよ

「……！」

私がそう言うと『よしのん』は、ぱつと顔を上げ、驚いた様に目を見開く。

数秒後、『よしのん』は初めて顔を明るくして、うんうんと力強く首を縦に振る。

私も首を縦に振ると『よしのん』の手を引いて立ち上がる。

「あ、そうだ琴里に連絡しないと…」

琴里に連絡をと思い出せば、ポケットの中を探していつものインカムを取り出す、インカムを右耳に着け、コンコンと指で叩く。

「琴里、聞こえる?」

暫くの無音の後、琴里の声が返ってくる。

『どうしたのよ、士織』

「えっと、今よしのんと一緒に居るんだけど——」

私がそう言つた直後、琴里の大きな声とバタバタと大きな音が聞こえてくる。

『——オッケー、それで詳しい状況を教えて頂戴』

説明を求める琴里に簡単に状況を説明する。

琴里は私から状況を聞けば

『……なるほどね、状況は分かつたわ。こっちでもカメラをあるだけ送つて、昨日の映像も確認するわ。出来るだけ彼女とコミュニケーションを取りながら捜索してちょうだい』
「わかった」

通信を終えると、私は眼の前の『よしのん』へと視線を向ける。

『よしのん』はゴシゴシと涙を拭つていた所だった。

「えつと、それでペペットいつどこでなくしちやつたのかな?」

私の問いかけに『よしのん』は逡巡するみたいに視線を泳がせてから、唇を開いた。

「…き、…のう…」

ウサギの耳つきのフードの端っこをきゅっと掴んで顔を僅かにうつむかせて、目元を隠しながらたどたどしく言葉を紡ぐ。

「こわ…い…人たち、攻撃…され…てつ…気づいたら…いなく、なつ…」

「えつと…昨日ASTに攻撃されたときだね」

私が言うと、『よしのん』がこくりと頷く。

「あのときだね…」

私はそう言いながら周りを見回す。

崩落した雑居ビルや亀裂の入った道路、倒れた街路樹等々。中々大変そうだった。

「うん…じやあ探そう、よしのん」

「…!」

『よしのん』が首肯して、暫く口をモゴモゴとさせながら、声を出す。

「わ、たし…は、」

「え?」

「私……は、よしのん、じゃなく……て、四糸乃。よしのんは……私の、友だち……」「四糸乃……？」

私がオウム返しのように名前を言えば、四糸乃是コクリと頷く。
と、頷いた後四糸乃是踵を返して走つていこうとする。

「あ、ちょっと待つて」

走つていこうとする四糸乃の手を掴んで引き止める。

「よかつたらこれ。もう濡れちゃつてると思うけど」

そう言いながら、掴んだ四糸乃の手に傍らに置いていた傘を拾い握らせる。

四糸乃是不思議そうに首を傾げていたけれど。

雨粒が傘に当たり弾け、流れ落ちるのを見れば、四糸乃是興奮氣味に空いている手を
パタパタと動かす。

私はその様子を見て、いつかの神社で会つた時にもこんな事があつたなと思い出す。
暫くすると四糸乃が私に問いかけるような目線を向けてくる。

「え、あ、私？」

私が自分を指さすと四糸乃がコクコクと頷く。

「私は大丈夫だよ、いいから使つて、ね」

四糸乃是暫く逡巡するように私と傘を交互に見てから、口を開く。

「あ…りが…う…」

ペこりとお辞儀をすると今度こそ踵を返して、パペツトを再び探しに向かう。

『土織つたら、格好いいことしちやつて』

「あはは…」

琴里のからかうような声に苦笑いで返してから四糸乃の後を追う。

くうううう——

パペツトと一緒に探し始めてからどれ位経った頃か、そんな可愛らしい音が聞こえてきた。

私は顔を上げ濡れた顔を袖口で拭うようにしてから音の鳴つた方、四糸乃の方へと顔を向ける。

「四糸乃?」

「…!」

「お腹減ったの?」

私が問いかけると四糸乃是顔を紅潮させブンブンと顔を横に振る、けど丁度良くまた

お腹が音を鳴らす。

「…………つ！」

四糸乃是フードを引っ張つて顔を隠すとその場にうずくまつてしまつた。
その様子を見てから、一度立ち上がりと携帯を出して時間を確認する。

時間は十二時半、四糸乃が何時からパペツトを探しているのかは分からぬけど、お
昼も過ぎてゐるしお腹を空かしてもおかしくないかな。
と考えてみると、琴里の声が響いてくる。

『一度休憩して、食事でもしたらう？何か情報を聞き出すきつかけにもなるわ』

「そうだね』

琴里の言葉に同意の言葉を返して、もう一度四糸乃の方へと顔を向ける。

「四糸乃、少し休憩しよつか？」

私がそう言うと、四糸乃是首を横に振る、けどそこでもう一度お腹が鳴き声を上げる。
「……！」

「無理しちゃ駄目、もし四糸乃が倒れちゃつたらよしのんも探せなくなつちやうよ」

私の言葉に、四糸乃是少し考え込むようにうなつてから、躊躇いがちに首を縦に振つ
た。

「うん。それじゃあ……」

そこまで言つてから私は自分の恰好を見る。

雨に濡れながら二時間余り探索をしていたので水に飛び込んだみたいに服はびしおびしょに濡れている。

これじやあお店には入れそうにない。

暫く考えてから、インカムをトントンと叩く。

「ねえ、琴里。休憩、お家でも大丈夫かな?」

『やだ、士織つたら少し見ない間に随分と肉食系になつたわね。押し倒すなら合意の上でしなさいよ』

「そ、そんなことしないから…」

『冗談よ。他に場所もないでしようから、許可するわ』

「うん、ありがと」

私は短くお礼を言うと、四糸乃に声を掛ける。

「それじやあ、行こつか」

四糸乃是私の言葉に小さくうなずいた。

「それじやあ、四糸乃。少し待つてくれるかな?」

歩いて十数分、自宅に着いた私は四糸乃をリビングに案内する。物珍しそうに部屋の中を見回している四糸乃にそう言つて、四糸乃が頷いたのを見る
と着替える為に一度自室に戻る。

それから数分後。

着替え終えた私はキッチンに居る。

エプロンを付けながら、冷蔵庫の扉を開けて中身を確認する。

「えつと…卵に鶏肉…お野菜、ご飯も残つてた筈…オムライスかな」

今ある材料からメニューチートを決めて、必要な材料を出す。

材料を調理台に移しながら、リビングに視線を向ける。

四糸乃は相変わらず物珍しそうに辺りを見回している。

帰り道、四糸乃の着替えをどうしようかなと考えていたけど。

不思議な事に四糸乃の服はちつとも濡れていなかつた。

「やっぱり靈装っていう物なのかな?」

そんな事を考えながら調理を進める。

チキンライスを作り終わつてお皿に盛り付けてから、一度フライパンを綺麗にする。

よくフライパンを温めてからマーガリンを投入。

マーガリンが溶けた所で溶いた卵を流し入れる、程よく焼けた所で菜箸を使って成

形。

空いた片手でお皿を持つ。

「よつと」

そのままフライパンを振り、卵を空中へ躍らせ、そのままお皿のチキンライスへと被せる。

最後にトマトソースを掛けてパセリを散らし、完成。

エプロンを外し、両手にお皿を持ってリビングのテーブルに向かう。
お皿をテーブルに置いてから、ソファーアームchairに座る四糸乃を呼ぶ。

「ちゃんと食べて、早くよしのんを見つけてあげないとね」

言いながら椅子を引いてあげて四糸乃を座らせてあげる。

「少し熱いかもしれないから、フーフーして食べてね」

座つた四糸乃の手にそつとスプーンを持たせてあげながら言う。

私が対面の椅子に座ると、四糸乃は一度私を窺うように見てから、オムライスに入れる。

「ふー…ふー…」

「そうそう、それじゃあ召し上がり」

私は言われた通り、掬つたオムライスを少し冷ましてから、口に運ぶ。

「…！」

瞬間、四糸乃是空いている手でテーブルをペしペしと叩く。

そして、一度恥ずかしそうな顔を作つてから、ぐつと親指を立てる。

「そつか、お口にあつて良かつた」

気に入つてもらえた事に少しほつとする。

四糸乃是かなりお腹が減つていたみたいで、小さなお口を大きく開けてオムライスを食べ進める。

「それじやあ、私も。いただきます」

手を合わせてから私も自分のオムライスを食べ始める。

——暫く後、四糸乃と私が丁度食べ終わつてソファーに移動し並んで腰を下ろすと琴里の声がインカムから響く。

『まだ少し休憩するでしよう？出来るだけ精霊の情報が欲しいわ。幾つか四糸乃に質問してみてくれない？』

「質問？」

小さな声で琴里に訊き返すとすぐに琴里が何個かの質問を出す。

「…うん、わかつた」

私は返事をしてから、お皿を空にしてお腹いっぱいと息を吐く四糸乃に視線を向け

て、口を開く。

「ねえ…四糸乃。少し訊きたいことがあるんだけど…何個か質問してもいい?」

「えつと…随分大事にしているみたいだけど、あのペペツト…よしのんって、あなたに

とつてどんな存在なの…?」

私の問いに、四糸乃是たどたどしい口調で答える。

「よしのん、は…友だち…です。そして…ヒーロー、です」

「ヒーロー?」

私の問いに、四糸乃是うんうんと頷く。

「よしのん、は…私の理想…憧れの、自分です…私、みたいに…弱くなくて…私みたいに…うじうじしない…強くて、格好いい…」

「理想の自分…か…」

私は一度、四糸乃から視線を外して、デパートの中で四糸乃に会った時の事を思い出す。

ペペツト越しに話していた四糸乃と、今の四糸乃とでは、口調、態度など別人みたい。

けど…。

「私は――今の四糸乃の方が好きかな…」

デパート内の十香にパペットが言っていた冗談の数々を思い出しながら苦笑する。
あの時の四糸乃是確かに陽気で話しやすかつたけど、ただ流石に十香に対する言葉の
数々はもう止めて欲しいと思う。

対して今の四糸乃是少し聞き取りづらいけど、誠実に一生懸命に答えてくれる今の四
糸乃の方が、もつとずつと好感を持てる。

そう私が言った途端、四糸乃是顔を真っ赤に染めてフードを掴んで顔を隠してしまつ
た。

「よ、四糸乃…どうしたの？」

私は顔を覗き込むようにしながら声をかける。

四糸乃是フードを離すとゆっくりと顔を上げ口を開く。

「…そ、んなこと、言われた、の…初め…つだ、から…」

「そうなの…?」

四糸乃がコクコクと頷く。

確かに…そもそも四糸乃をはじめ精霊は人と話す機会 자체が少ないからしようがな
いのかもしれない。

私はテーブルに置いてあるマグカップに手を伸ばして喉を潤してから次の質問を口
にする。

「えっと……四糸乃、あなたはA S Tに襲われても反撃しないよね、何か理由があるの？」

問いかに四糸乃是再び顔を俯かせて、服の裾をギュッと握るようにして唇を開く。

「……わたし、は……いたいのが……きらいです。こわいのも……きらいです……きっと……あの人、たちも……いたいのや、こわいのは、いやだと思います……だから……わたしは……」

とても小さく、掠れるような言葉。

けどその小さな声に私は強い衝撃を受けた。

「つ……四糸乃……あなた……」

私は言葉を最後まで続けられなかつた。

四糸乃が全身を震えさせ懸命に言葉を続けたから――。

「で、も……私は、弱くて、こわがり……だ、から。一人だと……だめ、です……。いたくて……こわ……くて、どうしようも、なくなると……頭の中が……ぐちやぐちやに……なつて……みんなに……きつと、ひどい……こと、をしちゃい、ます」

四糸乃が懸命に紡ぐ言葉は後半もう涙声になつていた。

四糸乃是涙を袖口で拭うようにし、鼻を啜り上げながら尚も言葉を続ける。

「だか、ら……よしのんは……ヒーロー……なんです。よしのんは……私が……こわくなつて、も……大丈夫、つて、言つて……くれます……。そし、たら……本当に、大丈夫に……なるんです。だ、から……だから……」

「つ……」

私は無意識のうちに唇を噛んでいた。両手は膝の上で血が滲みそうな程に強く握りしめていた。

だつて、そうでもしないと耐えられそうになかつたから…。

四糸乃是……の子は——とても優しくて——同じくらい、悲しい——。

四糸乃是幾度も幾度も自分に対して敵意を向け、殺意を持つて刃を向けてきた相手を慮つて、精一杯傷つけないようにしてきた、それが一体どんなにも難しいことだつたんだろう。

——『私は、弱くて……』

四糸乃がそう言つた言葉を私は否定する。

——弱くなんてない。

「——

私は隣に座る四糸乃を胸に抱きしめ、そつとその頭を撫でる。

「つ……、あ……の……」

「私が——」

突然の事に四糸乃是困惑の声を出そうとする、その声を遮るように。
「私が、あなたを救つてみせるから——」

私は確固たる意志を込めて言い、一度身体を離し四糸乃の顔を見つめる。

四糸乃是私の言葉に目を丸くしていた。

私は更に言葉を続ける。

「私が絶対によしのんを見つけるから。それで：四糸乃、あなたに渡たす。ううん：それだけじゃないあなたにこれ以上いたいこと、こわい思いなんてさせないから。私が

」

「あなたのヒーローになるから」

言葉が止まらなかつた。

四糸乃是とても優しい、けど：四糸乃是これまで優しさを向けて貰えることは無かつた。

そんなのは悲しすぎる。

」

四糸乃是十数秒程目を白黒とさせていたけれど、小さく唇を開く。

「あ…りがとう…ござい…ます」

「——うん」

四糸乃の言葉に小さく頷きそう言う。

そして、ふと：僅かに開いている四糸乃の小さな唇に目が行ってしまい、思わず視線

を逸らしてしまつた。

そんな私を不思議に思つたのか、四糸乃が首を傾げてから唇を開く。

「土織、さん…？」

「え、あと…その、この前はごめんね」

「…？」

私の謝罪の言葉に四糸乃是小首を傾げる。

「その…キス…しちやつて」

あの時の事は事故ではあつたけれど四糸乃からしてみれば不本意な事だつたと思う。けれど四糸乃是キヨトンとした様子のまま再び小首を傾げる。

そう、私が何を言つているのかわからない、と言つたように。

「……キス、つて、なんですか…？」

「え…あ、キスつていうのは、唇を触れさせ合うことで…」

四糸乃からの問いに私は頬を少し朱色に染めたまま答える。

けど四糸乃是よく分からぬ、といった表情を作ると私の目の前に顔を近付けてくる。

「こういう、の…ですか？」

「…」

ほんの少し顔を前に出せば唇が触れてしまいそうな距離、四糸乃の吐息が私の鼻腔を微かに撲る。

私は急な事態に鼓動を早くさせながらも何とか平静を装い声を出す。
「う、うん…そんな感じ…」

そんな答えに四糸乃是小さくうなつてから唇を開く。
「よく…覚えて…いません…」

「え――」

その声に私は僅かに眉根を寄せた。

「それって――」

私が質問をしようとした瞬間。

「シオリ――！すまなかつた私は――」

バンッという大きな音と共にリビングの扉が開き、今朝令音さんと一緒に出掛けた十香が肩で息をしながら入ってきた。

そして今にでもキスをしそうな距離で向かい合う私と四糸乃の姿を見ると、ピシリ、と身体を硬直させてしまう。

「ど…十香!?」

「ひ――！」

私が驚きの声を上げると同時に四糸乃もまた身体をびくりと震わせ声を上げる。

十香は私達の事を無言で見つめる。

「と、十香、これはね——」

いつかのドラマで見た事がある浮気現場を見られた男の人の心境だった。

私はなんとか説明しようと声を出す。

けど十香はムスッとした顔を作ったかと思うと踵を返し足早にリビングから出て行ってしまう。

「あ——」

廊下を足早に駆ける足音とドタアン！という乱暴に扉を閉める音が響く。

『これまた厄介なことになつたわね、士織』

右耳からため息交じりの琴里の呆れた声が聞こえてくる。

「どうしたら…」

『どうするも何も、今は何も出来ないわね。今士織が話しかけたところで火に石油を注ぐだけね』

「あう…」

私はガツクリと肩を落す、そして一度大きく息を吐けば四糸乃の方へと顔を向ける。

「あれ…？」

顔を向けた先、先ほどまで確かに四糸乃がいた筈の場所に四糸乃の姿がなかつた。私は部屋を見渡すけど何処にも四糸乃の姿が見えなかつた。

『十香に驚いて隣界に消失しちやつたみたいね。ペペツトの件が余程トラウマになつてるみたいね』

「そつか…けど…」

私はうーんと唸つた。

さつきの四糸乃の言葉と今の行動に違和感を感じたから。

四糸乃是十香によしのんを取り上げられた事は覚えてている。

けどその直前の私とのキスの事はよく覚えていないと言つていた。

確かに昨日の件では四糸乃是別段気にしていない様子だつたし、四糸乃是キスという行為に特別な感情を持つていらないのかも知れない。

十香の時みたいに価値観や知識の違いもあるのかも知れない。
けど。

「ねえ、琴里」

『何かしら?』

『っこだけ気になることがあるの、調べてもらえるかな?』

『いいわ、言つてみなさい』

私はその疑問をなるべく簡潔に整理して言う。

琴里は全て聞き終えるとふうむと一言呟く。

『なるほどね……いいわ。令音が戻つてきたら調べてみましょう』

「ありがとね』

私がお礼の言葉を言うと、琴里が思い出したように言葉を続ける。

『そうそう、十香の乱入に伝えそびれてたんだけど、いい報告があるわ』

「なにかな?』

『映像解析の結果、パペツトの所在が分かつたわ』

『本当に!?どこにあるの?』

『ある意味厄介な所ね——』

琴里の言葉に私はポカーンとした顔を浮かべた。

折紙家へ

「ここだよね…」

左肩に手作りしたお菓子の入ったトートバッグを掛け、右手には地図アプリを開いたスマートフォンを持つて、私は目の前のマンションを見上げて呟く。

「けど必要とはいっても、泥棒みたいな事…」

『ぼやかないで、鳶一宅に招かれるのなんて士織ぐらいしかいないんだから』

私のぼやきに、右耳から琴里の声が聞こえてくる。

なんでこんな事になつたのか…。――――――――――――――――――――

月曜日

学校が終わつてすぐに私は琴里に呼ばれ＜フラクシナス＞へやつて來ていた。
「琴里、どうかしたの？」

＜フラクシナス＞の艦橋へ着いた私は、艦長席に座る琴里に声を掛ける。
声を掛けると、正面を向いていた琴里が椅子を回転させ私の方を向く。
「来たわね。まあ、とりあえずこれを見て見なさい」

琴里はそう言うと艦橋正面のモニターを手に持ったチュッパチャップスで指す。

私は首を傾げてから言われた通りモニターに目を向ける。

そこにはマンションを俯瞰で撮影した映像が映し出されていた。

「これがどうかしたの？」

「いいから見てなさい」

私の疑問の声に琴里がため息交じりに言う。

暫らくするとマンションの屋上に全漆黒の服に身を包んだ二人の男の人が映った。

二人は屋上の柵にロープのような物を設置すると映画で見るようなロープ降下でマンションの一室のベランダにたどり着く。

そして部屋の窓に手を掛ける、瞬間ぶわっとガスのようなものがベランダに充満する。

二人は大急ぎで降りてきたロープを伝つて退避する、何が何だか分からなかつたけど、そこで映像が終わつた。

そして琴里が口を開く。

「これは今日のお昼頃の映像よ、侵入しようとした先は鳶一折紙の家」

「鳶一さんの？ なんで？」

「四糸乃のパペツトの為よ、誰が持つているのか忘れたの？」

「そういえば…」

私は土曜日に琴里から聞いた話を思い出す。

あれから音沙汰がなかつたけどこんなことしてたなんて。

琴里はもう一度大きくため息を吐いてから口を開く。

「今回で3度目の試みよ、結果は御覧の通り、なんなのよあの家は赤外線・レーザー探知器に催涙ガス、ネットランチャー、拳銃の果てにはセントリーガンよ。一体全体彼女は何と戦つてるの?」

後半になるにつれて琴里の声が苛立たしそうになっていく。

私は苦笑するしかなかつた。

そして言い終わつた琴里がビシリとチュッパチャップスで私を指し示してくる。

「と、いう訳で士織。貴女に任せるわ」

「え…えええ!」

琴里の言葉に私は驚きの声を上げる。

「安心なさい、士織には士織にしか出来ない方法でやつてもらうわ」

「私にしか出来ない…?」

「鳶一さん」

明けて火曜日の放課後、私は隣の席で帰り支度を始めていた鳶一さんに声を掛けた。

鳶一さんは手を止めるどころか顔を向ける。

「なに？」

「えつとね、もし良かつたらなんだけどね？ 鳶一さんのお家に遊びに行つてもいいかな？」

「かまわない…けど今日は駄目」

私の問いかけに鳶一さんはいつもの無表情のまますぐに返事をくれた。

「そつか…何時なら大丈夫かな？」

「明日なら問題ない」

「それじゃあ、明日学校が終わつたらね」

「了解した」

というような会話があつたのが昨日。

本当は泥棒みたいな事は悪い事だとは思うけど：四糸乃のあんな不安そうな様子を見てしまつたから…。

それに、一度鳶一さんともちゃんとお話ししたいと思っていたから。

けど——。

「琴里、その…十香の様子はどう?」

『相変わらずよ、学校から帰つてくると直ぐに部屋に籠つたわ』

「そつか…」

私は肩を落とす。

四糸乃を家に招いているところを十香に見られてからずつと十香に避けられている様だつたから。

はあ、と一つため息をついてから、頭を振つて気持ちを切り替える。

「今はよしのんを取り戻さないと」

私はそう呟けば、マンションの入口へと足を踏み出す。

自動ドアを抜け、エントランスに設置されている集合インターフォンの前に着くと、事前に聞いていた鳶一さんの部屋の番号を入力しコールボタンを押す。

すると、すぐに鳶一さんの声が聞こえてきた。

『だれ』

「あ、私——」

『入つて』

誰何の声に答えようと声を発した途端、鳶一さんの声と同時に施錠されていた自動ド

アが開いた。

私は促されるまま再び自動ドアをくぐると、エレベーターを使って六階まで上がる。六階に着き、廊下を歩きながら琴里と鳶一さんの部屋の搜索の手筈をもう一度確認する。

『それじやあ手筈——りに——な——ジャミ——しお——。』

「琴里、琴里？」

琴里の言葉の途中からノイズ音が乗り出したかと思えばブツンと音声が途切れてしまつた。

そして音声が完全に途切れてしまつたタイミングで、教えられていた部屋番号の前に到着する。

仕方がない、と私は一度大きく深呼吸してから、呼び鈴を鳴らす。

瞬間、扉が勢いよく開かれた。

「と、鳶一さん、無理言つて——」

私は挨拶しようとしたけど言葉が続くことはなかつた。

だつて目の前の鳶一さんがピンクのベビードールを着ていたから。

シルク製の薄い生地の奥には黒のランジェリーや素肌が見えている。

ここは鳶一さんのお家だから鳶一さんが学校から帰つて来てどんな格好をしていて

も私があれこれ言える立場ではないけれど——。

「あ、あの……鳶一さん？」

「なに？」

私の戸惑いの声に鳶一さんはいつもの無表情のまま小さく首を傾げた。

「えっと……凄い恰好してるね……」

「駄目？」

「いや……その、駄目とかじやないんだけど……」

私はしどろもどろにそう口にするが、当の鳶一さんは全く気にする素振りも見せない。

すると鳶一さんはクルツとその場で百八十度回つてから首を回してこつちを見る。

「入つて」

「お、お邪魔します……」

私は肩に掛けたトートバッグを一度掛け直すと、玄関へと足を踏み入れ後ろ手に扉を閉じる。

靴を脱いで廊下に一步足を踏み出した時背後からカチャリというような音が聞こえた。

「？…今の音は？」

「気にしなくて構わない」

私の疑問に鳶一さんはにべもなく言う、私は一度首を傾げてから鳶一さんの後についてリビングに入る。

「あ…」

リビングに入ったところでふわりととても甘い香りが私の鼻腔をくすぐる。

なんだろうこの香り、少なくとも私が知っている香りではないみたいだけど。

「鳶一さんこの匂いってなにかな？」

「ただのお香、気にしなくていい」

「ううなんだ…」

鳶一さんにもこういう趣味があつたんだと思いながら、部屋の真ん中に置かれたテーブルの前まで歩く。

「ん…」

なんだろう頭が風邪を引いた時みたいにボーッとする。

それに少しふわふわと心地良いような感じもする。

「座つて」

「あ…うん」

私は鳶一さんに促されて用意されていたクツシヨンにぺたんと腰を下ろす。

「…」

私が座つたのを見ると鳶一さんも腰を下ろした…。

私の横にそれも肩と肩、腕と腕がピッタリと密着するくらいに。

「と、鳶一さん？」

「なに」

疑問の声に鳶一さんは私の方に顔を向けると何か問題でも？と謂わんばかりに首を傾げる。

「えつと…狭くない？」

「問題ない」

「そ、そつか…」

鳶一さんの迷いのない返事に私はそう返すことしか出来なかつた。

そして訪れる沈黙、鳶一さんはと/orとずつと無言のまま私の方へと顔を向け続けている。

流石にこの沈黙に耐えられなくなつた私は唇を開く。

「そ、そういえば鳶一さんって独り暮らしなの？」

質問に鳶一さんは小さく首を縦に振る。

そして捕捉する様に言葉を続ける。

「五年前に両親が死んでから、暫くは叔母の家で暮らして いたけれど、高校入学と同時にここに移った」

「高校生で一人暮らしつて大変じやないの？」

「そうでもない」

「そつか…私は鳶一さんすごいと思うなー、私もきつといつか一人暮らしをすることになると思うけどなんか一人だと色々サボつちやいそうだし、それに少し不安もあるかな」

たははと少しばにかみ気味に私は言う。

すると鳶一さんがぐつと顔を近付けてくる。

「と、鳶一さん？」

「問題ない」

「へ？」

鳶一さんのきつぱりと言ひ切つた言葉に私はポカンとなる。

「私がやる」

一瞬、鳶一さんが言つた言葉の意味が分からなかつた。

私が呆気に取られて いると鳶一さんがすくつと立ち上がる。

「え…？」

「待つていて」

鳶一さんはそう言うと、足音も立てずに、キッチンの方へと歩いて行く。

私はその背をボーッと眺め見送る。

暫くすると、陶器と陶器の触れる音が聞こえてきた、お茶の用意をしに行つたみたいだつた。

そこで私はハツとして首をブンブンと横に振る。

「あ…と、よしのんは…」

独り言ちて、部屋を見回す。

部屋には木目調で揃えられたシンプルな家具が、数点とテレビがあるくらいだつた。私も余り部屋に物はない方だとは思うけど、それ以上に少ない、なんというか生活感といったものも感じられない。

一通り見回して、よしのんは見当たらなかつた。

隈なく探そうにも鳶一さんの眼を誤魔化さないといけない。

お手洗いを借りる振りをするか、逆に鳶一さんがお手洗いに行つた隙に——。
と、そんな事を考えていると、キッチンからトレーを持った鳶一さんが戻つてきた。
トレーの上にはティーカップとソーサーが二つずつにミルクポットとシュガーポッ

トが載せられている。

鳶一さんは無言のままテーブルへ持ってきた物を置いていく。

「どうぞ」

全て置き終えた鳶一さんはそう一言言うと、さつきと同じように私の隣に腰を下ろす。

氣のせいか、さつきよりも距離が近くなっている気がする。

「あ、ありがとうございます」

鳶一さんにお礼の言葉を言つてからティーカップに手を伸ばす。

口に運ぼうとした所でティーカップの中身がおかしい事に気付いて、私は眉を顰めた。

ティーカップには紅茶ではない不透明なピンク色の液体が並々と注がれていたからだつた。

試しにマドラーを使ってかき混ぜてみると、溶けたチョコレートみたいに抵抗を感じる。

「あの、鳶一さん？」

「なに」

「これって何…？」

「お茶、外国の」

「お…茶…」

鳶一さんの答えを聞いてから私はもう一度カップに目を落とす。
すくなくともこんなお茶を私は知らない。

私の勘みたいなものが飲んじや駄目だと警報を鳴らしている。

「ゞ、ゞめんね鳶一さん、せつかく用意してくれたのに私このお茶苦手かも——」

そう鳶一さんに言いながら私はティーカップをソーサーの上に戻そとすると、鳶一さんが私の手とティーカップを止め、グイグイと私の方へと進めてくる。

「鳶一…さん？」

「どうぞ」

「え、いや…その」

「どうぞ」

「あのね…」

「どうぞ」

「……………いただきます」

なんか断りきれない自分の性格が嫌になる。

私はティーカップを恐る恐る口へと近づけていく。

間近まで寄ると、部屋に漂うお香の匂いを濃縮したような匂いが鼻腔を揺さぶる。

ちらと鳶一さんに視線を向ければ、キチンと飲むかを確かめる様に私をずっと見つめたままだつた。

私は意を決すると、一度大きく息を吐いてから、ティーカップになみなみと注がれたピンクの液体を口に含んだ。

「あれ…甘いだけ…？」

私は拍子抜けしたようにそう呟いた。

衝撃的な味が襲い掛かる訳でもなく、口の中に広がるのは微かな甘みだけだった。

流石に粘度が高いせいか喉に絡むような感じはするけど今のところ異常はなかつた。と思つていたけど――。

「はあ…っ、はあ…っ」

急に身体火照りだし、動悸が激しくなる。

早鐘を打つ心臓を押さえるように私は胸元をギュッと両手で押さえ、トサリと後ろに倒れる。

荒く息をしながら急な体調の変化に困惑していると。

「…………」

鳶一さんが両の手を私の頭の横につき、覆いかぶさってきた。

「……と、鳶一さん？」

「なに」

疑問の声に鳶一さんは、私の方がおかしな事を言つてゐみたいに、平然とした抑揚のない声で返してくる。

「な、なにを…」

「だめ？」

鳶一さんは首を僅かに傾げ、ただでさえ近い顔を更に近づけてそう言う。鼻と鼻が触れ合いそうな程近くて、鳶一さんの吐息が私の唇を撲る。空色の瞳は真っ直ぐ私の眼を見つめ、さらに甘い香りが鼻腔を刺激する。そしてネグリジエから透けて見える鳶一さんの肢体。

私は頭がフットーしそうになるのを抑えこみながら、言葉を発する。
「だ…駄目…だと、思う…」

「そう」

鳶一さんはそう言うと数回瞬きしてから顔を離す。

「では、交換条件」

「え……？」

「ここから退くかわりに、私の要求を一つ、無条件で呑んで欲しい」

「な、なに…？」

鳶一さんは逡巡する様に間を置いてから言う。

「あなたは、夜刀神十香の事を十香と呼ぶ、けれど私の事は鳶一と呼ぶ」「う、うん…」

「これは非常に不平等」

「…？」

正直、鳶一さんが何を言いたいのか分からなかつた。

私が疑問符を浮かべていると、鳶一さんは顔を僅かに背けながら言葉を発する。

「私の事も、折紙と名前で呼んで欲しい」

「え…」

「だめ？」

鳶一さんが首を傾げてからいつも通りの抑揚のない——けど、少しだけ不安を孕んだ
ような声音で言う。

「駄目じゃない…よ」

「そう」

「…」

「…」

そして沈黙が訪れる。

鳶一：折紙は表情のない顔で見つめていたが、その眼に籠った微かな期待する様なもののを感じ、私は喉を震わせる。

「えつと…折紙」

「……」

私がそう名前を呼ぶと、折紙は無言で立ち上がる。

そしてぴよん、と軽やかに飛び跳ねる。

身を起こしながらポカンとその様子を見ていると、折紙が小さく声を発する。

「土織」

「…う、うん」

小さく、けどしつかりと折紙は私の名前を呼ぶ。

いつも『五河土織』とフルネームで呼ばれていただけに、なんだかむずむずするような感覚を感じながら返事をする。

折紙は返事を聞くと目を閉じ小さく深呼吸をする、ちょうど余韻に浸るように。

そして数秒後、折紙は再びぴよん、と飛び跳ねながら私に背を向け、着地すると扉へと歩いて行く。

「ど、どこに行くの？」

「シャワー」

僅かに私の方へ顔を向け、短くそう言うと、リビングを出て行ってしまう。
一人残された私は、しばらくポカンと呆然とする。

数秒後、状況を理解して深く息を吐き出しながらパタリと後ろに倒れ込む。

「あう…」

おでこに手の甲をあて目を瞑る。

今もまだ心臓がバクバクと早鐘を打つて、身体が熱を帯びていてるみたいだつた。
正直このまま休んでいたい気分だつた、けど。

「よしのんを探さないと…」

身を起こし立ち上がりながら、再び部屋を見回す。

千載一遇つてこういう事を言うんだと思う。

「けどどうして急にシャワーなんて？」

汗を搔いたようでも、汚れたわけでもないのに。

疑問に頭を捻つていたけれど、答える訳もなく。

頭を切り替えて、部屋の中の収納を調べていく。

収納内は綺麗に整理されていてちよつとでも動かしたらバレてしまいそうだ。
なるべく元の位置に戻すようにしながら探していく。

リビング内の収納を一通り調べ終わり、もう一度室内を見渡す。

「リビングにはないか…」

リビングの扉に目を向ける。

確かに廊下に3つ扉があつた気がする。

扉から時計に視線を移して時間を見ると、折紙がシャワーを浴びに行つてから10分程経っている。

流石に時間の猶予も余り無かつた。

私は少し早足気味にけど物音をなるべく立てないように、廊下に出る。一番手前の扉の前に通りかかる所で私は一瞬足を止めてしまう。

その扉の向こうからシャワーの水音が漏れ聞こえてきたからだつた。瞬間、收まりかけていた動悸が再び激しくなり、顔が熱くなる。

「落ち着いて…落ち着いて…」

そう咳きながら一度、二度と深呼吸をして落ち着こうとする。

深呼吸を何度もするうちに鼓動も落ち着きを少し取り戻す。

再び歩を進めて、反対側の扉に手を掛け、ゆっくりと開く。中を見て私は咳く。

「ここは…寝室かな」

中は六畳程の洋室で、ベッドにクローゼット、それに少しの収納棚が配置されている
一見何気ない寝室なのだけど。

何故か部屋が狭く感じる、そしてその答えはすぐに出た。

「…ベッドが大きい？」

そう私が使っているベッドの一倍近い幅のベッドがあるせいだつた。

それに真新しい寝具の独特な匂いも感じ取れた。

「最近買ったのかな…？」

真新しいベッドシーツはピンと皺一つなく張られていて、頭の方には枕が二つ並べて
置いてあつた。

そして枕をよく見てみるとカラフルな文字で『構わない』と刺繡が施してあつた。

試しに裏返してみると、同じような字体で『問題ない』と書いてあつた。

「…」

平日昼間の新婚さんが参加するトーク番組の景品の枕だつた、――拒否権が無い事を
除けば。

私は苦笑いを浮かべながらそつと枕を元に戻す。

「うん…よしのんを探さないとね…」

無理矢理思考を切り替える様に少し大きな声で一人呟く。

何度も頷いてから、部屋をグルリと見回す。

「あ——」

見回した視線の先、部屋の隅に置かれた洋服ダンスの上。

段ボール箱に寄り掛かるように見覚えのあるシルエットがあつた。眼帯をしたコミカルなウサギ——間違いくなく、よしのんだつた。

「良かつた、見つかつた」

一安心する様に胸を撫で下ろし。

タンスに向かつて歩き出す。

そしてタンスの目の前に着けばグッと背伸びをしながら両手を伸ばす。無事によしのんを掴み取り、そつと目の前まで持つてくる。

解れなどがないか軽く見て、問題ない事を確認してふうと息を吐く。

「あとは帰るだけ——あ」

そこで私は思い出したように声を出す。

ここに訪れた一番の目的は達成した。

けどもう一つだけ、個人的な目的もあつた事を思い出す。

ここまでずつと折紙のペースでちゃんとお話しが出来なかつたけど——。

一度でも——折紙とちゃんと向き合つてお話しをしてみたかつた。

——十香や四糸乃の事、精霊について——。

「何しているの？」

「——！」

突然扉の方から投げかけられた言葉にビクンと身体を震わせる。

反射的によしのんを後ろ手に隠しながら扉の方へと身体を向ける。

そこにはこの家の家主たる折紙が立っていた。

プロポーションの良い肢体をバスタオル一枚で包み、髪も水気を帶びて折紙の白銀の髪を一層引き立てていた。

折紙は一步足を進め、部屋の中へと入つてくる。

そしてそのまま、ゆっくりと近づいてくる。

私はなんとかして口から言い訳を絞り出しながら、一步後ずさる。

「え、えっと…お手洗いを借りようかと思つたら、間違えて入つちやつて——」

「…」

「それでその…」

遂に折紙は私の目の前にやつて来る。

更に私の顔を覗き込むように顔を近付けてくる。

折紙が近づいてくる程に、シャンプーの香りや、お風呂上がりの体温を感じられそう

になる。

更に一步後ずさる——と。

「——ひやつ!」

脚の後ろに何かが当たったかと思つた瞬間バランスを崩し後ろに倒れてしまう。

咄嗟に目を瞑り、身体を強張らせ衝撃に備える。

けど訪れたのはフローリングの感触と衝撃ではなく、クツシヨンの感触だつた。

そう、幸いなのかどうか倒れた先は部屋に置かれたあの大きなベッドだつた。

「つう…」

私は瞑つていた目を開く、と——。

「——つ!?

折紙が先ほどリビングの時のように私に覆いかぶさつていた。

ただリビングの時と違い、折紙はつい今し方まで身を包んでいたバスタオルを外して
いた。

要するに裸だつた。

顔を見つめてくる折紙の顔はやや赤みを帯びていて、微かに当たる吐息は熱を帯びて
いた。

そしてそのまま、ぐつと身体を、胸を押し付けてくる。

折紙の胸が私の胸に押し付けられ、折紙の顔が徐々に私の顔へと近付いてくる。そんな状況に私は頭がフットーするどころか爆発しそうな状況の中で、私は必死に頭を回転させて声を出す。

「お、折紙！ その……お話があるのっ！」

折紙の動きがピタリと止まり、近付けていた顔を離していく。

「なに」

「あ……、その……」

私は一度インカムを指で叩く。

インカムからは雑音すら聞こえてこない。

この状況なら琴里にはこつちの会話は聞こえない。

一度唾を飲み込んでから、口を開く。

「折紙……。折紙は——精霊が……嫌い……なんだよね」

「…………」

私の言葉を訊いた瞬間、折紙の雰囲気が変わったような気がした。

折紙は身体をグッと起こすと、訝しむように首を僅かに傾げる。

「なぜ」

私の目を真っ直ぐ射貫くように見ながら折紙が疑問の声を出す。

きつとこの会話が琴里に聞かれていたら『余計な事は言わないで』とか、『警戒心を抱かせないでちょうどいい』とか言われて怒られていたと思う。

けど私には訊かずにはいられなかつた。

両親を精霊によつて失くし、精霊を悪として刃を向ける折紙に――。

「つ…、その、ね。精霊の中にも、いい子は居ると思うの…」

「ありえない」

バツサリと切り捨てられる。

「精霊は現れるだけで世界を破壊する、そこに存在するだけで世界を殺す。あれは害悪であり災厄。この世界に生きる者全ての敵」

「ツ…そんな言い方――！」

「私は忘れない」

私の言葉を遮り折紙が言葉を紡ぐ。

折紙の表情も、声のトーンも普段と変わらない筈なのに、怨嗟を感じさせるような雰囲気が感じられた。

「話した筈。五年前、私の両親が精霊に殺された事を」

「ツ…」

私が表情を歪めると、折紙は一度言葉を区切る。

「五年前、天宮市南甲町の住宅街で、大規模な火災が発生した」

「え…」

折紙の言葉に私は眉根を寄せた。

私も昔、そこに住んでいたからだつた。

確かに大きな火事があり家が燃えてしまつて、今の家に引っ越してきたから。
「公式にはあの火災は事故となつてゐるけれど、実際にはあの火災は精霊が起こしたもの

「そ…んな…」

私は驚きに目を見開いた。

「真っ赤な炎と共に姿を現した精霊。私はあの精霊に全てを奪われた。絶対に許さない。精霊は全て私が倒す。もう——私と同じ思いをする人は作らせない」

折紙は強い意志を込めた声でそう言い、シーツに着いた手を握りしめた。

「無論、夜刀神十香も例外ではない」

不意に出された十香の名に目を丸くした、けれど私はすぐに声を上げる。

「と、十香は、空間震も起こさないし、暴れたりもしない。普通の、私達と同じ女の子だよ」

私の反論に折紙は一瞬の迷いもなく首を横に振る。

「精霊反応が消えたのは事実。でも原因が不明な以上、最悪の状況に備えるべき」

「それは——」

私は言い淀む、折紙の言い分は当然の事だつた。

そもそも折紙は私が十香の力を封印した事を知らないから。

「だつて……空間震が起きるのだつて、十香……精霊の意思じやないでしょ!? なのに——

「——なぜ、そんな事を知つているの?」

「つ、それ……は」

言い過ぎてしまつた事に私は焦る。

なんとか良い言い訳はないかと視線を泳がせ考える。

けれど折紙は言葉を続けた。

「ちょうどいい機会。私もあなたに聞きたい事がある」

「な、なに……?」

「私はあの日、作戦遂行中に確かにあなたを——

「——!」

その言葉に私は背筋を凍らせた。

折紙は十香の力を封印した時の事を言つてゐるからだつた。
動搖を隠せないでいる私にさらに言葉を投げかける。

「あなたは——、一体何者」

折紙が真っ直ぐ見据えながら言う。

私は一度呼吸を落ち着かせ、唇を開く。

「折紙……。信じてもらえないかも知れないけど、私のお話し聞いてくれる?」

折紙は直ぐに首を縦に小さく振る。

それを確認し、もう一度深呼吸をして言葉を続ける。

「そのね、私は、何度も精霊に会つて、お話ししたことがあるの。——十香だけじゃない。四

糸乃とも」

「四糸乃?」

「えつと——折紙が〈ハーミット〉って呼んでいる精霊の事」

「非常に危険。やめるべき」

抑揚のない声で注意する、折紙に私は首を横に振る。

「折紙は——、一度も四糸乃と話した事はないと思う」

上体を起こしながら言葉を続ける。

「お願ひ。少し……ほんの少しでもいいの。今度四糸乃が限界したら、あの子とお話しをして欲しい。確かに折紙の言う通り、悪い精霊だつているかもしれない。けど!、十香や四糸乃是……。本当にいい子で、優しい子なの……っ!」

「……」

折紙は何も言わず私を見詰めるだけだった。

静かな目、けどそこには冷たさは感じない……不思議な眼差し。

「」

そうか——私。

折紙にこんな話ををしてしまった——しないといけなかつた理由。

四糸乃を助けたいというのが大きい理由だつた、けどそれだけじやなかつた。

それが——やつと分かつた気がした。

私は折紙の目を再び見る。

「私はっ……、四糸乃をどうにかして助けたいし、十香の事を認めて欲しいと思つてゐる！でも……つ、それと同じくらいに、折紙、あなたにあの子達を殺して欲しくないの……つ！」

「……」

私は折紙の今を間違つていると否定する資格なんてない。

自分と同じ様な人を作りたくない、守りたいと戦うことを選んだ凄い人。

そんな折紙を私の稚拙な言葉で汚していい筈がない。

けど……

「なんで……なんでなんだろう……。悪い人なんて誰も居ないので。十香も四糸乃も、折紙、

あなたたって：みんな優しい人達なのに：」

言つて、涙で潤んでしまつた目元を隠す様に手の甲で覆うようにしながら数度頭を振る。

折紙は僅かに逡巡し口を開く

「それは——、仕方のないこと」

「——つ

「仮に、あなたの言う通り、〈ハーミット〉が戦いを望んでいないとしても、彼女が精霊である以上、空間震発生の危険性は必ず残る。その様な危険性を残すわけにはいかな

い」

至極整然とした言葉。琴里も、十香と初めて遭遇した日にも同じ事を言つていた。
きつと、大多数の人からしたら間違つてているのは私の方。
けど私は——。

ウウウウウウウウウウウウ

空間震警報が鳴り響く。

「警……報……？」

「……」

折紙は数瞬間をおいてから、小さく息を吐き、身体を起こす。

「折紙…？」

「——出動。あなたは早くシェルターへ」

そう言い扉に向かう折紙に、私は身を起こしながら声を投げかける。

「——折紙！」

「…」

「最後に一つだけ…聞かせて。もし十香みたいに精霊の力が確認出来なくなつたら、もう攻撃はしないんだよね…？」

これだけは、これだけは確認したかった。

きつと理想論だと笑われるかもしれない、けど私には——私にはそれを成し遂げられる可能性がある。

「私としては本意ではない——けれど、上層部の方針に背いて独断で行動することは出来ない」

私は一度その返答を噛みしめる様に、間を置く。

そして折紙を見る。

「ありがとう。今はそれが聞けて十分だよ」

「そう——」

折紙は短くそう返答すれば今度こそ部屋を出て行く。

「四糸乃」—
折紙の後姿を見送った私は立ち上がり、窓から外を見る。
そして持っていたペベツトを胸の前でギュッと抱く。

雨のち太陽

「四糸乃——」

胸の前で抱きしめていたパペツトを下ろすと私は踵を返し扉へと向かう。

一度リビングへと戻り、置いていたトートバッグを掴む。

中にはお土産に持つてきたビスケットとマカロンの入ったタツパーが入ったままになつていていた。

私はタツパーを取り出し、テーブルの上に置いておく。

そしてパペツトをバッグの中に入れ肩に掛け、急ぎ足で折紙の部屋を後にする。

マンションを出た所で私は足を止め目を見開いた。

部屋の窓から見た景色と今見える天宮市の景色がまるで違つて、雪国を思わせる銀世界になつていた。

「なに……これ……」

私が驚愕の声を上げると、右耳のインカムから一瞬雜音が入つたかと思えば聞きなれた琴里の声が聞こえてきた。

『土織、聞こえる?』

「琴里、これつて…」

『ええ、ご想像の通り四糸乃よ。ただあまり悠長に構えていられる状況じやないわね』

息を吐く音が聞こえて、琴里が言葉を続ける。

『四糸乃を止められるのは、土織。あなたと、そのペペットだけよ。行つてくれるかしら？』

「当たり前。四糸乃も街も、あのままなんにしておけない」

琴里の問いかけに私は力を込めて返す。

『…シア。私の方からも一つ報告がある、いいかな？』

インカムから眠たそうな声が聞こえてくる、令音さんだ。

『…あれからいろいろと調べてみたのだが：君の疑問はあながち間違つていないうだ』

令音さんが言つているのはこの前、四糸乃が家に来たとき、私が琴里に言つた事だと
思う。

『…時間が惜しいから手短に伝えよう。四糸乃は――』

令音さんが簡潔に説明をしてくる。

「――つ」

令音さんから聞いた瞬間、胸がキュッと締め付けられる様な感覚に襲われた。

けど、不思議と驚きはなかつた。

出でてきたのは四糸乃なら——という納得。

そして——四糸乃を助けないといけないという決意だつた。

肩に掛けたトートバッグの持ち手をギュッと握りしめ、雨に濡れる街に目を向ける。深く深呼吸してから口を開く。

「琴里——」

その一言で察してくれたのか、琴里が答える。

『それでこそよ。道なりに、大通りにぶつかるまで走りなさい。四糸乃の進行方向と速さから、おおよそ5分後に差しかかるわ。急げば先回りできるはずよ』

「わかった——！」

琴里の指示を受けて、駆け出そうとする。

『ちやつちやと好感度上げて、キスしてらっしやい』

「あう……」

具体的的な事を口にされ、顔を赤くしてしまう。

すると琴里が呆れたような声を出す。

『なに、今更恥ずかしがつてるの？別に初めてってわけでもあるまいし』

その言葉で、デパートでの事を思い出し更に顔が赤くなる。

「それは… そなだけど…あの時の事は事故だつた訳で…、その改めて自分からするつてなると、その…」

『ああー、なるほど、土織つてば小さな女の子に迫るのが好きなロリコンだつたのね』
「な、なんでそうなるの!?』

『やだ… なに図星? ストライクゾーンは中学生以下なの? 怖い怖い。私も気を付けなく
ちゃ』

琴里が私の反応にからかう様にそう言う。

私は、はあと息を吐き返す。

「そんな訳ないつて…それに妹なんだから…」

義理とはいえ琴里は一緒に育つてきた大切な妹だ。

そんな事を思つているとインカムから声が聞こえなくなつた。

「琴里?」

『うるさいつ! サッサと行きなさい!』

高圧的で冷静な司令官モードの琴里には珍しく、荒げた声が返つてきた。

「なんだつたの… 今の」

私は腑に落ちないと思いつつも、降り続く雨の中を駆け出す。

「はあ…はあ…」

雨の中、時折凍結した路面に足を取られながらも私は懸命に足を動かし駆けていた。
そして人気のない大通りに入った所で足を止める。

『土織、来るわよ』

琴里がそう言つてから暫くすると視線の先に大きなシルエットが見えてくる。
滑らかで鈍く光沢を放つ身体、頭部から伸びる長いウサギ耳。
間違いない、四糸乃の〈氷結傀儡（ザドキエル）〉だ。
私を大きく息を吸い込み声を張り上げる。

「四糸乃おおおおおおお！」

「……！」

凄まじいスピードで迫つて來ていた巨大なウサギの背に張り付いていた四糸乃が
はつとしたように私の方へと視線を向ける。

凍結した道路を滑る様に移動していた、〈氷結傀儡（ザドキエル）〉が私の前で止まる。
そして〈氷結傀儡（ザドキエル）〉が身を屈める。

その背中には涙で目元を真っ赤に腫らした四糸乃が居た。

「久しぶり…四糸乃」

「土織…さん…」

四糸乃がそう言いながら身を起こす。

身を起こした四糸乃是「氷結傀儡（ザドキエル）」の背中から腕を抜くと涙を拭う様に袖口でゴシゴシと顔を拭う。

その様子を見ながら私は肩から下げたトートバッグに手を伸ばす。

「四糸乃、あなたに渡さないといけないものを持って来たの」

「…？」

顔を拭つた四糸乃が私の言葉に首を傾げる。

「これを——」

パペットを取り出そうとした瞬間。

『士織！』

インカムから琴里の声が響いた瞬間、私の横を一条の光が駆け抜け。

その光はそのまま今度は四糸乃の肩口を掠め抜ける。

「な…つ」

私は声を詰まらせる。

そして振り返る。

「お…折紙——」

薄く煙を吐く長大な砲を携えた折紙が空中に居た。

それだけではなく、いつの間にか私達の周りにはASTの魔術師〈ウイザード〉が包囲する様に集まっていた。

『そここの貴女。即刻その少女から離れなさい』

機械的な音声で隊長と思われる女性から定型文な警告が発せられる。
けど直ぐに意識は四糸乃の方へと戻つた——。

「あ——うあ——あ、あ……」

四糸乃が顔を真っ青にしてガタガタと身体を震わせていた。

「ああああああああああああ——」

四糸乃是叫び声を上げ再び〈氷結傀儡〉（ザドキエル）へ両腕を差し入れた。

〈氷結傀儡〉（ザドキエル）は咆哮を上げながら身体を仰け反らせる。

「四糸乃——！待つて！」

私の制止する声も今の四糸乃には届かない。

〈氷結傀儡〉（ザドキエル）は周囲の冷たい空気を凄まじい勢いで吸い込んでいく。

周囲のASTが手にしたあらゆる武器を使用し〈氷結傀儡〉（ザドキエル）へと攻撃を始める。

そのどれもが雨に阻まれ〈氷結傀儡〉（ザドキエル）には届かない。

「きやつ……！」

私は激しい攻撃と〈氷結傀儡（ザドキエル）〉の放つプレッシャーに気圧されて尻餅をついてしまう。

瞬間。四糸乃が、〈氷結傀儡（ザドキエル）〉から凄まじい冷氣の奔流を放つ。

「――！」

私はそれが私の命を確実に奪うものだと分かつた。
そしてそれを避けるものでは無いという事も。

「土織――」

折紙の声が聞こえた、けどどの道間に合わないことは明白だつた。

私は恐る恐る目を開く。

「これって――」

呆然とそんな一言を呟く。

眼前には数瞬前まで存在していなかつた巨大な玉座が聳え立ち、四糸乃の攻撃を防いでくれた。

「麿殺公（サンダルフォン）〉：？」

そうだ、鋼色の腰掛けと肘掛け、剣の柄を頂点に覗かせる黄金の背もたれ。
十香の無二の武器〈魔殺公（サンダルフォン）〉だつた。

「なんで……これが……」

呆然としていると周囲にも動きが出た。

四糸乃是〈氷結傀儡（ザドキエル）〉が攻撃を終えると〈氷結傀儡（ザドキエル）〉の身を翻えさせ凄まじいスピードで逃げていく。

そして四糸乃を追うようにAST隊員もそれを追つていく。

折紙は私と目の前の玉座を一瞥するとAST隊員と同じように四糸乃を追つていった。

「……」

私は暫くの間呆然としてから、ハツと目を見開き、立ち上がる。

「四糸乃を追わないと――！」

「シオリ！」

立ち上がつたと同時に後ろから呼び声が聞こえてきた。

凛としたそれでいて可愛らしい声音、そして聞きなれた声。

振り返りながらその声の主の名前を呼ぶ。

「十香――つて――え？」

振り向いた私は十香の見慣れない姿に再び目を見開いた。

十香はいつも通り来禅高校の制服を着ていたけれども——首元や胸元、スカートなど制服の要所要所に光の膜が揺れていたからだつた。

「十香、それって…」

「ぬ？」

私の言葉に十香は一度首を傾げたあと自分の制服へと視線を落とす。

「おお!? これは…靈装か!?

初めて自分の装いに気付いたようで十香が驚きの声を上げる。

十香はペタペタと纏つた靈装を触ると、ハツと顔を上げ私の方へと視線を戻す。

「！、そんなことより、シオリ！ 無事か？ 怪我はないか？」

「あ、うん。十香のおかげで」

そう言いながら私は『塵殺公（サンダルフオン）』を見上げる。

十香をホツと肩を撫で下ろしたと思うと、ばつが悪そうにしながら、僅かに振るえた
声音で言葉を続ける。

「その…悪かつた…いろいろと…よく分からぬ事で苛ついてしまつたり…だから…
ずっと謝りたかったのだ…」

「それは…私が悪かつたから…」

本当なら十香の言葉に丁寧に否定をしないといけない——けど今は時間がなかつた。
もう一度〈魔殺公（サンダルフォン）〉に視線を向ける、精霊の——十香の天使。

完全な状態ではないと思うけれど、ASTや四糸乃の〈氷結傀儡（ザドキエル）〉に対抗できる精霊の力。

私は幾ばくかの間をおいて、十香に向き直り真っ直ぐに十香の水晶の様な瞳を見つめる。

「十香、お願ひがあるの」

「ぬ……？」どうしたのだ、改まって

私の言葉に十香は首を傾げる。

私はそのまま深々と頭を下げ、言葉を続ける。

「お願ひ——。私に……私に力を貸して！こんなこと、あなたに頼むだなんて筋違いだと
は分かつて。けど——私は——あの子を、四糸乃を救つてあげないといけないの——

——！」

「……」

私は精一杯の思いを乗せて言葉を紡いだ。

十香は数秒の無言の間を置いて、声を発する。

「四糸乃というのは……あの娘のことか？」

「うん」

「——」

私の返答に一瞬息が詰まつたようになり、低い——悲しそうな声音で言葉を続ける

「そうか……。やはり、あの娘が大事なのだな。——私より——」

「——そんな訳ないつ」

十香が言い終わるよりも早く顔を上げ、十香の瞳を見てその言葉を否定する

「——え……？」

「そういう事じやないの、あの子は——」

『土織。やめなさい。十香に余計な情報は——』

琴里が何かを言つてくるが、そのまま言葉を続ける。

「あの子は——十香、あなたと同じなの」

「同じ……？」

「そう。四糸乃是、あなたと同じ精霊なの」

「——!? あの娘が、か?」

私の言葉に十香は怪訝そうな顔を作り言葉を発する。

「それに、あの子も。十香、あなたと同じように自分の意思でどうにもならない力を持つていて、そのせいですつと……ずっと苦しい思いをしてきたの——！」

「」

「私は、四糸乃と約束したの。私がきっと救つてみせる——ヒーローになるつて。——けど私の力だけじゃあの子を追いかける事も出来ない——つ」

もう一度大きく、深く頭を下げる。

「お願い、十香。力を——貸してつ！」

沈黙が私と十香の間に流れる。

けれど長くはなかつた。

深呼吸をするような音が聞こえてきたかと思えば——。

「——そうか、そうだつた。なぜ忘れていたんだろう。——私を救つてくれたのはこういう女だつた——」

十香が微かな声で何かを呟いた。

そして足を踏み出す音が聞こえる。

「十香……？」

私は頭を上げる。

十香は歩みを進め私の横をすり抜ける。

そして〈魔殺公（サンダルフオン）〉の前に着けば身を翻す。

「——あの娘を、追えいいのだな？」

「——十香！」

十香は僅かに笑みを浮かべれば、〈麿殺公（サンダルフォン）〉を蹴りつける。

〈麿殺公（サンダルフォン）〉は十香の蹴りによつて背もたれから倒れながら、形を変化させてゆく。

「これって——」

私の疑問の声に十香は倒れた〈麿殺公（サンダルフォン）〉に飛び乗ると、私にスッと手を差し伸べる。

「乗れ。シオリ。急ぐのだろう？」

「——！うん！」

差し伸べられた十香の手を取り、私も〈麿殺公（サンダルフォン）〉の上へと乗る。

「捕まつていろつ！」

十香がそう言つた瞬間

「——！」

凄まじい加速で、〈麿殺公（サンダルフォン）〉が凍つた路面を滑走する。

全身を吹き飛ばさんばかりの風圧と加速度が襲う、咄嗟に私は目の前の十香の腰にしがみつく。

どうの十香はまるでただ床の上に立つてゐるという風に悠然と立つていた。

「速度を抑えては見失う！このまま行くぞ！」

「う——うん！」

声を出すのも辛いほどの風圧の中で辛うじて返事をする。

『まつたく——』

右耳のインカムから、琴里のやれやれといった声が響いてきた。

『十香が応じてくれたから良かつたものの、軽率よ、士織』

『ごめんね。あとで幾らでも叱られるから——今は力を貸して、琴里っ！』

琴里ははあとため息を吐いたあと、言葉を続ける。

『——勿論よ。精霊を助けるのが私達の使命。協力は惜しまないわ』

『ありがとう、琴里』

琴里に感謝の言葉を言うと同時に〈魔殺公（サンダルフォン）〉のスピードが上がる。一瞬バランスを崩しそうになる、けど十香がそれを支えてくれた。

「シオリ、大丈夫か？」

「だ、大丈夫」

「そうか——あれはなんだ!? シオリ！」

私の方を向いていた十香が再び進行方向へ顔を向けたとたん十香が驚きの声を上げた。

「な——」

そんな十香の声に私もその視線の先へと目を向けた。

異常な光景だつた。

吹雪が渦を巻き、綺麗な半球体を作り上げていた。

その周りにはA S Tの魔術師〈ウイザード〉が武器を構え包囲している。

「なんなの……あれは……」

『……四糸乃が構築した結界だね。……ふむ、よくできている』

「結界……」

私の疑問の声に答えたのは令音さんだつた。

令音さんは更に説明を続ける。

『……ああ。侵入者を拒む無数の氷の弾丸の壁、……A S Tの攻撃に対してもC R ユニットが出力した魔力……それ 자체を凍結させて防御しているようだ……』

令音さんが伝えてくれた情報を十香にも伝える。

十香は難しそうな顔を作り「むう……」とうなる。

「困った事になつたわね。あれじや、誰も四糸乃に近付けないわ」

確かに、普通に考えたらあの結界は突破することは出来ないかもしない、けど。
一つだけ、一つだけなら可能性があるかも知れない。

「私なら——」

『土織?』

私の呟きに琴里が反応する。

と、結界を包囲していたASTに動きがあつた。

折紙が近くにあつた雑居ビルの先端部分をむしり取り、四糸乃の結果の上へと運び始めた。

「そんな……」

『——ち、随分と思い切った真似をしてくれるわね』

「ど、どうしたら——」

私がそう言つた瞬間。

十香が前方を見つめながら声を発する。

「シオリには、四糸乃とやらをなんとかする方法に心当たりがあるのだな?』

「——つ。」

私は十香の問いかけに一度大きく息を吸い込み答える。

「ある。絶対になんとかしてみせる——」

「そうか』

答えを聞いた十香は振り返り、につ、と唇の端を上げる。

「十香…？」

「なら、そちらはシオリに任せること。ASTとやらは私に任せろ。シオリの邪魔はさせん」
十香はそう言うと、〈麿殺公（サンダルフォン）〉の先端へと走る。

そして先端部分から出ていた柄を握り、走る勢いのまま一振りの剣を抜き取れば、背もたれを蹴り、今にもビルを結界へと叩きつけようとする折紙へ飛翔していく。

「——！」

肘掛け部分にしがみつきながら驚愕に目を見開く。

視線の先では折紙が投げ落としたビルの一部を十香が、手にした〈麿殺公（サンダルフォン）〉で細切れにしていた。

そしてその勢いのまま十香は折紙へと切りかかっていた。

折紙達ASTは十香へと標的を変えたようで四糸乃の結界から離れていく。

私は声を発そうと開きかけた唇を結べば、視線を前へと戻す。

十香が作ってくれたこの時間を無駄にしてはいけない。

四糸乃を助ける——それが私のするべき事、そして十香の想いに報いる事。

四糸乃の結界へと突き進む〈麿殺公（サンダルフォン）〉にしがみついたまま、私は琴里へ一つ問いかける。

「琴里——確かめたいことがあるの」

『なにかしら?』

「気になる事が多すぎて聞き忘れていたんだけど、私あの日…十香の力を封印した時…折紙に撃たれたんだよね…?」

あの日、十香を庇つた私は折紙の放つた弾丸によつて致命傷を負つたはず。

私の問いかけに琴里は数瞬の間を置いて答える。

『――事実よ』

「あれって一体何なの? 前に教えてくれた原因不明で備わつている私の力っていうのなの?」

『半分正解で半分ハズレ…かしら』

「どういうこと?」

再びの問い合わせに琴里は悩むように一つうなつてから言葉を続ける。

『土織に備わつている能力つていうのは正解、その通りよ。身体が致命的な傷を負つたとき、焰が身体を焼き、再生させる。――そんなゲームキャラ顔負けのチート能力つて奴よ。そしてこつちは原因不明つて訳じやないわ』

琴里の答えに私は目を丸くする。

けど今は呆けている時間はない。

『分かった。今はその原因は訊かない。ただ確認なんだけど。私は、致命的な怪我をし

ても、回復できる——これに間違はないんだよね?』

『——ええ』

琴里が短くそう答える。

答えを聞けば私は一つ息を吐く。

「よかつた：あれが夢幻だつたら、私死に行かないといけなかつた」

私のその言葉に琴里の息を呑む音が聞こえ、続けて声が聞こえてくる。

『——土織！あなたまさか——』

琴里がそう言いかけた所で、私が乗る〈麿殺公（サンダルフォン）〉が四糸乃が居る結界の元へたどり着く。

結界の手前で〈麿殺公（サンダルフォン）〉は停止し、私が地面に降り立つと〈麿殺公（サンダルフォン）〉は音もなく光の粒となつて消える。

「この中に四糸乃が——」

目の前の渦を巻く吹雪を見上げながら呟く。

そして肩から掛けていた、よしのんが入つたトートバッグを胸の前に抱き、私は一步吹雪へと足を踏み出す。

『土織、待ちなさい。一体何をするつもり?』

インカムから琴里の制止する声が掛けられる。

けど私は歩みを止めない。

『まさか、生身で結界へ入るつもり？回復力頼りで？無謀すぎるわ、やめなさい』

「琴里、あの時私が撃たれたとき、全然動搖とか心配して無かつたって聞いたよ？」

『あの時は状況が違うわ。あの時は一発きりの弾丸だったけれど、今回は結界外周の5メートルの距離をそれこそ散弾銃で撃たれながら進むようなものよ？しかも、靈力を感知されたら凍り付かされるわ』

琴里はまくしたてる様に更に言葉を続ける。

口調も段々と余裕のなさそうなものになつてきている。

『言つている意味がわかる？途中で傷を治す事が出来ないって言つてるのよ。途中で力つきたら、間違いなく死ぬわよ！』

「——靈力…か。私のその回復力っていうのは、精靈の力なの？」

『——ツ』

琴里が息を詰まらせるのが聞こえる。

けど私は足を動かす事を止めない。

傍から見れば馬鹿な行動かもしねれない。

琴里が言う様に死んじやうかもしねない。

けど私は四糸乃と約束をしたから。

必ず救うつて。私が四糸乃のヒーローになつてみせるつて。
結界にあと一步という所で一瞬足を止め、一度深呼吸をする。
その間にも琴里の制止する声は続く。

『土織！止まりなさい！土織！』

そして私は結界内へと足を踏み入れる。

『——止まつて……ッ！、おね——ちゃ——』

そんな声を最後に、私の耳には凄まじい吹雪の音しか聞こえなくなつた。

瞬間、凄まじい衝撃が身体に襲い掛かる。

そして一瞬遅れて激痛が走り、歩みが止まりそうになる。

けどそれを押し殺し更に歩を進める。

一步進む度に左右から凄まじい衝撃が掛かり、その度に気絶しそうな程の激痛が走る。

何度もかの衝撃の後、前に倒れてしまう。が、それでも私は這うように四糸乃の元を
目指す。

そしてハタと襲い来る衝撃と、風の音が消える。

結界を突破した様だった。

「はあ……はあ……——ッ」

既に両足の感覚と左腕の感覚は無かつた。
意識をなくしていても可笑しくは無かつたけれど、傷の痛みが逆にそれを防いでいた。

そして耳にハツキリとした音が聞こえてくる。

「う、え…つ、え…つ」

直ぐに四糸乃の声だと分かつた。

感覚の残った右腕でよしのんを取り出し、そのまま右手へとつける。

「よ、し、のんつ…つ…」

四糸乃がそう言うと、私は右腕を四糸乃へと伸ばし声を上げる。

「は、あ、い——」

「…………！」

私がそう返事をすれば、視線の先で〈氷結傀儡（ザドキエル）〉の背でうずくまつていた四糸乃がビクリと肩を震わせる。

そして当たりを見回し、私が持つた『よしのん』に気付いた様だった。

「！よしのん…つ！？」

四糸乃是そう叫ぶと、〈氷結傀儡（ザドキエル）〉の背中から飛び降り、こちらへと走つて来る。

「ひつ——！」

近くまで来たところでようやく私にも気づいたのだろう。

四糸乃是驚きの声を上げ足を止める。

驚きも最もだと思う、こんな瀕死の人間を見れば誰だってそう思う筈。
と——身体の中から熱を感じた、熱は胸の辺りから発せられたかと思えば全身へと広がっていく。

そして熱が引いていくと同時に痛みが無くなり、身体に力が戻って来る。

「……し、おりさ……っ」

熱が完全に消え去った時、四糸乃が驚愕の声を上げる。

私は身体をうつ伏せの状態から仰向けへとなり、深く息を吐き出す。

「し……死んじやうかと思つた……」

一息付ければ身体を起こす。

そして目の前に立つ目元を真っ赤に泣き腫らした女の子の名前を呼ぶ。

「四糸乃——約束通り、あなたを助けに来たよ——」

そう言いながら手にした『よしのん』を四糸乃へ差し出す。

四糸乃是目を丸くすると——。

「う、え、ええええ——」

目元から大粒の涙を流し泣き始めてしまう。

私は四糸乃へと歩み寄り、傍らに膝を着けばそつと四糸乃を抱きしめる。四糸乃の頭をそつと撫でながら言葉を続ける。

「遅くなつてごめんね」

「し、おりさん…わ、たし——つ」

言葉を詰まらせる四糸乃の様子を見ながら、左手にはめていた『よしのん』を動かしてみる。

『やつはー、ひつさしぶりだねー。元気だつたかい?』

とても腹話術とは呼べない出来だつたけど見様見真似で真似をする。

四糸乃はコクコクと何度も何度も肯定する様に首を倒す。

そんな四糸乃の様子を見ながらふと令音さんから伝えられた言葉を思い出す。

『：調査の結果、四糸乃をモニタリングしていた精神グラフに隠れる様にもう一つ小さな反応があつた』

「それつて——』

『：ペペットを着けているときだけ、四糸乃の中にもう一つの人格があるということさ』
「！それは：四糸乃も分かつていてるんですか？」

『……それは分からない。一つ確かな事は、君がデパートで会話していたのは、四糸乃ではなく、パペツトを通して発現していた別人格だつたという事さ。四糸乃是物事を全てよしのんに任せ、心を閉ざしていった状態に近かつたわけさ。道理でキスをしても封印する事が出来なかつたわけだ』

「——」

『……そしてもう一つ。よしのんの発生原因について、分かつた事がある』

「分かつた事……ですか？」

『……ああ。通常別個の人格を生み出してしまった原因はいくつかあるが——、一般的なものは虐待などの強い苦痛やストレスから逃れる為というものだ。要は辛い思いをしているのは自分以外の誰か、だと思い込む為にもう一つの人格を作り出してしまうのさ』
「それは……やっぱり、ASTに狙われる事が辛くて——？」

『……いいや。……信じがたい事だが、四糸乃是、自分が、ではなく、他者を傷つける事が無い様に、自分の力を抑える為に人格を生み出した可能性が高い』

「——」

『……シア。彼女を救つてやつてくれ。こんなにも優しい少女が救われるのは……嘘だろう』

「あ、りがとう……ございま、す」

不意に、四糸乃がそう言いながら頭を下げる。

「え？」

「そ、の……よしのんを、助けて、くれて」

私ははにかみながら頬を搔いてから、四糸乃を見据える。

「次は——四糸乃。あなたを助ける」

「え——？」

私の言葉に四糸乃是不思議そうに首を傾げながらそう返す。

今の私に四糸乃の精神状態を知るす術はないけれど。

今まで触れ合つてきた四糸乃との時間と、いまこの瞬間の会話。

けつして長い時間ではなかつたけれど、四糸乃の信頼を得ていてる事を信じて。

「四糸乃——それでね。あなたを助ける為には、その……一つだけ、やらなきやいけない事があるの」

「なん……ですか？」

私は緊張で酷く乾くのどを動かし、言葉を続ける。

「そのね、キスつて、覚えてるかな？」

四糸乃是一瞬キヨトンとして顔を作れば、首を縦に振り、肯定の意思を示す。

「そ、そつか。それでね……あなたを助ける為に、それをしないといけないの。……や、変な意味はないんだけど——」

私の言葉は続かなかつた。

四糸乃がふつと目を瞑り。

私の唇へそつと口づけをしたからだつた。

瞬間——身体の中へ温かいものが流れ込んでくる感覚が、私を襲う。

そして四糸乃是そつと唇を離す。

「！——四糸乃……？」

「……？」

四糸乃是小さく首を傾げ。

「違ひ……ました……か？」

「ち、違わない……けど」

「土織、さんの……言うこと、なら……信じます」

瞬間——四糸乃の身を包んでいたレインコートが光の粒になり宙へ溶けていく。

私と四糸乃を囲んでいた結界もまた、急激にその勢いを弱め消え去つていく。

その様子と、自らを包む物が消えていく様に四糸乃がビクリと震える。

「……っ！、し、士織さ——これ——」

四糸乃是訳が分からぬといつた風に目をぐるぐると回しながら、徐々に裸になつていく身体を隠すように身を屈める。

「あう：あ、その、四糸乃これはね！その——」

顔を真つ赤にする四糸乃を見て慌てふためく。
と——。

「ん……」

四糸乃がふと、眩しそうに目を細める。

ふと振り返れば、雨の上がつた雲の切れ間から丁度私達を照らすように、陽の光が降り注いでいた。

「暖か——い」

そう言う四糸乃の顔は驚嘆の色をしていた。

そして思い出す、四糸乃是水と冷氣操る為か、現界する時は常に雨が降り注いでいた事を。

そして四糸乃の視線は丁度真上を見ていた。

「き、れい……」

空を見上げた四糸乃是そう呟く。

私もその声につられる様に空を見上げた。

「——虹」

そう、雨雲が消え去った空には——虹が掛かっていた。
そして不意に私と四糸乃の身体が不思議な浮遊感に包まれた。

「ひやつ……つ！」

「——!?」

この感覺は〈フラクシナス〉の転送装置だ。

きっと琴里が回収してくれたのだろう。

そう思った時には私と四糸乃は地上の街並みではなく、〈フラクシナス〉の艦内へと移っていた。

「……!?……!？」

四糸乃是突然の出来事に目を白黒させていた。

と——。

「シオリ！ 無事だつたか！」

背後から掛けられた言葉にハツと振り向く。

そこには制服を所々焼け焦がせた十香が立っていた。

「十香——！ よかつた——」

私が名前を呼べば、十香は安心した様に息を吐き、手にしていた〈廻殺公（サンダルフォン）〉と制服の要所に発現していた光の膜がフツと搔き消える。

「うむ。大したことではない。…というか、シオリ、おまえの方が酷い有様ではないか」「あ……」

十香に指摘されて私は自分の恰好を見る。

着ていた服は、自分の血で真っ赤に染まり、穴だらけになっていた。

「ひ——つ」

傍らから四糸乃の怯えた様な声が聞こえてくる。

そして私の背後に隠れる。

十香の事が苦手の様だつた。

その様子に思わず苦笑してしまう。

「大丈夫だよ四糸乃。この子は十香。私と一緒に——あなたを助けてくれたんだよ」

私がそう説明すると、四糸乃は恐る恐る十香の方へ顔を向ける。

「十、香……さ、ん」

「……ぬ」

十香は少し複雑そうな表情で四糸乃を見れば、少し間を開けて「うむ」と小さくうなづく。

「……？」

私は首を少し傾げた。

扉の向こう、廊下の方からバタバタとけたたましい足音が鳴り響いてきたからだつた。

そして次の瞬間には扉が開き、肩で息をした琴里が部屋の中へと入つてきた。

「琴里……？」

私が驚いていると、琴里が睨みつけるように全身を見つめてきた。

そして――。

「この――アホ姉……！」

「きやつ……!?」

琴里はタツクルするかの様に飛びついて來た。

そして耐えられなかつた私は後ろ向きに倒れる。

「馬鹿な真似して……つ！ あなたは私の言う事だけ聞いていればいいのよ!!」

「琴里……」

琴里はそう言いながら私の胸元に顔を押しつけ、両腕で私の身体を抱きしめていた。

「……ちゃんと、回復境界も計算してるから――!! 私の言う通りに動いてれば、

絶対に安全だから……つ」

私はそつと琴里の頭を撫でながら謝る。

「（バ）めんね、琴里」

「…本当に考えなしよ。馬鹿姉」

琴里はそう言つてから抱いていた腕を解き、身体を離す。

そこにはいつもの司令官モードの琴里が立つていた。

「全員頭の先から爪先まで精密検査よ！こつちに来なさい」

そう言えば琴里は身体を翻し、廊下へと出て行つてしまう。

「——はは」

私は自嘲気味に笑つてから、十香と四糸乃へ顔を向ける。

「それじゃあ、行こつか——」

そう言つた所で十香の様子が少し可笑しい事に気付く。

浮かない表情で私の事を見ていたからだつた。

「十香：？」

私が名前を呼べば、十香はハツとした様にしてから口を開く。

「！な、なんでもない！早く行くぞ！シオリ！」

そう言えば十香は部屋を出て行つてしまふ。

「十香：？」

頭に一つ疑問符を浮かべながら、四糸乃と一緒に二人の後を追つて歩き出した。

幕間

「な——」

四糸乃の力を封印した日から、三日経つた土曜日の朝。

あれから私と十香は丸々二日くフラクシナスで検査を受け、昨日の夜にようやく家に帰つて来て、その日はそのまま眠りについた。

そして今日、朝起きて窓から外を見れば、空き地であつた筈の場所にマンションが聳え立つていたのだ。

私はパタパタと寝間着のまま外へと出る。

そしてマンションを見上げ、目を白黒させていると、後ろから声を掛けられる。

「言つてなかつたかしら？精霊用の特設住居を建てるつて

振り向けば琴里が、そう言いながら玄関から出てくるところだつた。

「琴里、これがそうなの？」

「ええ。見た目はごく普通のマンションだけれど、耐衝撃、耐靈力性もバツチリの特別製
よ」

「それにしても…」

流石に一晩で作つてしまふとは思わなかつた。

いや、以前琴里が言つっていたみたいに顕現装置クリアライザを使つたのだろう。

「と、言う訳で。今日の夜には十香は家を出て此処に住んでもらうわ。十香には言つてあるから、今頃荷造りしてゐんじやないかしら？」

「そつか…」

琴里の言葉を聞いて、少し寂しい気持ちになる。

とは言えすぐ隣なのだだから変わらないのかもしれない。

「それともう一人」

そう言いながら琴里は視線を変える。

私も琴里が向いた方に視線を向ける、そこには紫陽花色のワンピースを纏い、ベージュのキヤスケット帽を被つた少女が飛び跳ねる様にやつて来る。

「四糸乃！」

そう身に纏つてゐるのは靈装ではなかつたけれど、間違いない。

ふわふわとした水色の髪と蒼玉の瞳、そして左手に着けたウサギのパペツトを間違える訳が無かつた。

四糸乃是私達の前で止まると、パペツト、『よしのん』がズイッと前に出て甲高い声を響かせる。

『やつと会えたねえー。助けてもらつたお礼言えなくてごめんねー、士織ちゃん』
「あ、うん…それはいいんだけど。検査は終わつたの?」

私の記憶が確かなら四糸乃是まだ暫く〈フラクシナス〉で検査の筈だつたけど。
『んー、最初の検査だけはね。まだまだ検査はあるらしいけど、士織ちゃんにお礼が言い
たくてさ。特別に外に出してもらつたんだー』

そう言うとまるで〈フラクシナス〉を見上げる様に空を見る。

『そゆわけで、検査が終わつたらまたデートしよーねー』

「え、あ。うん、わかつた」

『うんじや、まーたね』

そう言いながらよしのんは小さな手を振る。

と思えば、顔を伏せていた四糸乃が躊躇いがちに顔を上げ、私の方を向く。

「?どうかしたの?」

「…あ、の…」

「!、四糸乃ー」

聞こえてきた声に私は驚きの声を上げる。

聞こえてきたのは『よしのん』の声ではなく、四糸乃の声だつたから。

「また…おうちに、遊びに、行つても…いいで、すか…?」

そう言うと、四糸乃是恐る恐ると言つた様子で私に視線を向ける。

「うん、いつでも来てね」

私がそう答えると、四糸乃是顔をパアッと明るくする。

そして頭を下げるとき、来た方向へと走っていく。

四糸乃の背中が見えなくなるまで見送ると、一つ背伸びをしてから、家に戻る。自分の部屋に戻る時十香の部屋からゴソゴソという荷造りしているであろう物音が聞こえてきた。

部屋に戻り、普段着に着替えながら独り言ちる。

「そつか、十香引つ越しちやうのか・・・」

十香が家にやつて来てから一ヶ月弱、すっかり居ることが当たり前になつていただけに、少し寂しく思う。

けど引っ越しどは言えすぐ隣である。

会おうと思えば何時でも会えるし、今までの様に食事だつて一緒に取れる。

「……よし、ウジウジしててもしようがない」

そもそも十香が家に来た時に琴里からはしばらくの間と聞いていたのだから。

そういうするうちに着替え終われば何か手伝える事はないかと思い、十香の部屋へと向かう。

扉をノックし、声を掛ける。

「十香」

「ぬ…シオリか入つてくれ」

返事があつたのでそのまま扉を開け、部屋へと足を踏み入れる。

十香はちょうど段ボールに蓋をし、布テープで封をするところだつた。封をし終えると、立ち上がり私の方へと向き直る。

「荷造り中にごめんね、ついさつき琴里から今日隣に引っ越すって聞いたから。様子を見に来たんだけど」

「おお、そうだつたか」

「けど荷造り終わつたみたいだね」

十香の後ろに視線を向ければ、段ボール箱が4箱ほどあるだけだつた。

「うむ、元より荷物は少なかつたからな」

「そつか…」

少し、私は考える。

今日から十香は所謂一人暮らしになる訳だからと必要な物も出てくるかもしけない。

生活用品や衣料品などなど。

今日は休日だし買い物するにもちょうどいいし。

「十香、買い物に行こうか」

「シオリと一緒にいか?」

「うん」

私がそう言うと十香は顔をパアッと明るくすれば元気よく返事をする。

「うむ!」

「それじゃあ、私はリビングで待ってるから支度が終わつたら来てね」

「うむ、すぐに支度する!」

そう言えば私は部屋を出て、リビングへと向かう。

数十分後、私と十香は天宮市駅前の商店街を歩いていた。

目的は十香の為の買い物。

まず最初にあまり数がない十香の私服などを購入する事にして、一応私の服を何着か譲つてはいたが、如何せん数もあまりなかつたからだ。

商店街の中程にある、ティーン向けの衣料品を扱うショッピングが集まる一角に到着すれば、そのうちの一店に入る。

「十香はどんな服が好き？」

十香と肩を並べながらハンガーに掛けられた色取り取りの服を眺める。

「うーむ…」

十香は私の質問に考える様に声を上げる。

そして店内をグルリと見まわしてから口を開く。

「…シオリが見繕つてはくれないか？」

「私が？」

「うむ！」

十香の言葉に問い合わせば十香は元気よくそう答えた。

私は頬に手を当てながら店内を見渡す。

「そうだなあ……これとかどうかな？」

そして近くにあつた服を手に取る。

淡いピンク色の半袖のブラウスだつた。

手に取つたそれを十香にあてがうようにしてみる。

「おお、シオリこれはいいな！」

「じゃあ一着はこれで決まりだね」

「うむ！ 次もよろしく頼む！」

「お任せあれ、つてね」

そんな調子で私と十香は店内を一緒に見て回った。

私が十香に似合いそうな服を身繕い、時折試着をして着心地やサイズを確かめてもらう。

そして数十分後、衣料品店を出た私の手にはトップスやボトムスが詰まつた紙袋が握られていた。

「ありがとうなのだ、シオリ」

「いいの、いいの。さて今日はまだ買わないといけないのが、いっぱいあるからね」
十香が僅かにはにかみながらそう言えば、私はふるふると首を振つてから答える。
そして足を踏み出した所で『くうううう』という音が耳に届いた。

ちらつと十香の方を見れば少し恥ずかし気に十香がお腹に手を当てているところだつた。

時計を見ればもうすぐお昼だつた。

「お昼にしよつか、十香」

私が言えば十香は何度か首を大きく前に倒す。

「じゃあ、十香は何か食べたいものある?」

「ん…シオリは何が食べたいのだ?」

十香に問い合わせてしまつたので、考える。

そしてふと、視界の端に見えたものがあつた。

「パスタ…とかどうかな？・十香」

そう言つて視線を向ける。

視線の先にはオープンしたてだろうか、真新しい佇まいの店舗とA型黒板に書かれたランチメニューが見えた。

看板にはパスタ専門店と書かれている。

「もちろんいいぞ、シオリ！」

「よし、じゃあ行こつか」

そう言つて十香と共にパスタ専門店へと向かう。

「いらっしゃいませーー！」

入店するとドアベルの子気味好い音と店員さんの声が私たちを迎える。店員さんに人数を伝えれば、窓際の席へと案内される。

そしてお水とおしぼり、メニューが二冊テーブルに置かれる。

一冊メニューを手に取り開けば、十香の方へと向ける。

「ううむ…種類が多くて迷つてしまふ

「ホントだね」

このお店はパスタの種類とソースを自分で選んで組み合わせる事が出来る様で、メニューの前半には色々な形のパスタの写真と説明があり、後半にはソースが記載されている様であった。

他にも一般的な組み合わせであつたり、日替わりパスタなど様々であった。

「ううむ……」

十香はメニューとにらめっこしながら、悩むように声を上げる。

そして暫くすると、よしと言つて私に視線を向ける。

「決まったぞ、シオリ」

「じゃあ注文しようか」

そしてちょうど近くに居た店員さんを呼び、注文を伝える。

「私はファルファーレの海老のトマトクリームソースをお願いします。」

「私はこれと、これ、それにこれを大盛りで頼む！」

十香はメニューに掲載されているナポリタン、ボロネーゼそれにタラコソーススペゲッティを指さす。

「全部を大盛りですか？」

「うむ！」

十香の注文に店員さんが驚いた様に確認する。

十香はといえばもちろんとばかりに笑顔で答えた。

「かしこまりました、それでは少々お待ちください」

店員さんは驚いた顔をしていたが、すぐに顔を戻せばそう言つて厨房へと下がつていつた。

十数分後、テーブルの上には湯気を纏つたパスタがズラリと並んでいた。

主に十香の頼んだ物であつたが、どれもとても食欲をそそる様な香りを漂わせていた。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきますだ！」

私がそう言つて手を合わせれば、十香も元気よく手を合わせ注文したパスタを食べ始める。

少し遅れてから私も食べ始める。

「わあ：美味しい」

もちもちのファルファーレにほんのりとしたトマトの酸味と海老の風味が溶け込んだクリームソースがマッチしていた。

食べ進めながら十香を見ればすごい勢いで食べ進めていた、既に三皿頼んでいたうちの一皿を平らげて、二皿目も半分を残す程になつていた。

「あ、十香。ちょっと…」

「ぬ？」

私がある事に気付いて声を掛けると十香のフォークを動かす手が止まり、私へと顔を向ける。

「ん…」

私は手を伸ばせば十香の頬に触れた、そしてついていたボロネーゼソースを指で掬いとる。

そしてつい掬ったソースをそのまま自分で舐めとってしまう。

そして直後にハツとなり十香の方を見れば、十香は恥ずかしそうに少し頬を赤く染めていた。

「ん――――…」

昼食後、残った買い物を済ませた私たちは帰路についていた。

十香の為の生活必需品や、今夜の夕ご飯の材料などなどが詰まつた袋を一人で分けて持っていた。

「今日はありがとうございます、シオリ」

「いいってばそんな、私がしたいからしているだけなんだから」

「それでもなのだ、シオリ」

「…どういたしまして、十香」

二人肩を並べて夕暮れの商店街を歩く。

すると、空いていた私と十香の手がふとぶつかる。

「と、すまないシオリ…」

「わ、私もごめんね…」

お互にそう謝り合うと十香が少し逡巡の様なものを見せてから、十香が私の手を握つて来た。

「十香…？」

「帰るまで繋いでいてはダメか？シオリ…」

「…ううん」

「ん…」

私の返答を聞けば十香は握る手に僅かに力を籠める。

そして再び歩き出す。

時折十香が握りなおす様に力を籠める。

そして商店街を抜ける所でふと私は足を止めた。

「…？。シオリどうしたのだ？」

十香が首を傾げながら尋ねてくる。

「十香、少し待つて貰える？」

「う、うむ……」

十香にそう言つて、繋いでいた手を一度離し目の前のショッピングへと入る。

そしてショーウィンドウ越しに見えた物を手に取り矢継ぎ早にお会計を済ませる。ショッピングから出ると十香は入り口脇で所在なげに待つていた。

「十香、お待たせ」

「ぬ、シオリ早かつたな……それはなんだ？」

十香は私の抱えていた茶色の紙袋に視線を向け問いかけてくる。

その言葉に答える様に私は紙袋から買つたばかりの物を取り出す。

「お引越し祝い……いうのもおかしいけど。私からのプレゼント」

買ったもの、一風変わつた品物である大きなきなこパンのぬいぐるみを十香に手渡す。

「これは……」

十香はぬいぐるみを受け取ればぬいぐるみと私を交互に見て、ぬいぐるみをギュッと抱きしめてから口を開く。

「大事にする、ありがとう……」

「それじゃあ帰ろつか」

そう言えば今度は私から十香の手を取る。

握った十香の手は心なしか先ほどよりも熱を持つていてる様だつた。

「…うむ」

再び私と十香は帰路につく。

お互に無言であつたけれど、時折十香の方をちらと見れば同じように私を見ていた。十香と視線が合い、恥ずかしくなり視線を逸らすという様な事を幾度も繰り返していた。

けど決して居心地が悪いとか気まずいという雰囲気ではなかつた。繋いだ手から互いの体温を感じそれが心地よい感覚を生んでいた。

そしていつの間にか私たちは家の前へとたどり着いていた。
「ど……着いたよ、十香」

「お、おお。すまない」

ぼうつとしていた十香に声を掛ければハつとした様に返事をする。
そして家に入り、靴を脱いだところで十香が口を開く。

「シオリ、この後私の部屋に来てはくれないか？」

「十香の部屋に？」

「うむ…シオリと話したい事があるのだ」

十香が真っ直ぐ私の目を見つめながらそう言う。

私は幾ばくかの間を開けて答える。

「わかつた、それじゃあしまわないといけない物だけ片づけたら直ぐに行くね」「うむ、待ってる」

十香はそう言えばぱたぱたと階段を上り自分の部屋へと向かう。

数分後、片づけを終えた私は十香の部屋の前に居た。

そしてコンコンと扉をノックする。

「十香、入るよ」

そう言つて扉を開ける。

十香は窓際で夕焼けを眺める様に外を見ていた。

部屋の中に入り十香の後ろへと歩を進め、その背中に声を掛ける。

「十香、それで話つて？」

私が問い合わせれば十香がクルリと体の向きを変え

ちようど私と向き合う形になる。

フワツと舞つた十香の黒髪が夕焼けの赤を鈍く反射させキラキラと光つているようだつた。

そして僅かに俯きながら十香が唇を開く。

「ん……そのだな。昨日琴里と令音にいろいろと、聞いた」

「いろいろつて…」

「琴里や令音達が私たち…精靈を助けようとしている事…そしてシオリもそれに協力している事だ…」

十香はギュッと胸の前で手を握るようにしてから顔を上げる。

「話というのはその事についてだ…シオリ。頼む今後、私や四糸乃の様に精靈が現れたら、きっと…きっと救つてやって欲しい」

「十香…」

十香の言葉に私は目を見開いた。

「琴里によればまだ精靈は幾人か居るらしい。きっと、きっとその中には私や四糸乃の様に、望まぬ戦いに巻き込まれている者もいるはずなのだ…」

十香は一度言葉を切れば、両の手で私の右手を取り言葉を続ける。

「そんなのは、可哀想ではないか…だから頼む。シオリの力でそういつた精靈たちを救つてくれ…あの時…私を、助けてくれた様に…」

そしてギュッと私の手に力を籠める。

私は空いていた左手でそつと十香の手を包むようにする。

私の心は十香そして四糸乃の時に決まっていた。

「——もちろん。そのつもりだよ」

「……」

十香は望んだ筈の私の言葉に複雑そうな顔をして笑った。
「…恩に着る。シオリ……あと一つ、いいだろうか？」

「なに?」

「……☒…」

十香がモゴモゴと何かを言うように口を動かしたが何を言つたかは聞き取れなかつた。

ふつと十香は顔を俯けてしまう。

まだ何か言つている様だけれど聞き取れない。

「……十香?」

十香の名を呼び、俯いた顔を覗き込もうとした瞬間。

「……?」

バツと顔を上げた十香がそのままの勢いで私を近くにあつたベッドに押し倒す。ベッドのスプリングが軋みを上げる。握っていた手はいつの間にか私の手首を抑える様に動いていた。

そして——。

「——!?」

十香がおもむろに自分の唇を私の唇に合わせてきた。

突然の出来事に私は目を見開いた。

目の前にはギュッと目を閉じたままの十香の顔。

鼻腔をくすぐるのはシャンプーと十香の香りが混ざった甘い香り。

そして身体全体に感じるのは柔らかな十香の肢体と体温。

そして——唇に伝わるのはほんのり湿った十香の唇の感触と、唇の間から伝わる十香の唾液の味。

十香は私の唇に啄む様にキスを続ける。

「ん……」

「んあ……十……んん……」

そして一分程経つた時、十香が唇を離し顔を上げた。

「ふは……と、十香……何を……」

私が声を発すると、十香は私を押し倒したまま答える。

「……今回は、これで手打ちにしてやる」

「え?」

私の間の抜けた声に十香は恥ずかしそうに目を逸らす。

「……なぜだろうな……ただ唇を触れ合わせるたつたそれだけの事なのに……悪くないと感じる。そして不思議と……シオリ以外とはしたいとは思わないのだ」

そこまで言うと十香は押さえていた私の手首を離し、言葉を続ける。

「同じなのかどうかわからないが……シオリが……あの時……四糸乃とキスをしていた時は、なんというか、もやもやと嫌な感じがした……」

私がまだ目を白黒させていると、十香は恥ずかしそうに言葉を続ける。

「だから……その……私以外とはしないで欲しい……」

「…………つ……えつと——」

その言葉で気付く、十香は琴里から精霊を力を封印する方法を聞いていない事を、その事を伝えようとしたけれど。

「返事つ!!」

「う……うんつ」

十香の迫力に気圧されて私はそう答えてしまった。

狂三編 転校生

「よしつと」

週明けの月曜日。

私は何時もの様に朝食を用意していた。

テーブルへの配膳を終え、エプロンを外しながら二階の琴里に声を掛ける。

「琴里ー、朝ご飯出来たよー」

声を掛けてから暫くすると階段を下る足音が聞こえ、ドアの開く音と共に、黒い二つ
のリボンで結わえ制服に身を包んだ私の妹、琴里がリビングへ入ってきた。

「おはよう、琴里」

「ん、おはよう。土織」

そう挨拶をすれば琴里は定位置に座つてから再び口を開く。

「ところで土織、十香はまだ起きてないの?」

「そうみたい」

十香は土曜日に隣のマンションに越しているが、

基本的に食事をこつちで摂る事になつてゐる。

時計を確認する。

登校のリミットまではまだ時間はあるけれど、一応確認した方がいいかも知れない。

「ちよつと様子を見てくるね、琴里は先に食べてていいよ」

「待つてるから大丈夫よ」

「わかった」

そう言つて私は家の隣に立つマンションに向かう。

このマンション、通称「精霊マンション」は見た目こそぐく普通のマンションなのだが共用玄関を過ぎてエレベーターホールに入る為にはまるで銀行の金庫の様な大きく頑丈な扉をいくつも通らないといけない。

そんな扉を琴里から渡されているカードキーで開き、エレベーターに乗つて十香の部屋。

がある4階を目指す。

部屋の前に着けば、インターフォンを押す。

暫くすると足音が聞こえ、扉が開かれる。

扉が開くと、長い濡れ羽色の髪に整つた顔立ち、そしてクリスタルの様な瞳を持つ少女。

十香が顔を覗かせる。

「おお！、シオリではないか、おはようだ！」

十香は私と分かるとぱあッと顔を明るくする。

「おはよう、十香」

「うむ、ところでどうしたのだシオリ？」

「あ、うん。朝ご飯が出来たから様子を見に来たんだけど…」

そう言つて十香の姿を見る。

普段は髪を大きなりボンでポニー・テイルに結い上げている十香だが、今は髪を下ろしている。

手を見るとリボンが握られていた。

ちようど髪を結ぶところだつた様だ。

十香は私の言葉を聞けば、得心した様にポンと手を打つ。

「そうであつたか、待つていてくれすぐに準備をする」

「わかつた、待つてるから」

そう言えば十香はクルリと身体を廻し室内に戻ろうとする。

その背中を見送ろうとして、私は違和感を覚えた。

今月から衣替えという事もあり十香は半袖ブラウスにリボンを付けた来禅高校指定

の夏服を着ていた。

着用している制服に問題はなかつた、問題だつたのは…。

「と、十香」

「ぬ、どうかしたか」

十香を呼ぶと、十香は立ち止まりこつちに向き直る。

「えつと…もしかして着けてない?」

「? 何をだ?」

「何つて、その、ブラを?」

私の言葉に十香は不思議そうに首を傾げる。

「なんだそれは?」

「ああ……」

十香の何も分からぬといふ答えに私は頭を押さえた。

今まで十香が身に着けていた服は冬服のブレザーや私服でもあまり身体のラインが出ないものだつたから気付かなかつた。

一昨日の買い物でランジェリーラインを買いに行かなかつたのを少し後悔した。

「そのブラっていうのは下着の事でね、胸に着ける物なんだけど」

「ふむ、胸に着ける物か?」

「うん。それでね、十香ちょっと部屋に案内してくれる？」

「う、うむ」

十香にそう言えば私も靴を脱ぎ部屋に入る。

十香の案内で一室に入る。

そして十香に断つてから壁際に並んだ衣装箪笥を調べる。

ちょうど一番上の棚に目当てのもの、下着類が収納されているのを見つけた。
幸いというべきかどれも同色、同デザインだつた為一つを手に取り箪笥を閉じる。
そして十香に手にしたそれを見せる。

「これが、ブラ…ブラジャーっていう下着だよ」

「おお、これがそうであつたか」

十香にブラを手渡すと、十香はブラを両手でつまみ上げまじまじと観察する。

しばらくすれば十香が少し嫌な顔をして言う。

「む……シオリ。どうしても着けねば駄目か？」

「ダメだよ十香」

「何故だ？」

「そのね、例えば雨に降られたりとか、汗を搔いたりするとブラウスが透けてね——

——

私の説明を聞けば十香が顔を赤くして顔を伏せる。

「わ、分かった」

「それじゃあ外で待つてるね」

そう言つて部屋の外へ出ようとすると、十香がギュッと私のカーディガンの袖口を掴んで引き留める。

「むう…シオリ…教えてくれないか?」

十香はそう言うと手にしたブラをズイッと私に押し付けてくる。

私は受け取ると一度深呼吸してから口を開く。

「それじゃあ…十香、ブラウスを脱いでベッドに腰かけて」

「う、うむ」

十香は返事をすればベッドに腰かけてブラウスのボタンを外してゆく。

私はその間に十香の後ろへと廻る。

「シオリ、脱いだぞ」

「あ、うん…」

前を見れば、十香の背中があつた。

シミ一つない白磁の様な肌を夜色の髪が引き立てていた。

「十香、まずはこのストラップを腕に通して」

「うむ…」

私はそう言つて十香に再度ブラを手渡す。

十香は受け取つたブラのストラップに腕を通してゆく。

「次は、カツプを胸の下に当てる……」

言葉による説明と時折手を貸しながら十香にブラの付け方を教えていく。
そして――。

「うん、これで大丈夫」

「ん、ありがとうだ、シオリ」

十香はそう言つて立ち上がりると身体を動かす。

そして少し不満気な顔をする。

「もう…動きづらいぞ」

「我慢して、そのうち慣れるよ」

「む、むう」

十香は少し不満げな顔をしていたがしようがないという風に気持ちを切り替えた様
だつた。

「それじゃあ朝ご飯食べよっか」
「うむ！」

そう言つて、十香と一緒に家へと向かつた。

3人で朝食を摂つた後、私と十香は学校へと向かつていた。

普段は8時ちょうど位には教室に着いているのだけれど、今日はあんな事があつたので少しギリギリの到着だつた。

校内へ入り自教室に向かう。

教室の扉を開けると、入り口の近くで男子生徒が黒板に落書きをしているところだつた。

「おはよう、殿町君」

あいさつをすると殿町君はシユタつと音がしそうな速さで私の目の前で膝をついてきた。

「やあ、おはよう。土織ちゃん。今日もまた一段とキューートだね」

殿町君は私を見上げる様にしてからそう言うとウインクをする。

「あ、あははは……」

私がリアクションに困つているといつの間にか殿町君の後ろに3人の女生徒が立つ

ていた。

「殿町い…」

「いい度胸してるわね」

「マジ引くわー」

クラスメイトの山吹亜衣さん、葉桜麻衣さん、藤袴美衣さんだつた。

3人は殿町君を蔑むような眼で見降ろしながら続ける。

「あんた朝っぱらから士織ちゃんに手え出すなんていい度胸してるじゃない」

「辞世の句を詠むがいい」

「マジ引くわー」

3人がそう言うといつの間にか集まつていたクラスメイトが殿町君の両腕をガツシリと掴んでいた。

殿町君は額から汗を垂らしながら自分を囲むクラスメイトを見回す。
「え、ちょっと待つて俺、挨拶しただけで、ていうか前にもこんな——」

そんな殿町君の言葉も空しくズルズルと教室の外へと引きずられていつてしまう。
しばらくすると叫び声の様なものが聞こえてきた。

「ど、どうしたのだ、殿町は」

「あー、気にしなくて良いと思うよ…」

私はそう言つて自席へと歩いていく。

世の中には気にしてはダメな事もあるのだ。

そして自席に着く寸前、左隣の席に目を向ける。

そこにはいつも通り、綺麗な少女が腰かけ、読書をしていた。色の白い肌に、人形を思わせる顔立ちをもつた少女。

「おはよう、鳶いー」

「…………」

私が名前を呼ばうとした瞬間、射貫くような視線を向けてくる。

そこで私はこの前の事を思い出し。

「お、折紙さ…」

「…………」

再びの無言の圧力。

「折紙」

「おはよう、土織」

言い直すと、少女—折紙は小さくうなずきながら返してきた。

そして折紙は私の肩越しに十香を見れば、視線を鋭くする。

「今日も一緒に登校してきたの」

「え？あ、うん。そうだけど」

「そう」

一見すると表情も語感も変わらない様だけれど、威圧感のような物を感じる。

「——ぬ？」

威圧感に気が付いたのかわからないが、私の席の右隣の席に座ろうとしていた十香が折紙の方へ顔を向ける。

「なんだ、何か用か？」

「別に」

「…ふん」

十香は不快だという風に鼻を鳴らし、そっぽを向く。

と、そこでスピーカーからチャイムが鳴り響く。

「ちや、チャイム鳴つたよ、十香。席に着こ、ね？」

「う…うむ……」

十香は返事をすれば席に着く。

私も一安心すれば椅子に腰を落ち着ける。

先ほど殿町君を引っ張つていったクラスメイト達もぞろぞろと教室に戻つてくれればそれぞれの席に着席する。

程なくして、教室の扉が開き、眼鏡をかけた小柄な女性が入ってくる。
担任の岡峰珠恵先生だ。

「はい、みなさんおはよおございます」

いつも通りのほわっとした挨拶を済ませると岡峰先生、通称タマちゃん先生が出席簿を取り出し、出席確認を行う。

「殿町君——は居ないみたいですねえ」

そうして出席を確認し出席簿を閉じるとタマちゃん先生が手を合わせて言う。

「今日はあ、みなさんにお知らせがありますう」

その言葉に教室がざわめく。

そして思わずぶりな視線を投げかけ言う。

「なんとお！—このクラスに、転校生が来るのです！」

ビシッとポーズをつけ高らかに宣言すれば教室中に驚きとも歓声とも言える声が満ちる。

かく言う私も驚きとどんな人が来たのだろうという好奇心はある。

それだけ転校生というものは学校生活の中でも大きな出来事だ。

実際、十香がやつてきた時にもクラスは皆一様に浮かれていた。

「けど……」

二か月ほど前に十香が転校：表向きにはだけれどしてきたのに、またこのクラスに転校生が割り当てられるのかと疑問に感じた。

二年生はこのクラスだけという訳でもないのに。

「それじゃあ、入ってきてー」

そんな私の思考はタマちゃん先生の声によつて途切れた。
ゆっくりと扉が開かれ、転校生が教室に入つてくる。

転校生の姿が見えると途端に教室から音が消えた。

転校生は少女だつた。

氣温も高くなつてきた中、冬服のブレザーを隙なく着込み、両足はタイツに包まれて
いる。

そして十香よりも更に濃い長髪を左右で結び、長い前髪は顔の左半分を覆い隠して
いた。

そんな凡そ同い年とは思えない妖艶な魅力を醸し出していた。

そんな彼女が教卓の直ぐ脇に立つ。

「じゃあ自己紹介をお願いしますねえ」

「——ええ」

タマちゃん先生が促すと、彼女は優美な仕草でうなずくと、背を向けチョークを手に

取る。

そして黒板に、綺麗な文字で『時崎狂三』と書き込んだ。

「時崎狂三と申しますわ」

清らかな、そしてよく響き渡るような声で、彼女・時崎さんは続ける。

「わたくし、精霊ですよ」

「――」

その言葉に。

私は正に衝撃を受けた。

時崎さんの言葉にどよめく教室の中で、きっと両隣に居る十香、折紙だけが同じ反応をしている筈であつた。

そして一瞬、時崎さんが私の方を見て微笑んだ様に見えた。

「――！」

「ええ……と…。とっても個性的な自己紹介ありがとうね！」

タマちゃん先生が教室に漂うなんとも言えない空気と、時崎さんが言葉を続けない事で自己紹介の終了を促す。

「そ、それじゃあ時崎さん、席を用意してあるので空いている席に座つて下さいね」

「ええ。その前に、岡峰先生。一つお願ひがあるのですけれど」

「はい、なんですか？」

タマちゃん先生が問い合わせ返せば、時崎さんが人差し指を立て頸に当て軽く首を傾げる。「わたくし、転校してきたばかりでこの学校の事をよく知りませんの。放課後で構いませんから、何方かに案内をしていただきたいのですけれど」

「あ、では。クラス委員長の——」

タマちゃん先生が委員長を指名しようとしたが、時崎さんが言葉を遮るように歩きだす。

そして私の目の前へとやつてくる。

「——お願ひできません」と——士織さん

「——え？」

予想外の展開に私は茫然とした声を出す。

「わ、私……それになんで私の名前を——」

「……駄目……ですの?」

「え、あ……駄目ではないけど……」

「では決まりですわね。よろしくお願ひしますわ、士織さん」

時崎さんは微笑みを浮かべれば、茫然としているクラス中の視線の中、指定された席。十香の右隣の席へと向かう。

そして時崎さんが着席したのを確認すると、タマちゃん先生がホームルームの終了を伝え、教室から出ていく。

それを確認すると私はポケットにしまっていた携帯電話を取り出し、教室から足早に出来る。

そして直ぐにアドレス帳から琴里の番号を呼び出す。

数コール後、スピーカーから間延びした琴里の声が聞こえてくる。

『どーしたー、おねーちゃん』

「あ、もしもし。琴里」

『どつたのー、こんな時間に。もうちょっと早かつたら先生に怒られてたところだぞー』

「ちゃんとマナーモードにしないとダメだよ』

『たまたま忘れてただけだもーん』

少し不満げな声で琴里が言う。

『でー、どうしたのだー?』

「実はね……」

そう言つてから開けたままの扉越しに時崎さんに目を向ける。

自己紹介の時の風変りな…もとい普通の人からしたら引かれてしまいそうな発言をしたにも係わらず、時崎さんの周囲にはクラスメイト達が我先にと集まり人だかりが出来ていた。

廊下にも転校生の話を聞きつけたのか他クラスの生徒が見える。

すると時崎さんがこちらを向き、目が合つた。

時崎さんは目が合うとにこりと笑みを浮かべる。

同性でも一瞬ドキッとしてしまう笑みだつた。

私は視線を逸らす。

『おーい、おねーちゃーん？』

「え、あ、その今日私のクラスに転校生が来たの。それでその子が言つたの」

「んー、なんて？」

「私は、精霊だつて——」

『…………』

私が告げた瞬間、琴里が無言になる。

そしてスピーカーから衣擦れの様な音と、廊下を歩く音が聞こえてくる。

『——詳しく話してちよだい』

つい先ほどまでとは違う口調で琴里が言う。

「詳しく述べて言われても、言つた通りだよ。挨拶の時に『私は精霊だ』って言つたの。あ

と気のせいかもしれないけど、私の方を向いてたみたいだつた」

『なるほどね、けど向いてたつてのは少し自意識過剰じやないかしら?』

「……」

『まあいいわ。〈フラクシナス〉から観測機を出して、令音にも連絡を入れるわ』

「うん、お願ひ」

そう言つて通話を終了したと同時に、一限目の開始のチャイムが鳴り響いた。

「…シア、これを」

「ありがとうございます、令音さん」

お昼休み、令音さんに呼ばれ私は理科準備室を訪れていた。

令音さんからインカムを受け取り、ポケットにしまう。

「…彼女…狂三だが、観測の結果間違いなく精霊であることが確認された」

「本当に精霊だつたんですね」

正直半信半疑ではあつた、けれどふざけて言つてゐる様な感じでもなかつた。

それにあの時、自己紹介の時に感じたあの視線。

「…ああ、私達もまさか高校に転校してくるとは思いもしなかつた」

「そうですね」

令音さんはそう言うとふうと息を吐く。

私もまさか精霊が転校生として現れるとは思つてもみなかつた。

「…ともかく、シア気を付けて」

「はい、令音さん」

黒板の上にある時計は三時半を過ぎた所だつた。

帰りのホームルームが行われていて、教卓前に立つタマちゃん先生が連絡事項を伝えている。

何時もと変わらないホームルームの筈だつたけれど、私は緊張感に苛まれていた。

「――！」

時崎さんが時折私の方へと視線を向け、小さく手を振つてくるのだ。

その度に、無視するのも失礼だと思い、微笑み返し小さく手を振る。

「…………」「――」

その度に私の両隣・十香と折紙が鋭い視線を私に向けてくる。

「うう――」

私は一体全体どうすればいいのだろう。

溜息を吐くと同時にタマちゃん先生が教卓の上に広げていた出席簿を閉じる。

「——連絡事項は以上となります。……あ、それから、最近この近辺で失踪事件が多発しているとの事です。皆さん、出来るだけ複数人で行動して、あまり暗くならないうちにおうちに帰るとようにして下さいねえ」

まるで小学生に注意をする様にタマちゃん先生はそう言う。

今朝のニュース番組でも少し話題になっていた事を思い出した。

私や十香は兎も角、琴里には気を付けて……と思つたけれども琴里だつたらいらないかもとも思つてしまう。

そんな事を考へてゐる内に起立の号令が聞こえてくる。

号令に従い起立し、礼をする。

そしてタマちゃん先生が「はい、さよなら」と言つて教室から出していく。
同時に教室中から話し声や席を立つ音が聞こえてくる。

クラスメイト達が帰り支度や、談笑を始める中私は一人気合を入れなおす。
昼休みの内に受け取つていたインカムを取り出して右耳に着ける。

数回インカムを小突くと声が届く。

『土織、準備はいい?』

『うん、大丈夫』

『しつかし、本当に精霊だつたなんてね。——てつきり土織の妄想かと思つたわ』

「…琴里はお姉ちゃんをなんだと思つてるの…」

私のツツコミを琴里はスルーすれば、言葉を続けてくる。

『まあ、好都合じゃない。なにしろ向こうからお誘いしてくれるんだもの。それに警報も鳴つていなかからASTもちよつかい掛けてこれないでしようし。願つたりかなつたりよ』

琴里の言葉に一人頷く。

仮に折紙が連絡していたとしても大勢の学生が居る中で手は出せない筈だつた。

『兎も角、今のうちに好感度上げて、デレさせちゃいなさい』

「…あ…うん」

少し歯切れの悪い感じで返す。

琴里の言う事は最もだけれど、時崎さんの意図、目的が分から無い事に少しもやもやしていた。

『何よ、その腑抜けた返事は。まだ精霊とキスするのに抵抗があるつていうの?』

「つ――。そういう訳じや――」

少し頬を赤くして返す。

琴里はふんと息を吐いてから言う。

『あんまりお喋りしている暇はないわよ』

「え？」

琴里の言葉に疑問の声を上げたと同時に後ろから声が掛けられる。

「土織さん」

その言葉に振り向けば何時の間にか時崎さんが立っていた。

「と、時崎さん…」

「狂三」

「え？」

「狂三で構いませんわ」

「あ、それじやあ…狂三」

私が名前で呼びなおせば時崎さ…狂三是微笑む。

「学校を案内して下さるのでしょうか？…よろしくお願ひしますわ」

「う、うん」

近くで向かいあつて感じる。

折紙以上に人形の様に整つた顔立ち、所作一つ一つに優雅さや高貴さを滲ませる。

同性すらも魅了する蠱惑的な雰囲気を漂わせていた。

暫くぼうっと狂三を見ていると、狂三が首を傾げ唇を開く。

「土織さん、どうかされまして？」

「え——、あ。ごめんね、少しほうつとしちやつてて
「うふふ……では改めてよろしくお願ひしますわ」

そう言うと狂三は教室の外へと向かう。

狂三を追いかけようとするとまた声を掛けられる。

「……シオリ！」

独特な呼び方にその方向を見れば十香が居た。

十香は少しムスツとした様子でこちらを見ていた。

「十香——」

『——土織、今は狂三よ』

琴里の声がインカムから聞こえる。

同時に廊下から狂三も声を掛けてくる。

「土織さん、早くいらしてくださいまし」

『早くなさい、土織』

二人に促され、私は十香に「ごめんね」と言つてから狂三の後を追う。

狂三は教室から出てすぐの所で待っていた。

「何処から案内して下さいますの？」

狂三が小首を傾げながら言つてくる。

「ん…そうだね…」

特に行く場所を決めていなかつたので私は少し考える。するとインカムから琴里の声が響く。

『土織、ちょっと待ちなさい。こつちでも検討してみるわ』

琴里の言葉を聞けば、私は少し考えるフリをしつつ指示を待つ。しばらくすると再び琴里の声が聞こえてくる。

『土織。まずは食堂と購買部でも案内してあげなさい』

その指示を聞けば、狂三に向き直る。

「それじゃあ、食堂と購買部を案内するね。これから必要になつてくると思うから」「わかりましたわ」

私がそう言うと狂三は微笑みを浮かべながら首肯する。

そして、軽やかなステップを踏みながら私の横に立つ。

「では、参りましょーか」

「う、うん」

積極的に来る狂三に少し気圧されつつも、目的地である食堂・購買部へと歩を進める。途中の廊下では転校生である狂三を興味深そうに見る視線が多く注がれる中を歩い

ていく。

道すがら校内の簡単な説明をする。

渡り廊下に差し掛かった頃。

「今来た方が、教室棟。それでこの先が特別棟。今日は授業で使う機会がなかつたけど、理科学教室とか家庭科室がある棟だよ」

そこまで言つて隣を歩く、狂三の方へと視線を向ける。

瞬間、心臓が大きく跳ねる。

「

狂三が、髪で隠されていない右目で私の方をジッと見詰めていたのだから。

そして私と目が合うと、嬉しそうな微笑みを浮かべる。

氣恥ずかしくなり、視線を逸らす。

「あ、歩くときは前見ないと危ないよ、狂三」

私がそう言うと狂三は驚いた様な、うれしい様な「まあ！」という声と共に目を見開く。

「わたくしを気遣つて下さるだなんて、土織さんはとても優しいのですわね」

「そ、そんな事ないよ」

「ご謙遜なさらいでくださいまし」

狂三は一瞬目を伏せ、首を僅かに左右に振る。

「元はと言えば、わたくしが士織さんの横顔に見惚れてしまつたのが悪いのですわ」

そう言いながら僅かに上目遣いをしながら再び私を見つめてくる。

「み、見惚——!」

私は林檎もかくやと言わんばかりに顔を真つ赤にしてしまう。

わたわたとしている、琴里の呆れた様な声が聞こえてくる。

『ちょっと、あなたが口説かれてどうするのよ』

その声で少し平静を取り戻し、顔に手を当てながら小声で返す。

「ごめんね」

『しつかしまあ、今までにないタイプの精霊ね。完璧に人間社会に溶け込んでる事。そして向こうからの積極的なアプローチ……』

そこまで言うと琴里は考え方む様に「ふむ」と喉を鳴らす。

『兎も角、色々と情報も探りたいわね。校舎の案内を続けながら質問もしていこうから……ちようどいいところで選択肢が来たわね。すこし待ちなさい』

暫くの間を開け、再び琴里から指示が来る。

その指示に小さく「わかった」と返事を返せば、再び歩きだしながら狂三に指示通りの質問を投げ掛ける。

「そういえば…」

「どうがされましたか？」

「今朝の自己紹介の時に『私は精霊だ』なんて言つていたけど、どういう意味なの？」

私の問いかけに狂三は一瞬キヨトンとしたがすぐに、ふふっと微笑みを浮かべる。

「とぼけなくともよろしくて、土織さん。土織さんはちゃんと知つているのでしょうか？」

そう言いながら狂三は私の前へと出て、下から私の顔を覗き込む様にしながら言う。

「——精霊の、ことを」

その言葉に私は息を詰まらせる。

インカムからは琴里の訝し気な声が聞こえてくる。

『一体、何なのこの女は…土織が精霊の存在を知つていてる事を確信しているの？…一体全体どういうことよ』

そんな琴里の言葉を聞きながら私は口を開く。

「なんで…私の事を知つていてるの…？」

「ふふっ、それは秘密ですわ」

狂三是そう言いながら一指し指で自身の唇を抑える。

「え…？」

「でも…」

「わたくしがこの学校にやつて來たのは。士織さんに會うためですの。わたくし士織さんの事を知つてから、士織さんの事がずっと頭に浮かんでましたの…ですから今わたくしはすぐーーー！」

一瞬の間を開け、狂三は頬をピンク色に染めながら言う。

「幸せですか」

「——!!

私は一瞬で顔が熱くなるのを感じた。

漫画やアニメであつたなら頭から湯気が出でているかもしない。

『ちょっと。士織！しつかりなさい！』

琴里の声で我に返る。

頭を数回大きく左右に振り、一度大きく深呼吸し気持ちを落ち着ける。

「と、とりあえず案内を続けるね！」

そう言えば先導する様に狂三の脇を通り抜け歩く…。

が—通り抜けようとした瞬間、私の左手を狂三が引き留めるかの様に握つて來た。

「ひやつ！」

『なんですつて——？』

突然の事に私は素つ頓狂な声を上げ、琴里も驚きの声を上げる。

狂三の方へと振り返れば、大仰に額を押さえていた。

「ああ…わたくし実はひどい貧血持ちですの。土織さん、よろしければ保健室へ案内してはいただけませんの?」

「え、あ…保健室だね…けど大丈夫?歩ける?」

「大丈夫ですわ…ただ—」

狂三はそう言いながら握ったままの私の左手を引っ張り、左腕を抱える様に抱きしめ私に垂れかかる。

必然、私の二の腕に狂三の胸が触れ、制服越しにでも柔らかさと身体の熱が伝わってくる。

「これなら動けますわ」

「——!?

そんな狂三の行動に目を白黒させていると

「ぬわっ!」
「つ」

そんな声と同時に何かが倒れる様なたましい音が鳴り響く。

その音に振り向けば、廊下に設置されている掃除ロツカーや倒れていて、

中身のモップや箒などの掃除道具が散乱していた。

そして倒れた掃除ロッカーの陰に折り重なる様に倒れている人が一。

「ど…十香それに折紙!」

「あらあら?」

間違いなく十香と折紙だつた。

二人は狂三を見れば勢いよく立ち上がり声を上げる。

「シ、シオリ! なな、なんなのだ! その、あれは!」

「時崎狂三。学校案内で手を握るどころか、腕を抱く必要性は皆無のはず。今すぐ離れるべき」

「そう! それだ!」

普段は折紙と険悪な仲の十香が折紙の言葉に同意をしながら私を…正確には狂三に抱かれた腕を指さす。

「こ、これは…」

「これは貧血で動けないわたくしにお優しい士織さんが肩を貸して下さったのですわ。士織さんを責めないであげてくださいまし」

私が説明するよりも早く狂三がそう言えれば、より一層腕を強く抱く。

狂三の説明を聞いた二人から詰問する様な鋭い視線が飛ぶ。

私は反射的にコクコクと頭を振り肯定の意を伝える。

すると折紙が一瞬思案顔を浮かべたかと思えば、頭を押さえながら崩れる様に膝を突く。

「お、折紙!?

驚きの声を上げれば折紙が顔を上げる。

「私も貧血持ち」

「…………」

一瞬場に冷たい風が吹いた様な気がした。

「とても一人では歩けない」

「…………」

「優しい人」

「……肩、貸すよ?」

プレッシャーに負けて私はそう言う。

お義母さんはダメと言える人間になりたいです。

折紙はその言葉を聞けば貧血と言つたのはなんだつたのかというスピードで狂三と

同じ：狂三以上に強く私の右腕を抱き、ピタリと身体を寄せて来る。

そんな二人の様子を見ていた十香は得意げな顔をしながら言う。

「二人とも情けないな！」

そう言いながら腕組みをしようとして突然ハツとした顔になる。
そして折紙の真似なのか、床に膝を突き。

「シオリ！ 私もヒンケツなのだ！」

「そ、 そういうの……？」

「う、 うむ。 とても一人では歩けないのだ！」

「…………」

『修羅場ね』

琴里のボソッとしたつぶやきが聞こえてくる。

私にどうしろと言うのだろう。

そんな沈黙を打ち破る様にどこからか携帯のバイブ音が聞こえて来た。

「――もしもし」

どうやら携帯の持ち主は折紙だつた様だ。

折紙は時折相づちを打ちながら私を挟んだ向かい側の狂三に鋭い視線を向ける。

「――了解した」

そして電話を切ると、私の右手を一度握り締めたあと身体を離す。

「急用ができた」

そう言えば再び狂三に敵意が籠つた視線を向け。

歩き出す。

去り際に私にしか聞こえない声量で言う。

「時崎狂三に気をつけて」

「え？」

去つていく折紙を見送ると、十香が空いた右腕に抱き着いてくる。

狂三も新しく抱き着いてきた十香に視線を向けてから声を出す。

「土織さん、お願ひしますわ」

「え？ あ、うん」

狂三に促されると私は両腕を抱かれたまま校舎を進む。

——道中写真を撮られたり、黄色い悲鳴を上げられたのは気のせいではないと思う。

「つ、疲れた……」

午後7時

その後なんとか狂三の案内を終えた私は家に帰るとリビングのソファに横になり、

そんな声を上げる。

お行儀は悪いが気にしていられる元気もなかつた。
とは言え、夕食の支度もある為起き上がりろうとする。
と――。

ピンポーン

玄関の呼び鈴を鳴らす音が聞こえて來た。

私は身体を起こせば、リビングを出て玄関へと向かう。

途中階段を下る音と共に琴里が姿を現す。

「おー、おねーちゃんが出るのか!」

白色のリボンに結び変え私服に着替えた琴里はそう言いながら階段を降りきる。

「うん、琴里はリビングで待つてね」

そう言いながら玄関の扉を開ける。

そこには水色のパークーにキュロットスカートというカジュアルな服装に身を包んだ。

恐らく琴里と同年代くらいの女の子が立っていた。

「え……」

そしてその顔立ちを見て、私は驚きの声を上げる。

ちようど私が琴里ぐらいの頃にそつくりだつた

違うところと言えば左目元の泣き黒子とポニーテールになつてゐる髪型くらいだつた。

そして目の前の女の子は私の顔を見れば私と同じか、それ以上に驚愕の表情を浮かべる。

「ね——」

震える唇で女の子が声を発する。

「ね？」

私が聞き返すと、女の子は私の胸に勢いよく飛び込んできた。

そして私の身体に手を回し、ぎゅううつと抱き着いてくる。

私は後ろにいる琴里が状況が呑み込めず茫然としていると、夕食を食べに来た十香と四糸乃が玄関へと姿を現す。

「ど、どうしたのだ!?」

「だ、い丈夫ですか、土織……さん」

そして抱き着いていた女の子が私の胸に顔をうずめながら言う。

「——姉様つ!!」

「え……ええつ!?」

「へ?
なぬう!?
」